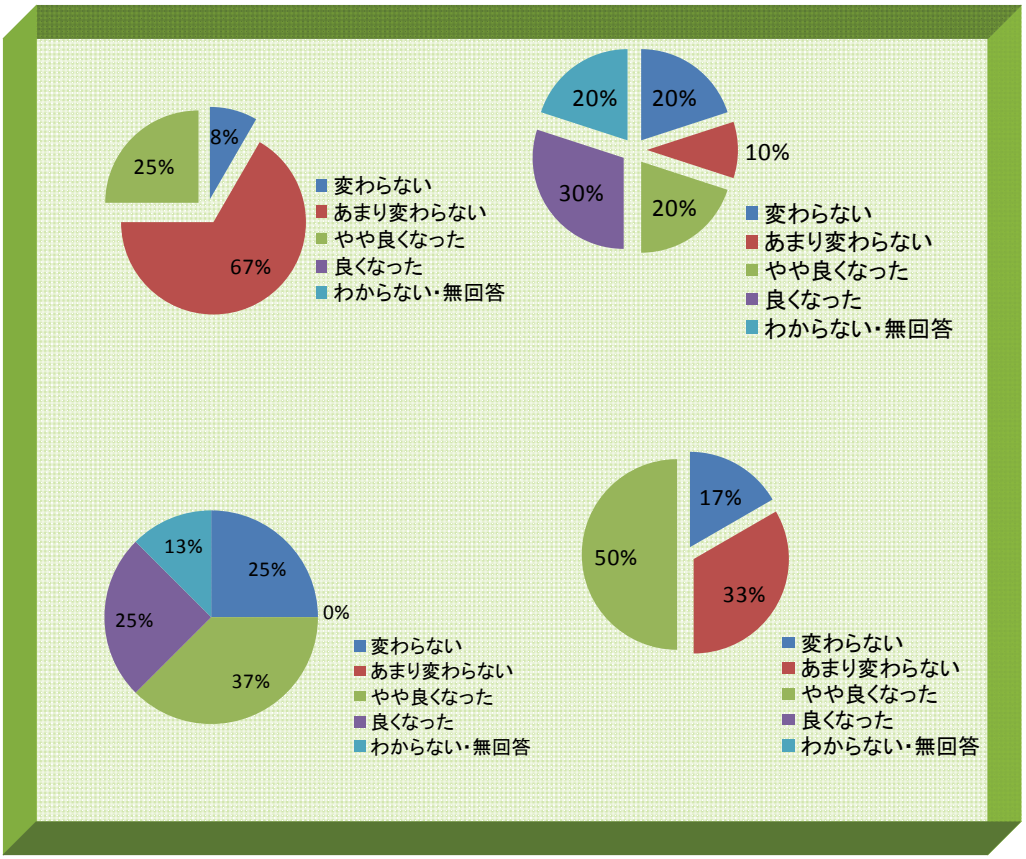
福井県立大学

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2007



2008 年 3 月

教育学習支援チーム

はじめに

福井県立大学は，2007 年 4 月から公立大学法人　福井県立大学として新しい第 1 歩を踏み出しました．それに伴い，教務委員会 FD 部会は，教育学習支援チームとして活動していくことになりました．本チームは，FD 活動の推進と教育の情報化活動の具体的な運営を期待されて発足されたものです．

本学における FD 活動は，2003 年から始まり今年で 5 年目を迎えようとしております．FD 事業は，学生による授業評価からはじまり，研修会への参加，外部から講師を招いての講演会，また，教員それぞれの授業の公開等々，さまざまな取り組みに発展してまいりました．これらの事業は教員の皆様の教育に対する熱意の賜物と思っております．特に今年になって開催されました学術教養センター主催の初年度教育（大学 1 年次生の教育）では，各学部から教員が出席し「教養ゼミにおける少人数教育」についてのプレゼンテーションとその後ディスカッションを行いました．これは教育の本髄に触れる有意義な内容でした．教育の対象である学生の特性を踏まえると同時に，本学の教育の理念，高い理想の融合を実現することこそこれからの教育の重要な課題であると考えています．これからは，本学教員の教育観や理念，教育の方法論等に関するディスカッションの場を学部・学科を越えて設け，相互に高めていくことが必要かと思います．

5 年間継続してまいりました，学生による授業評価は，実施することに意味があるのではなく，評価を教育に活かすことに意味があると思います．評価結果にはさまざまな要素が含まれているのではないでしょうか．例えば，100 名を越す大教室での授業と少人数の 10 名の授業では，全く異なります．また，授業科目の性格によっても違います．視覚や聴覚触覚からわかったと感じられる授業もあるでしょう．しかし，学生が深く思考することを目的にする授業もあるでしょう．実習や実験のように学生自身が活動しながら学ぶ授業もあるでしょう．このように異なる性格の授業を評価し，一律に数値で比較することは根本的に不可能であると思います．すなわち，教員一人一人の授業評価の結果は，当該教員が自分の次の教育活動に活かすことが最も相応しい活用方法と考えます．

授業評価は教員と学生が一体となって，はじめて可能になります．そこには学生の多大な協力があって成り立っています．学生の協力に報いるのは，評価結果を教員一人一人が次の教育に活かすことであると思います．

学生の協力に対して感謝の意を表すると同時に，FD 事業に参加いただきました教員の皆様と FD 事業の運営を行っていただきました菊沢正裕教授，チームの先生方に感謝いたします．

2008 年 3 月

教育学習支援チーム代表　交野　好子

目次

はじめに ---------- i

1. 活動概要 ---------- 1

1.1 委員の構成 ---------- 1

1.2 会議録 ---------- 1

1.3 ウェブサイト ---------- 6

1.4 FD 事業経費 ---------- 7

1.5 事業概要 ---------- 7

1.5.1 授業評価の概要 ---------- 7

1.5.2 授業公開の概要 ---------- 17

1.5.3 FD 研修の概要 ---------- 18

2. 各部局の FD 活動 ---------- 19

2.1 経済学部 ---------- 19

2.1.1 授業公開 ---------- 19

2.1.2 FD 研修 ---------- 25

2.1.3 総括 ---------- 27

2.2 **生物資源学部** ---------- 28

2.2.1 生物資源学科（授業公開，FD セミナー） ---------- 28

2.2.2 海洋生物資源学科（授業公開，FD セミナー） ---------- 31

2.3 看護福祉学部 ---------- 34

2.3.1 授業公開 ---------- 34

2.3.2 FD 研修 ---------- 41

2.4 学術教養センター ---------- 64

2.4.1 授業公開 ---------- 64

2.4.2 FD 研修 ---------- 66

3. 授業評価に関する点検 ---------- 74

3.1 授経年変化 ---------- 74

3.2 教員へのアンケート ---------- 77

3.2.1 アンケートの概要 ---------- 77

3.2.2 教員の意見 ---------- 78

おわりに ---------- 86

1. 活動概要

1.1 委員の構成

チームの規定（規定第 12 号）により教育担当理事をチーム長とし，メンバーを理事が選考する．2007 年度に選考されたメンバーは，各部局において FD 担当と教育の情報化担当の教員をそれぞれ 1 名以上配置することを念頭に選考された以下の 11 名の教員と 5 名の職員から構成される．任期は 2 年（再任可）とされるが，構成メンバーの大半が FD の新しい経験者であるため今年度最後の会議で「原則として半数が 2 年，残りが 3 年担当する」と合意した．

2007 年度チーム委員名簿

氏名	所属	役割	主たる担当
交野　好子	理事（教育担当）	チーム長	統括
廣瀬　弘毅	経済学科	委　　員	FD
佐野　一雄	経済学科	委　　員	教育の情報化
木元　　久	生物資源学科	委　　員	FD
日び　隆雄	生物資源学科	委　　員	教育の情報化
近藤　竜二	海洋生物資源学科	委　　員	FD
水田　尚志	海洋生物資源学科	委　　員	教育の情報化
本田　和正	看護学科	委　　員	FD・教育の情報化
塚本　利幸	社会福祉学科	委　　員	FD・教育の情報化
亀田　勝見	学術教養センター	委　　員	FD
菊沢　正裕	学術教養センター	リーダー	FD
山川　　修	学術教養センター	リーダー	教育の情報化
江守喜久子	教育・学生支援部	事務局	統括
田中　典子	教育推進課	事務局	統括
大野　史博	情報ネットワーク管理室	事務局	事務局（教育の情報化）
西本　佳代	教育推進課	事務局	事務局（福井C)
杉村美奈子	企画サービス室（小浜C)	事務局	事務局（小浜C)

1.2 会議録

■　第 1 回会議録

開催日時 平成19年５月１０日（木）　９：00～１０：１０

開催場所 福井キャンパス管理棟特別会議室

小浜キャンパス海洋生物資源学科棟テレビ会議室

○構成員

出席者 交野副学長（教育）、廣瀬准教授（経済学部）、木元准教授（生物資源学部）、日并准教授（生物資源学部）、近藤准教授（生物資源学部）水田准教授（生物資源学部）、本田教授（看護福祉学部）、塚本准教授（看護福祉学部）、菊沢教授（学術教養センター）、山川教授（学術教養センター）、亀田准教授（学術教養センター）（以上11名）

欠席者 佐野准教授（経済学部）

○事務局 松村教育・学生支援部長、紙谷総括主任、大野主任、西本主事、杉村主事（以上５名）

議事の概要

１ チーム員紹介 （資料1）

チーム員として海洋生物資源学科の水田准教授が参加することが紹介された。
２ 審議事項
（１）１９年度の活動について
・FD
資料2およびFD報告書に基づき、菊沢教授から平成１８年度の取組みが報告された。
１９年度については、①授業評価は事務局主体で実施、②授業公開・FD研修はチーム員のリーダーシップで実施、③FDサイトの運営は菊沢教授が行うことが承認された。
・教育の情報化
山川教授から資料に基づき、これまでの取組みが報告された。
今後の課題として、①WebCTライセンス期限切れに伴う平成20年度からの予算措置の要望が提案された。審議の結果、財政的に厳しい中でもあり、WebCTの必要性や他のソフトとのコスト比較など今後検討した上で、チームとして要求していくことが承認された。
②チームの役割については、教育の情報化を推進するに当たっての具体的活動内容については、教育研究審議会や委員会に提言していくことが確認された。
（２）その他
① 菊沢教授から本学が昨年作成した「WebCTの学内普及用ビデオ」を和歌山大学の学内LANに載せたい旨の依頼があったことが報告された。著作権や出演者の許可や了解が得られれば大学の宣伝にもなるのでよいとの意見が出された。
② 副学長から中期計画年度計画の案について資料に基づき説明があり、意見および設定できる数値目標があれば連絡してほしいとの依頼があった。
③ メーリングリストを作成し、メールでの会議や連絡を行うこととした。
④ チームリーダーについて交野副学長からFDは菊沢教授に、教育の情報化は山川教授に依頼があり了承された。
⑤ 授業評価をもっと早く行いたいとの要望があり、WebCT利用が可能なこと、昨年の用紙の利用が可能なことが説明された。
⑥ 授業公開を拒否された場合の対応については、授業公開は教員の自主的判断によるものであることから強制はできないことが確認された。

■ 第２回会議録
開催日時 平成19年９月６日（木） １３：10～１４：３０
開催場所 福井キャンパス管理棟大会議室
小浜キャンパス学科長室
○構成員
出席者 交野副学長（教育）、廣瀬准教授（経済学部）、木元准教授（生物資源学部）、日并准教授（生物資源学部）、近藤准教授（生物資源学部）、本田教授（看護福祉学部）、塚本准教授（看護福祉学部）、菊沢教授（学術教養センター）、山川教授（学術教養センター）、亀田准教授（学術教養センター）（以上１０名）
欠席者 佐野准教授（経済学部）、水田准教授（生物資源学部）
○事務局 江守教育・学生支援部長、田中課長代理、大野主任、西本主事、杉村主事（以上５名）

議事の概要

１　前回議事録（案）について

平成１９年度第１回教育学習支援チーム会議議事録（案）が承認された。

２　報告事項

（１）２００７年度前期ＦＤ活動報告について

・授業評価　（資料１）（資料２）

資料に基づき、菊沢教授から前期授業評価の実施状況が報告された。調査票回収枚数について、集計業者が１つでも「該当なし」にマークした回答用紙をすべて無効扱いにしてしまったことが分かり、再集計を行っているため、修正した結果を後日お知らせすることが報告された。

・授業公開（資料３）

・学外研修（資料４）

菊沢教授から資料に基づき、これまでの授業公開と学外研修の取り組みが報告された。

（２）授業評価結果の扱いについて（資料５）

７月の教育研究審議会で、各学部長に資料のとおり教員データの取り扱いに関する依頼をしたことが報告された。それを受けて、菊沢教授が授業評価結果の分析を行い、参考資料２のとおり、毎年改善が重ねられていることが報告された。交野チーム長から、このように評価が上がっていることの分析として、教員にどのような改善努力をしたのかについて、アンケートを実施し、中期目標のＦＤに関する取り組みのひとつとしてはどうかとの提案が出され、了承された。

３　協議事項

（１）２００７年度後期ＦＤ事業実施について

・授業評価

菊沢教授から、後期の授業評価の実施期間は原則として１月１７日から１月３０日とし、それより早めに実施したい講義に関しては、その都度実施してもよいとすることが提案され、了承された。

・授業公開

授業公開については、参加教員が少ないことが指摘され、今まで授業公開に参加していない教員に参加のメリットなどを伝えるなど、教授会等を通じて働きかけていくことが確認された。

・ＦＤ研修

学外研修に参加する旅費や研修会を開催する経費は予算を確保してあることが報告された。それを受け、１０月末を目途に、各学部での取り組み予定をとりまとめ、より多くの教員が研修会などに参加できるように、調整を行うことが確認された。

（２）ケータイによる授業評価等について（資料６）

菊沢教授から携帯電話を利用した授業評価システムの紹介があり、実験的に行った取り組みの内容が報告された。

（３）遠隔講義への対応について（資料７）

菊沢教授、山川教授から現在の遠隔講義システムの説明とその問題点についての指摘があった。また、２００８年１０月には現在の遠隔講義システムやＷｅｂＣＴライセンスの更新が予定されていることも報告された。これらを受け、交野チーム長から、小浜キャンパスの学部化に併せて

予算要求を行うなど、遠隔講義の環境をよりよいものに整備していくことが提案され、了承された。

４ その他

（１）テレビ会議／講義システムのデモ実施（福井キャンパス小会議室にて）

■ 第3回会議録

開催日時 平成２０年３月６日（木） ９：00～１０：30

開催場所 福井キャンパス管理棟特別会議室

小浜キャンパステレビ会議室

○構成員

出席者 交野副学長（教育）、木元准教授（生物資源学部）、日并准教授（生物資源学部）、近藤准教授（生物資源学部）、水田准教授（生物資源学部）、本田教授（看護福祉学部）、塚本准教授（看護福祉学部）、菊沢教授（学術教養センター）、山川教授（学術教養センター）、亀田准教授（学術教養センター）（以上１０名）

欠席者 佐野准教授（経済学部）、廣瀬准教授（経済学部）

○事務局 江守教育・学生支援部長、田中課長代理、大野主任、西本主事（以上４名）

議事の概要

１ 前回議事録（案）について

平成19年度第２回教育学習支援チーム会議議事録（案）が承認された。

２ 報告事項

（１）２００７年度ＦＤ活動報告

・授業評価結果

事務局から、後期授業評価の集計結果は３月後半に各教員に送付することが報告された。

・公開授業結果（資料１）

・ＦＤ研修の結果（資料２）

菊沢教授から資料に基づき、２００７年度の授業公開とＦＤ研修の取り組みが報告された。

・決算報告（資料３）

事務局から資料に基づき２００７年度の決算見込みが報告された。

（２）授業評価事業に関する点検について（資料４）

菊沢教授から、資料に基づき、２月後半に実施した授業評価に関する教員へのアンケート結果が報告された。また、これらの結果をＦＤのサイトに公開することが提案され、了承された。

（３）教育の情報化について（資料５）

山川教授から、これまでのＷｅｂＣＴに代わる新しい授業支援システム（ＢｂＬＳ）の講習会を４月に開催する予定であることが報告され、参加が呼びかけられた。また、講習会開催案内を全教員にメールで通知することが確認された。

３ 協議事項

（１）２００７年度活動報告書の作成について（資料６）

２００６年度と同様に、２００７年度ＦＤ活動報告書を作成することが決定された。内容

として、総論で事業全体の結果をまとめ、各論は部局単位で作成することが了承された。期限は３月末とし、それまでにページ数を確定させることも併せて確認された。

（２）ＦＤ活動の今後の取組みについて

菊沢教授から、教員へのアンケート結果で、授業評価アンケートの実施時期やその方法を適宜見直す必要があるなどの意見が多くあったことが報告された。また、その結果の分析や 利用方法などについても、今後議論する必要があることが指摘され、検討していくことが確認された。

（３）教育の情報化の今後の取組みについて

現在のＷｅｂＣＴの利用について、教員が使用する際の不便さや、利用環境の不備などの問題点が指摘された。これらを受け、サポート体制を整えることなど、利用を促進する方法を検討していくことが確認された。また、すでにそれらを利用している教員の手法などを公開する機会を持ち、参考にしていくことも併せて検討することが了承された。

（４）委員の交代方式について

菊沢教授から、チーム委員の構成について、来年度も引き続き同じメンバーでＦＤ活動を推進し、２１年度からは半数ずつ交代してはどうかとの提案があり、了承された。

（５）ＦＤで予算要求した印刷機について

公開授業での教員からの要望に基づき、新しい印刷機が生物資源学部棟４階に設置されることが、交野委員長から報告された。設置場所は生物棟であるが、他部局の教員も使用できることも確認された。ただし、今年１２月でリース期限が切れる生物棟の印刷機の代わりには、新しい印刷機は導入されないことが報告された。

1.3　ウェブサイト

ファカルティ・ディベロップメン活動の速報と情報の蓄積を目的として，2005 年 7 月より，ホームページ（以下，FD サイトという）を運営している．本学ウェブサイトのトップページの「大学の取組み」から「ファカルティ・ディベロップメント」を経て入ることができる．2007 年度より，チームトップページを経て FD のページに入る構成となっている．両ページを下に示す．また，図書館 1 階閲覧室の入口右側の棚に，FD 資料コーナー（写真）を常設設し，F 関連資料のほか，FD の案内やイベント申込資料も置いています．ご利用下さい．

1.4 FD 事業経費

2007年度のFD事業経理の大項目経費と細目を以下に示す. 大学院の授業評価の新規実施にともない，調査票を新たに作成（学部兼用できるように工夫）したこと等によって委託料が昨年よりアップしているほかは，昨年より活動のわりに緊縮経費となっている．旅費は招聘が減少，学外研修旅費（派遣）を増やした.

２００７年度　ＦＤ事業経費

費目	項目	細目	実績
報償費			**200,000**
	研修講師	FD研修講師(11/29生物資源学部)	50,000
	研修講師	FD研修講師(3/1　看護福祉学部看護学科)	50,000
	研修講師	FD研修講師(12/12　看護福祉学部社会福祉学科)	50,000
	研修講師	FD研修講師(12/3　経済学部)	50,000
旅費			**225,470**
	招聘	FD研修講師(11/29生物資源学部)京都から	9,220
	派遣	FD研修参加(10/17看護福祉学部)東京　※宿泊代のみ	13,400
	派遣	FD研修参加(11/12～14看護福祉学部)千葉県木更津市から	66,070
	招聘	FD研修講師(3/1　看護福祉学部)横浜から	41,000
	招聘	FD研修講師(12/12　看護福祉学部社会福祉学科)大阪から	26,360
	招聘	FD研修講師(12/3　経済学部)　東京から	42,700
	派遣	FD研修参加(12/8学術教養センター)大阪	13,320
	派遣	CRUMPワークショップ(11/12)東京大学	13,400
消耗品費			**37,590**
		前期封筒代	21,735
		後期封筒代	15,855
委託料			**2,221,000**
報告書作成含む		前期授業評価の調査票作成と回答集計処理	961,000
		後期授業評価の調査票作成と回答集計処理	1,260,000
合計			**2,684,060**

1.5 事業概要

1.5.1 授業評価の概要

調査票と回答票は昨年度と同じであるが，今年度に実施するようになった大学院の授業と用紙を共有できるよう，また年度を越えて使用できるよう工夫している．以下には，実施概要，調査票・回答票，および実施結果を順に掲載する．なお， 4 年間 8 学期にわたり実施してきた授業評価に関する点検を４章で行う.

平成19年度前期　学生による授業評価の実施結果（前期集中講義を除く）

★実施期間
平成19年7月9日（月）～7月20日（金）
上記期間に実施が困難な場合
平成19年6月8日（金）～8月3日（金）の任意の時期

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	1,699 枚	4,599 枚
生物資源学部	1,272 枚	2,051 枚
看護福祉学部	1,572 枚	2,332 枚
学術教養センター	3,924 枚	7,813 枚
計	8,467 枚	16,795 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	50 枚	110 枚
生物資源学研究科	103 枚	159 枚
看護福祉学研究科	66 枚	100 枚
		枚
計	219 枚	369 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	34 人	97.1%
生物資源学部	31 人	100.0%
看護福祉学部	30 人	96.8%
学術教養センター	28 人	100.0%
非常勤講師	52 人	94.5%
計	175 人	

＜大学院＞		
経済学部	10 人	55.6%
生物資源学部	9 人	100.0%
看護福祉学部	10 人	83.3%
非常勤講師	8 人	72.7%
計	37 人	

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	81 科目	65.3%
生物資源学部	53 科目	86.9%
看護福祉学部	81 科目	76.4%
学術教養センター	164 科目	91.1%
計	379 科目	80.5%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	16 科目	55.2%
生物資源学研究科	11 科目	84.6%
看護福祉学研究科	17 科目	58.6%
計	44 科目	62.0%

平成19年度後期　学生による授業評価の実施結果（前期集中講義を含む）

★実施期間
平成20年1月17日（木）～1月30日（水）
上記期間に実施が困難な場合
平成19年11月27日（火）～平成20年2月15日（金）の任意の時期

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	1,967 枚	5,917 枚
生物資源学部	1,388 枚	2,837 枚
看護福祉学部	1,560 枚	3,201 枚
学術教養センター	3,157 枚	8,297 枚
計	8,072 枚	20,252 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	57 枚	175 枚
生物資源学研究科	89 枚	145 枚
看護福祉学研究科	52 枚	100 枚
		枚
計	198 枚	420 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	32 人	88.9%
生物資源学部	31 人	91.2%
看護福祉学部	29 人	93.5%
学術教養センター	28 人	100.0%
非常勤講師	64 人	94.1%
計	184 人	

＜大学院＞		
経済学部	12 人	70.6%
生物資源学部	9 人	90.0%
看護福祉学部	5 人	41.7%
非常勤講師	11 人	68.6%
計	37 人	

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	88 科目	70.4%
生物資源学部	86 科目	82.7%
看護福祉学部	75 科目	72.1%
学術教養センター	149 科目	86.1%
計	398 科目	78.7%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	15 科目	42.9%
生物資源学研究科	13 科目	92.9%
看護福祉学研究科	11 科目	40.7%
計	39 科目	51.3%

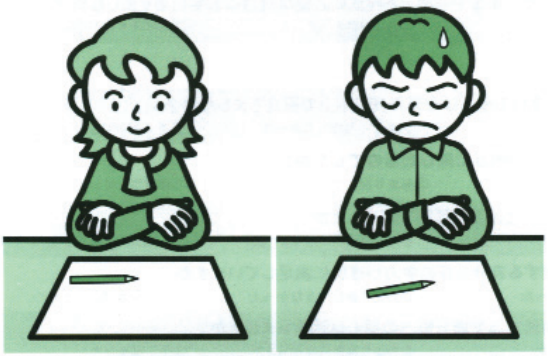
福井県立大学
授業に関する調査

質問用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業について、調査ご協力下さい。

回答は、別紙回答用紙に記入して下さい。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述して下さい。
ただし、Q1からQ18について、選択肢の中に適切な回答がどうしても見当たらない場合は、⓪をマークして下さい。



本アンケートによる（全学、学部別等）授業評価結果は、本学ホームページ上で今学期末に開示予定です。
過去の集計結果は http://www.s.fpu.ac.jp/fd/fpuinfo.html をご覧下さい。

1 あなた自身について

Q1 この授業に毎回出席しましたか？
①半分以上出席しなかった　②6-8割程度出席した　③ほとんど毎回出席した

Q2 この授業の目標や目的（シラバスに記載）についてどの程度知っていましたか？
①知らなかった　②漠然と知っていた　③明確に知っていた

Q3 この授業（課題・レポートを含む）に意欲的に取り組みましたか？
①意欲的ではなかった　②あまり意欲的に取り組まなかった　③ある程度意欲的に取り組んだ　④意欲的に取り組んだ

Q4 この授業でわからなかった箇所について担当教員に質問しましたか？
質問しなかった場合は、その理由を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。
①内容が理解できないので質問しなかった　②聞きたいことはあったが質問しなかった　③よく理解できたので質問しなかった　④質問したことがある

2 担当教員について

Q5 授業に対する先生の積極的な取り組みや工夫を感じましたか？
①感じなかった　②あまり感じなかった　③ある程度感じた　④感じた

Q6 質問しやすい雰囲気でしたか？
①しやすい雰囲気ではなかった　②あまりしやすい雰囲気ではなかった　③ある程度しやすい雰囲気だった　④しやすい雰囲気だった

Q7 授業中の学生に対する態度は公平でしたか？
①不公平　②やや不公平　③まずまず公平　④公平

Q8 先生の時間の使い方や授業の速度はどうでしたか？
①不適切　②やや不適切　③まずまず適切　④適切

Q9 先生の授業の方法（話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム［WebCT等］の活用など）はどうでしたか？また、不適切な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。
①不適切　②やや不適切　③まずまず適切　④適切

3 設備・環境等について

Q10 教材（教科書・配布資料・実習要綱・オリエンテーション資料など）は役立ちましたか？
また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。
①役立たなかった　②あまり役立たなかった　③ある程度役立った　④役立った

Q11 教室の環境や設備等（照明・空調・マイク音声・プロジェクター・パソコン・実験実習用機器類の調子など）に不備はありましたか？ また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。
①不備が多かった　②不備がある程度あった　③まずまずの環境だった　④快適な環境だった

Q12 この授業の予習・復習やレポート作成に必要な資料は大学にありましたか？
①無かった　②あまり無かった　③まずまず揃っていた　④揃っていた

4 授業内容について

Q13 シラバスに含まれる情報は授業を受ける上で役立ちましたか？
①役立たなかった　②あまり役立たなかった　③ある程度役立った　④役立った

Q14 授業はシラバスの内容に則したものでしたか？
①則していなかった　②あまり則していなかった　③ある程度則していた　④則していた

Q15 授業中の内容はどの程度理解できましたか？
①理解できなかった　②あまり理解できなかった　③ある程度理解できた　④理解できた

Q16 この授業に対する自分自身の学力到達度に満足していますか？
①満足できなかった　②あまり満足できなかった　③ある程度満足できた　④満足できた

Q17 この授業に関連する学問分野への関心は高まりましたか？
①高まらなかった　②あまり高まらなかった　③少し高まった　④高まった

5 授業全体について

Q18 この授業を総合的に評価して下さい。
①良くない　②あまり良くない　③まずまず良い　④良い

Q19 授業を受けた上での感想など自由に書いて下さい。

Q20 教員設定の質問（別紙参照）
①　②　③　④

Q21 教員設定の質問（別紙参照）

ご協力ありがとうございました

福井県立大学

授業に関する調査

回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業について、調査ご協力下さい。

回答は、裏面に記入して下さい。

別紙質問用紙の問に対して、
選択回答の場合は、マークシート記入を、
選択回答の場合は、右側空欄に記述を、
して下さい。

記入上の注意

1：記入は、濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いて下さい。
2：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消して下さい。
3：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないで下さい。

マーク例） 良い例 (02)…▶● 悪い例 (02)…▶(02) (02) (02) (02)

学籍番号の上2桁の数字をマークして下さい。

00 01 02 03 04 05 06 07 08 09 10

(例)平成19年4月入学生…07

学 部 生 所属の番号をマークして下さい。

1:経済学部経済学科 2:経済学部経営学科 3:生物資源学部生物資源学科
4:生物資源学部海洋生物資源学科 5:看護福祉学部看護学科
6:看護福祉学部社会福祉学科 7:科目等履修生・聴講生

1 2 3 4 5 6 7

大学院生 所属の番号をマークして下さい。

8:経済・経営学研究科 地域・国際経済政策専攻
9:経済・経営学研究科 経営学専攻
10:生物資源学研究科 生物資源学専攻
11:生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻
12:看護福祉学研究科 看護学専攻
13:看護福祉学研究科 社会福祉学専攻
14:科目等履修生・聴講生

8 9 10 11 12 13 14

1 あなた自身について

Q1	1	2	3		0
Q2	1	2	3		0
Q3	1	2	3	4	0
Q4	1	2	3	4	0

2 担当教員について

Q5	1	2	3	4	0
Q6	1	2	3	4	0
Q7	1	2	3	4	0
Q8	1	2	3	4	0
Q9	1	2	3	4	0

3 設備・環境等について

Q10	1	2	3	4	0
Q11	1	2	3	4	0
Q12	1	2	3	4	0

4 授業内容について

Q13	1	2	3	4	0
Q14	1	2	3	4	0
Q15	1	2	3	4	0
Q16	1	2	3	4	0
Q17	1	2	3	4	0

5 授業全体について

Q18	1	2	3	4	0
Q19					
Q20	1	2	3	4	
Q21					

記述回答は、『強く濃く』枠内に収め記入して下さい。

「質問しなかった」場合は、その理由を具体的に記載して下さい。

Q4

授業方法について不適切な点を具体的に記載して下さい。

Q9

教材について不備な点を具体的に記載して下さい。

Q10

教室について不備な点を具体的に記載して下さい。

Q11

授業を受けた上での感想など自由に記載して下さい。

Q19

回答を記載して下さい。

Q21

ご協力ありがとうございました

集計グループ（集計数）	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
全体（6669）	**2.78**	**2.35**	**3.12**	**2.97**	**3.25**	**3.09**	**3.45**	**3.25**	**3.24**	**3.21**	**3.23**	**3.12**	**3.03**	**3.25**	**3.11**	**3.01**	**3.16**	**3.28**
	0.45	**0.57**	**0.65**	**0.86**	**0.69**	**0.81**	**0.63**	**0.69**	**0.68**	**0.66**	**0.62**	**0.66**	**0.68**	**0.58**	**0.68**	**0.74**	**0.73**	**0.68**
学部学科別（6669）																		
経済学部（2837）	2.69	2.27	3.06	2.83	3.18	2.99	3.42	3.19	3.18	3.13	3.17	3.05	2.95	3.20	3.01	2.90	3.09	3.24
	0.53	0.57	0.67	0.91	0.70	0.83	0.65	0.69	0.69	0.69	0.62	0.68	0.69	0.59	0.70	0.76	0.73	0.69
経済学科（1465）	2.68	2.28	3.06	2.82	3.20	2.99	3.43	3.21	3.19	3.14	3.17	3.06	2.97	3.19	3.01	2.90	3.08	3.24
	0.55	0.57	0.67	0.90	0.70	0.83	0.64	0.69	0.68	0.69	0.62	0.68	0.69	0.61	0.68	0.75	0.73	0.68
経営学科（1372）	2.71	2.26	3.06	2.83	3.16	2.98	3.41	3.18	3.18	3.12	3.18	3.04	2.94	3.20	3.01	2.90	3.09	3.24
	0.51	0.57	0.68	0.92	0.70	0.83	0.66	0.70	0.70	0.68	0.62	0.68	0.69	0.57	0.71	0.77	0.74	0.69
生物資源学部（1852）	2.83	2.40	3.12	3.06	3.24	3.12	3.43	3.27	3.24	3.25	3.27	3.16	3.05	3.28	3.15	3.05	3.17	3.28
	0.39	0.58	0.65	0.82	0.69	0.77	0.62	0.68	0.68	0.64	0.63	0.66	0.69	0.57	0.66	0.71	0.73	0.69
生物資源学科（866）	2.82	2.40	3.04	2.98	3.21	3.06	3.39	3.23	3.21	3.17	3.24	3.12	2.98	3.21	3.10	3.00	3.11	3.24
	0.41	0.57	0.61	0.76	0.67	0.74	0.61	0.64	0.65	0.62	0.56	0.62	0.63	0.53	0.61	0.69	0.72	0.70
海洋生物資源学科（986）	2.84	2.41	3.19	3.13	3.27	3.18	3.46	3.31	3.28	3.31	3.28	3.19	3.11	3.34	3.19	3.09	3.21	3.31
	0.38	0.59	0.68	0.86	0.71	0.78	0.62	0.71	0.70	0.65	0.68	0.69	0.73	0.59	0.70	0.73	0.74	0.68
看護福祉学部（1973）	2.87	2.41	3.21	3.11	3.35	3.20	3.50	3.32	3.32	3.29	3.29	3.19	3.14	3.29	3.20	3.12	3.27	3.34
	0.35	0.55	0.62	0.77	0.64	0.78	0.62	0.67	0.67	0.62	0.61	0.61	0.66	0.58	0.67	0.72	0.71	0.67
看護学科（1156）	2.86	2.41	3.20	3.06	3.28	3.13	3.43	3.26	3.26	3.25	3.25	3.16	3.10	3.26	3.17	3.08	3.21	3.28
	0.36	0.57	0.61	0.77	0.66	0.80	0.64	0.69	0.68	0.64	0.62	0.62	0.67	0.60	0.67	0.73	0.72	0.68
社会福祉学科（817）	2.88	2.42	3.24	3.18	3.45	3.30	3.60	3.40	3.41	3.35	3.36	3.23	3.18	3.33	3.25	3.18	3.35	3.43
	0.33	0.52	0.63	0.78	0.60	0.75	0.57	0.65	0.63	0.59	0.58	0.59	0.63	0.56	0.65	0.69	0.68	0.63
科目等履修生・聴講生（ 7）	2.86	2.00	2.86	2.71	3.57	3.00	3.29	3.00	3.14	3.00	3.29	2.86	3.00	3.14	2.86	2.86	2.86	3.14
	0.35	0.53	0.64	0.45	0.49	0.76	0.70	0.53	0.35	0.53	0.45	0.64	0.53	0.64	0.35	0.83	0.99	0.99
入学年次別（6669）																		
97生（ 3）	3.00	2.00	2.67	3.00	3.00	2.67	3.33	3.00	3.00	3.00	3.33	2.67	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.33
	0.00	0.82	0.47	0.00	0.00	0.47	0.47	0.00	0.00	0.00	0.47	0.47	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.47
98生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
99生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
00生（ 1）	1.00	3.00	3.00	3.00	2.00	3.00	4.00	3.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
01生（ 8）	2.13	2.75	3.25	3.13	3.13	3.25	3.63	3.50	3.38	3.38	3.38	3.25	3.50	3.63	3.25	3.13	3.75	3.63
	0.33	0.66	1.09	0.60	1.17	1.09	0.48	0.71	0.70	0.70	0.99	0.83	0.50	0.70	1.09	1.05	0.43	0.70
02生（ 2）	3.00	3.00	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50	3.50
	0.00	0.00	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50	0.50
03生（ 3）	2.67	2.33	3.33	3.33	3.33	3.33	3.67	3.33	3.33	3.00	2.67	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.33
	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.00	0.47	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.47
04生（214）	2.54	2.50	3.23	3.15	3.50	3.29	3.62	3.45	3.43	3.43	3.43	3.20	3.21	3.43	3.34	3.18	3.39	3.51
	0.63	0.59	0.77	0.87	0.62	0.80	0.57	0.64	0.61	0.64	0.58	0.76	0.77	0.56	0.66	0.77	0.71	0.62
05生（1568）	2.78	2.45	3.15	3.11	3.32	3.22	3.42	3.29	3.30	3.27	3.25	3.19	3.13	3.30	3.21	3.11	3.23	3.33
	0.46	0.57	0.65	0.80	0.65	0.73	0.62	0.69	0.65	0.62	0.63	0.62	0.67	0.58	0.64	0.71	0.71	0.66
06生（2216）	2.81	2.45	3.14	3.01	3.31	3.17	3.42	3.28	3.28	3.22	3.24	3.17	3.13	3.23	3.16	3.11	3.25	3.34
	0.44	0.56	0.63	0.79	0.63	0.75	0.61	0.65	0.62	0.62	0.59	0.61	0.63	0.59	0.65	0.69	0.67	0.65
07生（2654）	2.79	2.19	3.08	2.85	3.14	2.92	3.47	3.19	3.16	3.15	3.20	3.04	2.88	3.21	2.98	2.84	3.03	3.18
	0.43	0.54	0.67	0.92	0.73	0.86	0.66	0.72	0.74	0.70	0.64	0.69	0.70	0.58	0.71	0.77	0.77	0.72
部局別（6669）																		
経済学部（1350）	2.69	2.27	3.02	2.72	3.17	2.93	3.42	3.16	3.14	3.14	3.13	3.07	2.94	3.18	2.95	2.83	3.06	3.22
	0.55	0.58	0.68	0.92	0.70	0.85	0.63	0.70	0.69	0.66	0.61	0.62	0.66	0.57	0.71	0.79	0.74	0.67
生物資源学部（1135）	2.87	2.47	3.13	3.10	3.26	3.19	3.41	3.28	3.25	3.27	3.27	3.18	3.09	3.29	3.17	3.07	3.19	3.29
	0.35	0.58	0.64	0.82	0.66	0.73	0.60	0.66	0.64	0.63	0.62	0.64	0.68	0.57	0.65	0.70	0.72	0.67
看護福祉学部（1279）	2.91	2.47	3.28	3.18	3.46	3.32	3.55	3.37	3.40	3.36	3.33	3.26	3.23	3.34	3.31	3.24	3.40	3.44
	0.29	0.54	0.61	0.72	0.60	0.70	0.57	0.67	0.62	0.59	0.61	0.59	0.63	0.57	0.62	0.67	0.65	0.62
一般教養（2905）	2.74	2.29	3.09	2.95	3.19	3.02	3.43	3.23	3.22	3.16	3.23	3.06	2.97	3.22	3.06	2.96	3.10	3.23
	0.48	0.56	0.66	0.86	0.71	0.83	0.67	0.69	0.71	0.68	0.62	0.70	0.70	0.59	0.68	0.74	0.74	0.71
規模別（6669）																		
100人以上（3239）	2.75	2.28	3.03	2.78	3.17	2.93	3.42	3.18	3.15	3.15	3.16	3.07	2.96	3.20	2.98	2.88	3.07	3.18
	0.49	0.57	0.67	0.88	0.70	0.83	0.63	0.69	0.72	0.66	0.63	0.63	0.68	0.57	0.71	0.77	0.75	0.69
100人未満（3430）	2.81	2.42	3.20	3.16	3.32	3.24	3.47	3.32	3.33	3.27	3.30	3.17	3.10	3.29	3.22	3.13	3.25	3.38
	0.41	0.56	0.63	0.80	0.66	0.76	0.63	0.67	0.64	0.65	0.60	0.68	0.68	0.59	0.63	0.69	0.70	0.66

全体集計結果（学部・後期）

集計グループ（集計数）	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
全体（8244）	**2.77**	**2.35**	**3.15**	**3.01**	**3.30**	**3.13**	**3.45**	**3.28**	**3.27**	**3.24**	**3.26**	**3.16**	**3.08**	**3.26**	**3.14**	**3.06**	**3.23**	**3.33**
	0.46	**0.60**	**0.65**	**0.83**	**0.66**	**0.78**	**0.62**	**0.66**	**0.66**	**0.64**	**0.61**	**0.62**	**0.65**	**0.57**	**0.66**	**0.70**	**0.69**	**0.66**
学部学科別（8244）																		
経済学部（3782）	2.69	2.29	3.07	2.88	3.24	3.06	3.44	3.25	3.22	3.19	3.21	3.09	3.03	3.23	3.06	2.97	3.17	3.30
	0.53	0.60	0.66	0.87	0.66	0.80	0.61	0.66	0.67	0.65	0.60	0.65	0.65	0.56	0.66	0.71	0.69	0.65
経済学科（1807）	2.66	2.28	3.03	2.85	3.22	3.02	3.42	3.21	3.20	3.15	3.18	3.07	2.98	3.20	3.01	2.93	3.11	3.27
	0.55	0.59	0.68	0.86	0.67	0.81	0.62	0.66	0.69	0.67	0.60	0.64	0.65	0.55	0.67	0.71	0.69	0.67
経営学科（1975）	2.71	2.30	3.10	2.91	3.27	3.09	3.45	3.28	3.24	3.22	3.24	3.11	3.07	3.27	3.10	3.01	3.22	3.32
	0.52	0.60	0.65	0.87	0.66	0.79	0.61	0.65	0.66	0.64	0.60	0.65	0.65	0.56	0.65	0.70	0.68	0.64
生物資源学部（2210）	2.84	2.39	3.20	3.06	3.32	3.21	3.43	3.31	3.29	3.28	3.27	3.19	3.09	3.27	3.16	3.10	3.25	3.33
	0.39	0.62	0.63	0.81	0.65	0.74	0.63	0.65	0.66	0.64	0.65	0.62	0.67	0.59	0.67	0.71	0.70	0.67
生物資源学科（1115）	2.86	2.39	3.13	3.01	3.30	3.16	3.44	3.31	3.31	3.26	3.29	3.18	3.06	3.26	3.14	3.08	3.22	3.32
	0.36	0.59	0.59	0.78	0.62	0.73	0.60	0.60	0.62	0.60	0.60	0.59	0.64	0.54	0.62	0.67	0.67	0.63
海洋生物資源学科（1095）	2.81	2.39	3.26	3.12	3.35	3.26	3.42	3.31	3.28	3.30	3.25	3.20	3.11	3.27	3.17	3.12	3.28	3.34
	0.42	0.64	0.66	0.83	0.67	0.75	0.66	0.69	0.69	0.68	0.69	0.66	0.70	0.64	0.71	0.74	0.73	0.71
看護福祉学部（2243）	2.85	2.39	3.23	3.17	3.36	3.18	3.49	3.32	3.33	3.30	3.32	3.23	3.16	3.29	3.25	3.18	3.32	3.38
	0.38	0.58	0.63	0.74	0.66	0.77	0.62	0.67	0.64	0.61	0.57	0.58	0.62	0.57	0.65	0.67	0.68	0.68
看護学科（1325）	2.86	2.37	3.22	3.11	3.34	3.12	3.46	3.28	3.29	3.29	3.30	3.22	3.11	3.28	3.22	3.15	3.30	3.34
	0.36	0.59	0.63	0.75	0.69	0.82	0.65	0.69	0.68	0.63	0.60	0.60	0.64	0.58	0.66	0.69	0.69	0.70
社会福祉学科（918）	2.83	2.43	3.24	3.26	3.40	3.28	3.53	3.38	3.39	3.31	3.33	3.25	3.22	3.32	3.28	3.22	3.36	3.43
	0.40	0.58	0.62	0.72	0.61	0.69	0.56	0.63	0.58	0.58	0.54	0.53	0.58	0.54	0.62	0.64	0.65	0.64
科目等履修生・聴講生（9）	2.89	3.00	3.00	3.11	3.33	3.11	3.33	3.22	3.22	3.22	3.22	3.13	3.22	3.22	3.11	3.00	3.11	3.22
	0.31	0.00	0.00	0.57	0.47	0.31	0.47	0.42	0.42	0.42	0.42	0.33	0.42	0.42	0.31	0.47	0.31	0.42
入学年次別（8244）																		
97生（1）	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
98生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
99生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
00生（10）	2.20	2.20	2.40	2.50	2.40	2.50	2.40	2.30	2.30	2.40	2.60	2.11	2.20	2.22	2.70	2.30	2.30	2.40
	0.98	0.87	1.11	1.12	1.20	1.36	1.28	1.10	1.10	1.20	1.11	0.99	1.08	1.13	1.19	1.10	1.19	1.20
01生（22）	2.86	2.77	3.50	3.27	3.27	3.32	3.50	3.32	3.55	3.36	3.50	3.32	3.36	3.41	3.41	3.50	3.45	3.50
	0.34	0.42	0.58	0.69	0.75	0.70	0.58	0.70	0.50	0.57	0.58	0.63	0.64	0.58	0.72	0.58	0.66	0.58
02生（1）	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
03生（42）	2.69	2.31	3.22	3.05	3.45	3.31	3.56	3.38	3.55	3.48	3.31	3.12	2.85	3.23	3.05	2.95	3.43	3.52
	0.46	0.56	0.72	0.85	0.82	0.67	0.59	0.65	0.66	0.66	0.60	0.32	0.69	0.59	0.65	0.62	0.76	0.73
04生（599）	2.65	2.25	3.16	3.14	3.44	3.19	3.58	3.35	3.39	3.28	3.29	3.11	3.01	3.28	3.18	3.10	3.29	3.41
	0.59	0.59	0.70	0.91	0.65	0.83	0.60	0.69	0.67	0.70	0.66	0.72	0.74	0.59	0.72	0.76	0.76	0.68
05生（1204）	2.77	2.38	3.19	3.12	3.33	3.25	3.48	3.31	3.31	3.28	3.29	3.18	3.09	3.30	3.22	3.11	3.28	3.36
	0.46	0.61	0.64	0.82	0.66	0.74	0.59	0.66	0.65	0.66	0.66	0.66	0.69	0.59	0.68	0.72	0.71	0.66
06生（2787）	2.79	2.45	3.11	3.02	3.30	3.16	3.41	3.28	3.26	3.24	3.25	3.20	3.16	3.27	3.16	3.10	3.24	3.32
	0.45	0.59	0.64	0.78	0.63	0.74	0.63	0.66	0.66	0.60	0.58	0.60	0.61	0.56	0.64	0.69	0.66	0.65
07生（3572）	2.79	2.27	3.16	2.94	3.26	3.07	3.45	3.27	3.24	3.23	3.24	3.13	3.03	3.23	3.09	3.01	3.20	3.31
	0.44	0.59	0.64	0.84	0.67	0.80	0.62	0.65	0.66	0.65	0.60	0.61	0.64	0.56	0.65	0.69	0.69	0.66
08生（6）	2.83	2.83	3.33	3.33	3.67	3.33	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.67	3.50	3.83	3.67	3.67	3.67	3.67
	0.37	0.37	0.75	1.11	0.47	0.94	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	0.76	0.37	0.47	0.47	0.47	0.47
09生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
部局別（8244）																		
経済学部（1967）	2.67	2.28	3.00	2.81	3.23	3.01	3.41	3.20	3.16	3.17	3.17	3.07	3.03	3.21	3.02	2.93	3.14	3.25
	0.55	0.61	0.68	0.89	0.65	0.81	0.63	0.68	0.70	0.64	0.62	0.66	0.65	0.57	0.68	0.72	0.71	0.68
生物資源学部（1388）	2.86	2.42	3.21	3.12	3.33	3.27	3.43	3.31	3.30	3.28	3.25	3.22	3.09	3.29	3.19	3.12	3.27	3.33
	0.37	0.61	0.61	0.78	0.64	0.70	0.63	0.65	0.64	0.63	0.67	0.62	0.68	0.60	0.66	0.69	0.69	0.65
看護福祉学部（1594）	2.87	2.45	3.26	3.23	3.42	3.27	3.52	3.35	3.37	3.35	3.35	3.29	3.20	3.32	3.31	3.24	3.40	3.44
	0.36	0.57	0.61	0.70	0.63	0.71	0.60	0.67	0.63	0.58	0.54	0.54	0.61	0.56	0.60	0.65	0.63	0.65
学術教養センター（3295）	2.75	2.30	3.15	2.97	3.27	3.09	3.45	3.29	3.28	3.22	3.27	3.11	3.05	3.24	3.10	3.03	3.19	3.31
	0.48	0.59	0.64	0.84	0.67	0.80	0.62	0.64	0.65	0.66	0.60	0.63	0.64	0.55	0.66	0.70	0.69	0.66
規模別（8244）																		
100人以上（4781）	2.74	2.27	3.06	2.85	3.24	2.99	3.43	3.23	3.20	3.20	3.22	3.11	3.02	3.20	3.06	2.98	3.16	3.26
	0.50	0.60	0.66	0.84	0.67	0.80	0.62	0.66	0.69	0.65	0.61	0.62	0.64	0.56	0.67	0.71	0.70	0.68
100人未満（3463）	2.82	2.45	3.26	3.22	3.38	3.32	3.47	3.35	3.36	3.30	3.31	3.22	3.16	3.33	3.25	3.18	3.33	3.42
	0.41	0.59	0.61	0.76	0.64	0.70	0.62	0.65	0.61	0.62	0.60	0.62	0.65	0.57	0.63	0.68	0.66	0.64

集計グループ（集計数）	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
全体（185）	**2.77**	**2.41**	**3.25**	**3.37**	**3.46**	**3.44**	**3.68**	**3.38**	**3.38**	**3.38**	**3.26**	**3.18**	**3.16**	**3.40**	**3.21**	**2.98**	**3.32**	**3.37**
	0.42	**0.55**	**0.60**	**0.81**	**0.57**	**0.65**	**0.54**	**0.62**	**0.58**	**0.61**	**0.66**	**0.69**	**0.70**	**0.63**	**0.64**	**0.71**	**0.67**	**0.58**
研究室専攻別（185）																		
経済・経営学研究科（44）	2.80	2.64	3.50	3.55	3.64	3.57	3.73	3.45	3.52	3.68	3.34	3.39	3.43	3.52	3.41	3.25	3.68	3.50
	0.40	0.53	0.50	0.72	0.48	0.54	0.49	0.66	0.62	0.47	0.67	0.57	0.65	0.66	0.58	0.61	0.47	0.54
地域・国際経済政策専攻（12）	3.00	3.00	3.92	4.00	4.00	3.92	4.00	3.92	3.92	4.00	3.92	4.00	3.92	4.00	3.75	3.67	3.92	4.00
	0.00	0.00	0.28	0.00	0.00	0.28	0.00	0.28	0.28	0.00	0.28	0.00	0.28	0.00	0.43	0.47	0.28	0.00
経営学専攻（32）	2.72	2.50	3.34	3.38	3.50	3.44	3.63	3.28	3.38	3.56	3.13	3.16	3.25	3.34	3.28	3.09	3.59	3.31
	0.45	0.56	0.47	0.78	0.50	0.56	0.54	0.67	0.65	0.50	0.65	0.51	0.66	0.69	0.57	0.58	0.49	0.53
生物資源学研究科（91）	2.67	2.26	3.15	3.09	3.43	3.41	3.73	3.35	3.37	3.31	3.36	3.08	3.07	3.37	3.05	2.90	3.20	3.33
	0.47	0.53	0.63	0.85	0.54	0.66	0.45	0.60	0.55	0.61	0.56	0.68	0.72	0.60	0.67	0.63	0.68	0.58
生物資源学専攻（55）	2.56	2.27	3.13	2.91	3.45	3.27	3.69	3.40	3.45	3.40	3.45	3.05	3.09	3.35	3.15	3.04	3.31	3.40
	0.50	0.52	0.60	0.75	0.50	0.65	0.46	0.49	0.53	0.59	0.53	0.67	0.61	0.51	0.52	0.47	0.54	0.53
海洋生物資源学専攻（36）	2.83	2.25	3.19	3.36	3.39	3.61	3.78	3.28	3.25	3.17	3.22	3.11	3.03	3.42	2.92	2.69	3.03	3.22
	0.37	0.55	0.66	0.92	0.59	0.64	0.42	0.73	0.55	0.60	0.58	0.70	0.87	0.72	0.83	0.78	0.83	0.63
看護福祉学研究科（47）	2.94	2.47	3.17	3.72	3.34	3.45	3.55	3.38	3.30	3.23	3.00	3.23	3.13	3.32	3.28	2.89	3.23	3.38
	0.24	0.50	0.56	0.61	0.66	0.65	0.68	0.60	0.54	0.66	0.74	0.66	0.57	0.62	0.53	0.81	0.63	0.53
看護学専攻（14）	3.00	2.43	3.00	3.57	3.21	3.57	3.64	3.36	3.14	3.14	3.00	2.93	3.07	3.29	3.21	2.93	3.36	3.50
	0.00	0.49	0.38	0.73	0.56	0.49	0.61	0.61	0.52	0.52	0.38	0.59	0.59	0.70	0.56	0.70	0.72	0.63
社会福祉学専攻（33）	2.91	2.48	3.24	3.79	3.39	3.39	3.52	3.39	3.36	3.27	3.00	3.36	3.15	3.33	3.30	2.88	3.18	3.33
	0.29	0.50	0.60	0.54	0.69	0.69	0.70	0.60	0.54	0.71	0.85	0.64	0.56	0.59	0.52	0.84	0.57	0.47
科目等履修生・聴講生（3）	3.00	2.33	4.00	3.67	3.67	2.67	3.33	3.00	3.00	3.67	3.33	2.33	2.67	3.67	4.00	3.00	3.00	2.67
	0.00	0.94	0.00	0.47	0.47	0.94	0.94	0.82	0.82	0.47	0.47	1.25	1.25	0.47	0.00	1.41	1.41	1.25
入学年次別（185）																		
97生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
98生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
99生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
00生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
01生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
02生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
03生（7）	2.86	2.57	3.14	3.43	3.71	3.71	3.86	3.71	3.71	3.71	4.00	3.29	3.29	3.71	3.43	3.14	3.14	3.57
	0.35	0.49	0.35	0.49	0.45	0.45	0.35	0.45	0.45	0.45	0.00	0.45	0.45	0.45	0.49	0.35	0.35	0.49
04生（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
05生（4）	2.75	2.25	3.00	1.75	3.50	3.50	3.75	3.75	3.75	3.50	3.25	3.00	2.75	3.25	2.25	1.75	3.50	3.50
	0.43	0.43	0.71	0.83	0.50	0.50	0.43	0.43	0.43	0.50	0.43	0.00	0.43	0.43	0.83	0.43	0.50	0.50
06生（24）	2.50	2.13	3.21	2.96	3.63	3.50	3.92	3.42	3.54	3.42	3.42	3.13	3.13	3.54	3.13	3.00	3.46	3.54
	0.50	0.53	0.58	0.89	0.48	0.65	0.28	0.49	0.50	0.64	0.49	0.73	0.60	0.50	0.44	0.50	0.58	0.50
07生（150）	2.81	2.45	3.27	3.47	3.42	3.42	3.63	3.35	3.33	3.36	3.21	3.19	3.17	3.37	3.24	3.01	3.30	3.33
	0.39	0.55	0.61	0.74	0.58	0.66	0.57	0.64	0.58	0.61	0.68	0.70	0.73	0.65	0.64	0.73	0.70	0.60
部局別（185）																		
経済学部（46）	2.80	2.61	3.52	3.54	3.63	3.50	3.70	3.41	3.48	3.67	3.33	3.30	3.37	3.52	3.43	3.22	3.63	3.43
	0.40	0.57	0.50	0.71	0.48	0.62	0.55	0.68	0.65	0.47	0.66	0.69	0.73	0.65	0.58	0.69	0.60	0.65
生物資源学部（91）	2.67	2.26	3.15	3.09	3.43	3.41	3.73	3.35	3.37	3.31	3.36	3.08	3.07	3.37	3.05	2.90	3.20	3.33
	0.47	0.53	0.63	0.85	0.54	0.66	0.45	0.60	0.55	0.61	0.56	0.68	0.72	0.60	0.67	0.63	0.68	0.58
看護福祉学部（48）	2.94	2.48	3.19	3.73	3.35	3.46	3.56	3.40	3.31	3.25	3.02	3.25	3.15	3.33	3.29	2.92	3.25	3.40
	0.24	0.50	0.56	0.60	0.66	0.64	0.67	0.60	0.55	0.66	0.75	0.66	0.58	0.62	0.54	0.81	0.63	0.53
一般教養（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
規模別（185）																		
100人以上（0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
100人未満（185）	2.77	2.41	3.25	3.37	3.46	3.44	3.68	3.38	3.38	3.38	3.26	3.18	3.16	3.40	3.21	2.98	3.32	3.37
	0.42	0.55	0.60	0.81	0.57	0.65	0.54	0.62	0.58	0.61	0.66	0.69	0.70	0.63	0.64	0.71	0.67	0.58

集計グループ（集計数）	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
全体（ 198）	**2.80**	**2.39**	**3.35**	**3.40**	**3.58**	**3.58**	**3.77**	**3.56**	**3.61**	**3.55**	**3.29**	**3.14**	**3.25**	**3.46**	**3.33**	**3.17**	**3.54**	**3.63**
	0.45	**0.57**	**0.58**	**0.84**	**0.58**	**0.62**	**0.47**	**0.57**	**0.52**	**0.61**	**0.73**	**0.81**	**0.68**	**0.58**	**0.65**	**0.71**	**0.59**	**0.51**
研究科専攻別（ 198）																		
経済・経営学研究科（ 56）	2.79	2.63	3.55	3.70	3.80	3.80	3.95	3.79	3.66	3.75	3.04	3.21	3.52	3.77	3.59	3.41	3.82	3.84
	0.49	0.52	0.50	0.60	0.40	0.40	0.23	0.41	0.51	0.43	0.91	0.82	0.53	0.42	0.56	0.62	0.38	0.37
地域・国際経済政策専攻（ 20）	3.00	2.80	3.90	3.85	3.95	3.95	4.00	3.95	3.80	3.90	3.40	3.60	3.80	3.95	3.85	3.80	3.95	3.90
	0.00	0.40	0.30	0.48	0.22	0.22	0.00	0.22	0.40	0.30	0.92	0.86	0.40	0.22	0.36	0.51	0.22	0.30
経営学専攻（ 36）	2.67	2.53	3.36	3.61	3.72	3.72	3.92	3.69	3.58	3.67	2.83	3.00	3.36	3.67	3.44	3.19	3.75	3.81
	0.58	0.55	0.48	0.64	0.45	0.45	0.28	0.46	0.55	0.47	0.83	0.71	0.54	0.47	0.60	0.57	0.43	0.40
生物資源学研究科（ 90）	2.78	2.28	3.24	3.19	3.42	3.58	3.72	3.47	3.57	3.38	3.44	3.21	3.16	3.38	3.17	3.10	3.38	3.54
	0.44	0.54	0.64	0.92	0.67	0.54	0.50	0.60	0.54	0.66	0.58	0.69	0.69	0.53	0.65	0.68	0.64	0.54
生物資源学専攻（ 29）	2.52	2.03	2.90	2.75	3.48	3.48	3.69	3.48	3.59	3.31	3.38	3.23	2.96	3.25	3.07	3.07	3.24	3.41
	0.56	0.32	0.61	0.91	0.72	0.56	0.53	0.56	0.56	0.83	0.61	0.70	0.78	0.51	0.74	0.74	0.73	0.62
海洋生物資源学専攻（ 61）	2.90	2.39	3.41	3.39	3.39	3.62	3.74	3.46	3.56	3.42	3.48	3.20	3.25	3.43	3.21	3.11	3.44	3.61
	0.30	0.58	0.59	0.85	0.63	0.52	0.48	0.62	0.53	0.56	0.56	0.69	0.62	0.53	0.60	0.66	0.59	0.49
看護福祉学研究科（ 52）	2.86	2.33	3.31	3.44	3.61	3.33	3.65	3.48	3.65	3.61	3.30	2.93	3.10	3.27	3.33	3.02	3.51	3.57
	0.40	0.58	0.50	0.83	0.49	0.83	0.55	0.61	0.48	0.60	0.67	0.96	0.71	0.67	0.64	0.77	0.57	0.53
看護学専攻（ 17）	3.00	2.25	3.29	3.53	3.38	3.31	3.69	3.33	3.54	3.50	3.27	2.76	3.00	2.85	3.18	2.71	3.31	3.38
	0.00	0.75	0.46	0.88	0.48	0.85	0.46	0.60	0.50	0.50	0.57	0.81	0.76	0.66	0.51	0.67	0.58	0.48
社会福祉学専攻（ 35）	2.80	2.37	3.31	3.40	3.71	3.34	3.63	3.54	3.69	3.66	3.31	3.04	3.14	3.43	3.40	3.17	3.60	3.66
	0.47	0.48	0.52	0.80	0.45	0.83	0.59	0.60	0.46	0.63	0.71	1.04	0.68	0.60	0.68	0.77	0.55	0.53
科目等履修生・聴講生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
入学年次別（ 198）																		
97生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
98生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
99生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
00生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
01生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
02生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
03生（ 3）	2.33	2.00	2.33	2.67	3.67	3.67	4.00	3.67	4.00	3.67	4.00	4.00	3.33	3.33	3.00	3.33	3.33	3.67
	0.94	0.00	0.47	1.25	0.47	0.47	0.00	0.47	0.00	0.47	0.00	0.00	0.47	0.47	0.00	0.47	0.47	0.47
04生（ 1）	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
05生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
06生（ 23）	2.83	2.48	3.61	3.70	3.70	3.91	3.91	3.70	3.70	3.61	3.17	3.22	3.35	3.52	3.57	3.22	3.78	3.87
	0.38	0.50	0.57	0.62	0.69	0.28	0.28	0.55	0.46	0.57	0.92	0.59	0.70	0.58	0.50	0.59	0.41	0.34
07生（ 170）	2.80	2.38	3.32	3.37	3.56	3.53	3.74	3.54	3.60	3.53	3.29	3.11	3.22	3.45	3.29	3.15	3.50	3.60
	0.44	0.57	0.56	0.85	0.56	0.64	0.49	0.58	0.53	0.62	0.70	0.84	0.67	0.58	0.67	0.72	0.61	0.52
08生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
09生（ 1）	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	3.00	4.00	3.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	3.00
	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
10生（ 0）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
部局別（ 198）																		
経済・経営学研究科（ 57）	2.77	2.61	3.54	3.70	3.75	3.81	3.95	3.79	3.65	3.75	3.04	3.21	3.53	3.77	3.60	3.40	3.82	3.84
	0.50	0.52	0.50	0.59	0.54	0.39	0.22	0.41	0.51	0.43	0.90	0.81	0.53	0.42	0.56	0.62	0.38	0.36
生物資源学研究科（ 89）	2.79	2.28	3.24	3.18	3.45	3.57	3.72	3.46	3.57	3.38	3.45	3.21	3.15	3.37	3.16	3.10	3.37	3.54
	0.44	0.54	0.64	0.92	0.62	0.54	0.50	0.60	0.54	0.66	0.58	0.70	0.69	0.53	0.65	0.69	0.64	0.54
看護福祉学研究科（ 52）	2.86	2.33	3.31	3.44	3.61	3.33	3.65	3.48	3.65	3.61	3.30	2.93	3.10	3.27	3.33	3.02	3.51	3.57
	0.40	0.58	0.50	0.83	0.49	0.83	0.55	0.61	0.48	0.60	0.67	0.96	0.71	0.67	0.64	0.77	0.57	0.53

1.5.2　授業公開の概要

昨年に続き，部局単位で話し合いのうえ，公開の回数や形式をセットした．全部局の実績一覧を以下に示す．参観後の検討会は例年通りの様式で行っており，その成果については，2 章「各部局の FD 活動」にて報告する．

学期	部局	授業名	担当	公開期間	参観数	報告書
前期	経済学部	現代経営学	小倉行雄教授	6 月 10 日	１名	有
		生産管理論 I	木野龍太郎講師	6 月 11 日	３名	有
	生物資源学部	海洋分子生物学	神谷充伸准教授	5 月 31 日	９名	有
		環境生物学	吉岡俊人准教授	6 月 14 日 6 月 21 日 7 月 5 日	３名	有
	看護福祉学部	解剖生理学	本田和正教授	6 月 5 日	４名	有
	学術教養センター	現代社会論	宇城輝人准教授	6 月 12 日	５名	有
後期	経済学部	生産管理論Ⅱ	木野龍太郎講師	11 月 19 日	７名	有
		環境経済学	岡　敏弘教授	１月８日		未提出
	生物資源学部	生物資源学概論	大田正次教授	12 月 14 日	３名	有
		沿岸海洋学	瀬戸雅文准教授	12 月 10 日	７名	有
	看護福祉学部	老年臨床看護学 I	寺島喜代子准教授	10 月 23 日	１名	有
		小児看護学概論	赤川晴美講師	1 月 12 日	９名	有
		精神保健福祉論 I	真野元四郎教授	随時		未提出
		社会福祉演習Ⅱ	真野元四郎教授	随時		未提出
	学術教養センター	国文学	木村小夜准教授	11 月 19 日	９名	有

1.5.3　FD 研修の概要

学内外の研修実績を一覧にして示す. その詳細は 2 章「各部局の FD 活動」にて報告する.

2007 年度 学外研修一覧

参加イベント	主催者	日程	出張先	報告者
FD 活動の現状と将来 --高等教育機関での様々な FD 活動の取り組み---	福井高専 創造教育開発センター	5/18 17:00-18:30	鯖江市	学術教養センター 菊沢正裕教授
高等教育における教員の ICT 活用による教育力向上に向けて	メディア教育開発センター	10/17 10:00-17:55	東京	看護福祉学部 本田和正教授
国際ソーシャルワークセミナー	(財) 社会福祉研究所　共催：社団法人日本社会福祉士会他計 9 団体	10/21 9:30-16:30	東京	看護福祉学部 大塩まゆみ教授
平成 19 年度看護学教育ワークショップ（第 9 回）	文部科学省	11/12-14	千葉県 木更津市	看護福祉学部 寺島喜代子准教授
第３回公開シンポジウム 国際社会が求める人間像：近大生のニーズに適した語学教育を考える	近畿大学語学教育学部	12/8 13:30-16:50	東大阪市	学術教養センター 亀田勝見准教授
大学教育改善とインストラクショナル・デザイン	仁愛大学	2 月 21 日 14:40-16:10	越前市	学術教養センター 菊沢正裕教授

2007 年度 学内研修一覧

テーマ	講師等	開催形式	開催日	参加	報告者
本学の FD への取組みと事業概要を説明	2006 年度FD 部会長 菊沢正裕教授	新任研修	4 月 17 日 11:50-12:05	5 名	無
私が経験した韓国・日本・アメリカの教育	Prof. Kim Jin-Kyung	講演会	11 月 29 日 16:00-17:00	25 名	生物資源学部 木元久准教授
学部主導の FD 活動の進め方についての私見	上智大学経済学部 FD 委員 川西　諭先生	講演会	12 月 3 日 13:30-	6 名	経済学部 廣瀬弘毅准教授
ソーシャルワークの将来像と社会福祉教育の課題・展望	大阪市立大学大学院教授/社会福祉士養成校協会長 白澤政和先生	講演会	12 月 12 日 14:00-17:00	?	看護福祉学部 塚本利幸准教授
導入ゼミに必要な学習項目を考える～教養ゼミの実践を踏まえて～	学術教養センター 山川修教授	セミナー	12 月 19 日 14:40-17:00	11 名	学術教養センター 菊沢正裕教授
「教養ゼミ」から「導入ゼミ」を考える	学術教養センター 津村、亀田、菊沢、山川各氏	セミナー	2 月 6 日 10:40-12:10	19 名	学術教養センター 亀田勝見准教授
看護学教育に関する改正カリキュラムにおける卒業時到達目標の背景とその意味	神奈川県立保健福祉大学看護学科教授	講演会	3 月 1 日 13:00-16:00	27 名	看護福祉学部 大川洋子准教授

2　各部局の FD 活動

FD の 3 事業は，活動の当初には全学で時期や方式を統一し，合同で行うこともあったが，昨年後期くらいから部局主体で企画実施するようにしている．それは，部局によって FD の意義が異なり，またその理解や普及の度合いも違う．例えば，学外研修を定着化させている部局もあれば，カリキュラムや共通の授業の展開を議論するセミナーを開催する部局もある．以下では，授業公開と FD 研修を中心に，活動成果を部局担当者がまとめた．

2.1　経済学部

経済学部の本年度の FD 活動は，授業評価、授業公開，FD セミナーの３つの柱で行われた．このうち，授業評価については全学統一で行われたので，以下では授業公開および FD セミナーについて報告する．

2.1.1　授業公開

今年度の授業公開は，前期 2 件，後期 2 件の合計 4 件が行われた．

概要

月日, 曜日	時限	講義名	教員名	教室	学生数	参観者
前期						
6月10日(日)	3-4	現代経営学	小倉行雄教授	E206	10	１名（廣瀬）
6月11日(月)	2	生産管理論Ⅰ	木野龍太郎講師	L113	70	３名（佐野, 服部, 廣瀬）
後期						
11月19日(月)	2	生産管理論Ⅱ	木野龍太郎講師	L113	35	7名（坂田，新宮，服部，廣瀬，田中，宇都宮，西本）
08年1月8日(火)	1	環境経済学	岡敏弘教授	L113	12	4名（服部，北島，木野，廣瀬）
随時						

詳細

科目名 現代経営学（大学院開講科目）

日時：2007 年 6 月 10 日（日）　13:30～16:30

担当者：小倉行雄　教授

受講者数：10 名

参観者：経済学部　廣瀬弘毅　准教授

・授業参加学生の状況

院生約１０人（学卒者１人，留学生３人，その他は社会人，なお，定例の授業では１６人か１７人の出席があるとのこと．今回は欠席が多かった）．これと別個に福井大学キャンパスにて遠隔授業の工学研究科院生が２人参加（これも通常は，８人程度の参加がある．今回は欠席が多かっ

た).

・授業テーマ

「経営戦略とマーケティングの違いを読み解く」

担当教員作成のレジメに基づき，受講者がグループ討議とグループワークにより，課題の理解を深めていく．同じテーマでの３回目． 本講義の全体的な狙いは，経営学の基礎的な内容を現実的な話題とも突き合わせながら，受講者に体得させていくところにある.

・授業形式

担当教員の講義と受講者によるグループ討議，グループワークの併用 方式.

・配付資料

当日の主資料は，前掲「経営戦略とマーケティングの違いを読み解く」のレジメ資料． その他，次回以降に行なう総合ケース問題の選択用ケース資料として,「しまむら」,「ロックフィールド」,「アスクル」,「日東電工」,「吉田スーツ」の各ケース資料が事前配布された.

参観及び討論の結果

１．参考になった点

・配付資料が非常に丁寧．事前準備に相当な手間がかけられていた.

・院生の討論進行が非常に手慣れていた．おそらく，役割分担の指導などがこれまでに行われてきたものと思われる.

・最終的な結論を明確に引き出せるような工夫が成されていた．結論が出るため，出席者にはわかりやすい.

・新聞のスクラップのやり方（単にスクラップするだけでなく，小見出しを付けること）の指導などは，なかなか興味深かった.

・大学院の少人数クラスだから出来るのかもしれないが，きめの細かい参考文献の紹介などが良かったと思う.

→担当者からのコメント

今回は，通常の授業時に比べると，欠席者が多く（平常時に比べ６，７人欠席），この分だけグループ討議等も盛り上がりを欠かざるを得なかった．担当者としては，もう少し普段の状況に近いところをお見せできなかったところが残念な点である.

２．改善してみてはと思われる点

・授業の問題ではなく制度的な問題であるが，せっかくの福井大学との連携がなかなか難しそうであった．日曜日開講ということもあり，ちょっとしたトラブルでも対応出来ない点などは，今後両大学の間で制度的に解決すべき問題かもしれない.（福井大学で事務的に対応出来る人がいなかった.）

→担当者からのコメント

今回は，福井大学側の参加者もこれまでと比べ大幅に少なく，授業課題を浸透させる上でかなりむずかしさが出た. 加えて，福井大学の学生から事前配付資料の一部が届いていないとの指摘があり，これも混乱を倍加させた．後で本学事務局に確認したところ，担当教員から本学事務局までは資料が一括資料のかたちでたしかに届いていたのだが,その後福井大学へＦＡＸにて資料送付する段階で一部手違いがあったのではないかとのことであった． いずれにせよ，これも授

業進行と授業効果の発現を妨げる点では，かなり大きな材料となった.

３．その他気づいた点

・日曜日開講の院生向けの講義と言うこともあり，社会人院生も多く，出席者の能力は高いと感じた.

・今回は，日曜日開講だったので，参観者が少なくて少し残念であった.

・内容についての意見は，授業公開事業の本来の対象ではないが，個人的に面白い内容だった.

→担当者からのコメント

授業公開による授業の相互見学の効果については，参観者の意見に同感である．是非，授業見学の参加者を増やす工夫をされたい.

４．今後の授業公開についての意見

・経済学部では，授業のやり方に対する他人からの示唆というよりも，参観することで得られるヒントも重視している.

→担当者の意見　同上のとおり.

科目名 生産管理論Ｉ（経済学部専門科目）

日時：2007 年 6 月 11 日（月）　講義 10:40～12:00，検討会 12:00～12:40

担当者：木野 龍太郎　講師

受講者数：70 名

参観者：経済学部　服部 茂幸　准教授

同　佐野 一雄　准教授

同　廣瀬 弘毅　准教授

感想

・ 受講者数との関連

今回で 3 回目になるが，受講者が大幅に増加したことから（10-20 名程度から約 70 名），昨年度までのように「少人数だからこそ出来る」ことがなかなか出来なくなっている．例えば，受講者が増えることによって「学生の名前を覚えて名前で呼んで質問してみる」ことが難しくなり，一部の名前を知っている学生に当てることになってしまう.名前で呼ぶことで発言しやすい雰囲気を作り，積極的に授業に関わらせるということが，やりにくくなってしまっている.

・ 小テストについて

講義の最初に毎回小テストを行っており,前回の授業内容を確認すると同時にこれを 成績に反映する形を取っている．受講生からは「大変だけど勉強になるので良い」という意見が聞かれているが，受講生が多くなってきたことが採点が大変になること，また，小テストに時間を取られてしまい，講義時間が短くなることが課題としてあげられる．あと，参加教員からは，小テストをやることで時間が足りなくなるのではないか，しかし，小テストをやることで出席率が高まることは良いことでもあるとの指摘を頂いた.小テストが終わってすぐに解答をしているのも良いと言って頂いた.

・ 板書について

板書については「見やすい」「システマティック」と言っていただき，大変嬉しく思う．簡潔な

言葉遣い，大きく濃い文字，色遣いの統一（文章は白，重要事項は黄色，補足事項は赤，黄色や赤で文字を書くことはあまりせず，下線や枠囲いを用いる），黒板 1 面で内容がまとまるようなレイアウト，背中を向けて文字を書かない（盤面に対して 90 度の立ち位置を心がける），板書中は説明せず板書が終わってから受講生を顔を見て説明する，といったことを心がけている．ただし，板書を写せばそこそこ内容がわかるようにしているため，受講生は板書を写せば十分であると考えてしまっているのか，メモを取ったりしないということになっている状況である．つまりわかりやすい板書を心がけているがゆえ，逆に受講生が板書さえ写せばわかった気になってしまう，もしくはメモを取ったりする練習にならないのではないかと懸念している．

・ ビデオの活用について

講義の最後にビデオを使って補足をした．トヨタ生産方式の基本的な考え方について，以前にトヨタ自動車の方から頂いたビデオを放映することで，理解を深めることを目的としている．生産管理論は学生が日常的に接することの少ない分野を扱っていることから，ビデオの活用は非常に有効であると考えている．受講生にはビデオ放映の時に簡単な感想文を書いて，終了後に提出をさせているが，講義にビデオを組み合わせるとイメージがしやすいので，もっと活用して欲しいと書かれていることが多い．また，ビデオを見る時間を利用して感想文を書かせることで，受講生にとってわかりにくかった部分がわかるので，それを講義に反映させることも出来て，非常に有効であると考えている．しかし，NHK スペシャルのような類の番組を放映すると，非常に時間を取られてしまうこともあり，それほど頻繁に放映することが出来ない状況である．参加教員からは，「ビデオの内容が授業で説明した内容とほぼ一致しており理解が深まって良い」との意見を頂いた一方で，「ビデオの内容を放映中に補足的に説明しているが，後ろの席までは聞こえづらい」との声も頂いた．これについては今後，注意しておきたい．

・ 声の大きさについて

ビデオの項でも指摘を頂いたが，ビデオ放映時の補足説明は聞こえにくいということであったので，これについては注意したい．また，自分の実体験を話したりするときの声も小さめで，聞き取りにくいということであったので，これも注意したい．可能な限り地声で講義をすることで，受講生が「ビデオでも見ている感覚」で講義を受けることを避けたいことから，マイクを使っていない．通常の説明については，聞こえにくいという声は聞かれないが，上記のようなケースが他にもないか気をつけておきたい．

・ 内容について

トヨタ生産方式について説明をしたが，その良い面ばかり説明していたので，失敗例なども説明した方が良いのでは無いか，という指摘を頂いた．実は，次回にそれについて触れようと考えていたのだが，失敗例や問題点についてもコメントしておいたほうが，「良いことづくめではない」ということを，受講生に理解させるには良かったのかもしれない．

要望

・こうした機会を設けていただき，公開授業で貴重な意見を頂くことは，講義を改善していくうえで非常に有益なので，今後も出来る限り授業の公開を行っていきたい．自分自身も都合が付く限りは他の先生方の講義に参加し，多くのことを学んでいきたい．そのためには，より多くの先生方に授業の公開と，公開授業への参加をして頂きたいと思う．

・もっと多くの問題点があったと思われるが，遠慮をされてあまりシビアな意見をおっしゃって

おられなかったように思う．今後も授業公開を進めていくなかで，公開する側も参加教員も，お互いに率直な意見を出していただき,建設的な議論が進めていけるような雰囲気を作っていけるようにしていければと思う．

・前回も書いたが，授業公開の後の検討会に学生も参加するという形が取れないであろうか．また，事務方も参加することで，違った側面からも議論が行えるのではないだろうか．特に後者については，是非実現していただきたいと思う．

科目名　生産管理論Ⅱ（経済学部専門科目）

日時：2007年11月19日（月）　講義10:40～12:10，検討会12:10～12:50

担当者：木野 龍太郎　講師

受講者数：35名

参加者：経済学部　坂田 幹男教授

同　新宮 晋　准教授

同　服部 茂幸　准教授,

同　廣瀬 弘毅　准教授

教育推進課　田中 典子　課長代理

同　宇都宮 誠　主査

同　西本 佳代　主事

感想

小テストについて

・講義の最初に毎回小テストを行っており，前回の授業内容を確認すると同時にこれを成績に反映する形を取っている（成績の50%）．授業開始後すぐに行い， 遅刻者には受験をさせないようにしているため，大幅な遅刻者は少なくなっている．欠席者は友人からノートを写すなどして，学生のほうで欠席への対応を行っているようだ．

・参加教職員からは，「小テストを実施しているとは思わなかった」，「復習になるので良い」という意見を頂いたが，小テスト実施・解答で20分程度を使って しまうことから，やはり時間がかかっていることがネックになっている．そのため（学生には不評のようだが）大抵は補講によって対応している．

板書について

・板書については「見やすい」と言っていただいたが，板書中は説明せず板書が終わってから受講生を見て説明するために，時間がもったいないのではという意見 を頂いた．また，板書中には説明が止まるので，講義内容をレジュメにして配布することをしないのか，という意見もあった．過去の経験（塾講師のアルバイ ト）で，「生徒はノートを取ることに集中しているので，板書中は説明をしないように」と言われて，それをそのまま続けているのだが，大学生ということも あって，これについては再考すべきかも知れないと感じた．

・板書の内容については，基本的なところ・原則的なところだけを書いており，応用的な部分については口頭か簡単なメモ程度にしているが，その応用的な部分が 重要でもあるので，そこを板書しないままで良いのか，それとも，基本も応用も全て板書してしまうと，多すぎる情報量に学生がとまどうのではないか，といっ た議論が行われた．

・また，板書を写せば基本的な内容がわかるようにしているため，受講生は板書を写せば十分であると考えてしまっているのか，あまりメモを取ったりしない．板 書したことはオーソライズされた内容であり，テストでそれを書けば単位が取れるので，それ以上の労力を割くことはムダと考えているのではないか，という意 見もあった．

・板書をするときに，事前に準備した講義ノートに目を通す回数が多いのではないか，一般論として，ノートを見る回数が多いと，講義を消化しているというイ メージを受けかねない，という意見も頂いた．これについては，私自身がきちんとまだ講義の内容を自分のものに出来ていないことから，講義ノートに依存して しまっているということがあると思うので，これについては，もっと予習をきちんとしないといけないと感じた．

口頭での説明について

・話が全然脱線しないのは，聞いているほうはつらいのでは？という意見があった．今回は公開授業ということで，緊張していたのもあってあまり脱線しなかったのだが，時折脱線ばかりしていることもある．それはそれで困るのでうまくバランスを取っていきたい．

・実際の事例を話すのは面白いという意見も頂いた．なるべく自分の経験や聞き取り調査の内容などを加えて，わかりやすい具体例などをあげることで，学生達にとって理解を深められるようにしたい．

・説明の内容が丁寧だが，少し説明過剰ではないか，もう少しペースを上げても学生達はついて来られるのではないか，という意見も頂いた．これについては，学生達に個別の聞き取りをしたり，授業評価アンケートの内容なども踏まえて検討していきたい．

・声が大きくてわかりやすい，という意見も頂き嬉しく思う．マイクを使うと学生達がビデオを見ているような感覚になるのではと思い，なるべく地声で説明をす るようにしている．ただ，地声の場合は正面を向いて話さないと聞こえにくいので，板書をしながらの説明が出来ないことや，説明自体もやりにくい時もあるの で，さらに工夫をしていきたい．

内容について

・いわゆる「生産管理論」として，他大学では理系的な内容を教えていることも多いが，この講義では文系的な内容（企業経営や競争力との関連など）を主軸に教 えている．将来，生産管理部門に行く学生もいるかもしれないので，少し理系的な内容（計算問題など）をやってみてもいいのではないか，という意見も頂いた．

その他

・毎回書いているが，こうした機会を設けていただき，公開授業で貴重な意見を頂くことは，講義を改善していくうえで非常に有益なので，今後もなるべく授業の公開を行っていきたい．

・今回は私の希望で，忙しい時間を割いて事務局の方にも参加をしていただき大変有り難く思っている．事務局が参加する意義が曖昧だという意見も頂いたが，私 個人は，教員とは違った側面からの意見は非常に貴重であり，実際，今回も頂いた意見は私にとって非常に有益であった．また，事務方としての授業に対する要 望なども出していただけると，より有意義で建設的な議論が出来るのではないか，と考えている．ただ今回は急に話を出したことなので，事前に話をしたりする ことも なかったために，とりあえず見ていただいたという程度に留まってしまった．事務局は少ない人数での切り盛りが大変だとは思うが，是非今後とも時間を 割いていただき，公開授業および検討会に参加していただきたいと考えている．ただ，事務局にとって公開授業に

参加することにどのようなメリットがあるのか も考えていかないと,（教員の参加数も少ないというのに）事務局に参加してくださいというだけでは，ちょっと難しいかも知れない.

科目名　環境経済学（経済学部専門科目）

日時：2008年1月8日（火）　講義9:00～10:15　検討会10:15～10:35

担当者：岡敏弘教授

受講生数：12名

参観者：経済学部　服部 茂幸　教授

同　北島 啓嗣　講師

同　木野 龍太郎　講師

同　廣瀬 弘毅　准教授

感想

(1)参考になった点

・前回までのまとめを時間をかけて行っている.

・説明がよどみなく流れている.

・ノートはほとんど見ないで，スムーズに講義が進められている.

・きちんとした板書が成されている.

・広汎な内容を丁寧に説明している.

・板書の際に，話を進めないので良い.

(2)改善の余地があると感じた点

・教科書の使い方について，購入していない学生にどこまで配慮すべきか，もう少し明確にしてはどうか．とはいえこれは難しい問題である.

・板書の際に，１面でひとつのまとまりになる方がわかりやすい.

・板書でポイントとなる部分について，書かれていなかった.

・結果に至るプロセスが残るような板書になれば，良いのだが・・・これは難しい.

・板書に，教科書の該当ページを書いてはどうか.

・色遣いを工夫してみてはどうか.

・語尾が聞き取りにくいときがあった.

・難しい文言（競売など）があった.

(3)気づいた点・疑問点など

・少人数だったので，もう少しインタラクティブにしてみるのはどうか.

・自分が担当している講義でも図を多用するが，図がわかりにくいという学生の意見が少なからずある．この講義でどうか？

2.1.2　FD 研修

今年度は，外部講師による FD セミナーを後期に 1 回開催した.

日時：2007 年 12 月 3 日（月）　13:30～16:00

テーマ：学部主導のＦＤ活動の進め方についての私見

報告者：川西諭先生（上智大学経済学部 FD 委員）

場所：経済学部棟９階会議室

１．上智大学でのＦＤ活動状況

大学全体で３つ

①FD アンケート（教養科目についてのみ）学期末

インターネット利用（携帯電話からも可）

回収率は２割程度

②新任教員研修

学内で選ばれた教員の指導の下で実施．宿泊研修なども．

③ＦＤ講演会／フォーラム

ＦＤ活動によって改善できること

個人でできることを待つのではなく，組織として経験を共有できること

faculty としてのコラボレーションとコーディネーションの推進

２．上智大学経済学部としての独自ＦＤ活動状況

目的

①もっと良い授業をしたいという積極的意欲からの改善

②学生と教員との間のコミュニケーションの促進

＝問題点＝

自分たちの声がその期の授業改善に反映されないため，アンケート回答へのモチベーションが低い．そのため，回収率が低い．

＝対処＝

学生のためにやっているという姿勢を示す．

・インターネットを用い学期途中で行い（11/15－11/30），授業改善へフィードバック

これについては回収率が低くても構わない．

・学期末にペーパーベースでのアンケートを実施．こちらは，回収率が高くなければならないので，質問項目を極力少なくする．コメント欄もなしにする．（今学期から実施なので，実績についてはまだデータはない．）

※目的に応じてアンケートを変えることが肝要．

※学生に趣旨を理解させる努力が必要である．

＝大学院の FD＝

少人数クラスが多いのでアンケートでは匿名性が確保できない．そこで，個々の科目ではなく，環境や制度について院生の意見を聞くというスタイルをとるため，院生側に受け皿機関を作らせているところ．

３．大人数クラスでの授業運営

まじめな学生を裏切ってはいけない！

学生が来たくなる授業を目指して！

＝専門学校（予備校）と大学との違い＝

学生自身のコスト意識・モチベーションが根本的に異なる．

したがって，私語などの受講態度については，大学でのみ問題になる．

＝大人数講義でコントロールが可能になる条件＝

①学生にモチベーションがある.

②学生が教員を信頼している.

この２つの条件が整えば，大人数講義（注：私学の場合，福井県立大学などとは比較にならない大人数講義が開講されるケースが多々ある.）であっても，掌握できる.

＝学生の動機付け＝

学生にとってためになることは何か？→コンテンツ充実

それを知っている意義は何か？→動機付け（学生の危機意識に働きかけるなど）

どのように教えればよいか？→教育方法の改善（学習科学の研究を応用）

＝川西先生のケース＝

・私語をその都度注意して，させないようにしている.

うるさい学生は学生証を預かる．生け贄（ ?!）

・出席は取らない.（出席を取らなくても出席率が高い授業が理想的）

理由

出席は学生の権利であって，義務ではない.

モチベーションの低い学生が出席するとかえってコントロールが難しくなる.

双方向を指向している

大人数講義の場合，出席をとるだけで時間がかかる.

・最初が肝心なので，授業の最初に「大きな音」をたてて，注意喚起．しかし，笑顔で対応する.

・体験型学習，問題解決型学習，能動的学習を実践

４．討論

以上の報告をもとに，参加者との間で討論が行われた．論点は多岐にわたったが，次のようにまとめられる.

学生にとっての FD の意義（期待を持たせすぎても良くないのでは？）

何のための FD かをはっきりさせる（教員管理のため？業務改善のため？）

教員側のモチベーションの維持

GPA 制度についての課題（上智大学では全学規模で実施）等々です.

会議室で開催したこともあり，和気藹々と議論することができた.

2.1.3　総 括

今年度も，授業評価，授業公開，FD セミナーの活動を行った．1 年間を振り返ってみて，いずれの活動も一定の成果はあると思われる．その最大の効果は，それ自身による授業改善もさることながら，授業を改善することは求められていることを啓発する効果であろう．一方で，授業評価はともかく，授業公開，FD セミナーともに参加者が少なく，また参加するメンバーが固まっている傾向にあることが気にかかる．その理由の分析とともに，参加者の拡大が今後の課題であろう.

また，経済学部ではいわゆる狭い意味での FD 活動を超えるような活動も行われてきた．たとえば，（それ自体の是非はともかく）本学の最近の学生は，まじめではあるけれども，自発的に

取り組もうという気概は残念ながら弱く感じられる．そのような学生に対しては，おそらく座学でだけ興味関心を引き出すことは難しくなっている．そのため，一部の教員はビデオ教材を積極的に利用したり，あるいは講義の時間を一部社会見学（工場見学や裁判所見学など）に変えるなどの試みも積極的に行われている．また，今年度は外部の講師（新聞記者）を呼び，セッションを行うなどの試みもみられた．こういった様々な取り組みが行われているという情報を広く共有するとともに，それらの効果の検証や意見交換の場も，今後は必要かもしれない．

2.2 生物資源学部

2.2.1 生物資源学科

本年度の生物資源学科 FD 活動は、授業評価および授業公開、FD セミナー開催の三方面で意欲的かつ活発に行われた。以下、授業公開および FD セミナーについて活動を報告する。

2.2.1.1 授業公開報告（前期）

所属部局：生物資源学部 生物資源学科
実施月日：2007 年 6 月 21 日 ２限
場所 ：福井キャンパス L205 教室
授業名 ：環境生物学
担当教官：吉岡俊人 先生
対象学生：生物資源学科２年生
参観者数：3 名

（１）参考になった点

・第３セメスター全体の目的と概要がプリントで配られている。
・１回の授業の中で項目が板書で残されている。
・全体の構成が良かった。
・板書で内容のタイトルが示されているので，全体が把握しやすい。
・途中で授業関連分野のトピックス紹介をすることで教室の雰囲気がかわり，学生の集中力が続いていた。

（２）改善の余地があると感じた点

・授業の最初に１回分のあらすじを提示することで授業内容のストーリーを理解しやすくなるのではないか。
・初めて教室の最後列から授業を経験しましたが，黒板の下 1/3 は見難かった。
・授業に遅れてくる学生に対する対応はをどうすればよいのか？（特に１限目）
・統計資料については，web 上にあれば URL を示すことで参考になる。
・もう少し学生に考える機会を作っても良かったのではないか。
・途中で当日の授業項目と現在の進行状況を説明することも効果的であろう。

（３）その他、気づいた点・疑問点

・90 分の授業は長くて大変であることに気づいた。
・ときには学生側になって考えることの大切さを実感した。
・板書に集中しがちな学生が多く，少し間をおくような工夫も必要。

・授業当日は蒸し暑く，予想以上に教室環境は悪かった。

（4）今後の授業公開についての意見

・公開調査票にも教室名を記述して欲しい。

・生物の場合，学生実験の指導の関係上，事前に参加を決めるのが難しい。

・授業公開に関して，授業経験の少ない教員から「まだ自分の講義をより充実させるための努力中であるから公開する気にはなれない」との意見が出された。今後は、経験豊富な教授の講義を中心に公開してはどうか。

・ 学生から授業評価の高かった授業の公開も効果的ではないか。

・前期と後期に分けて２回も授業公開を行う必要があるのか。

（5）担当教官のコメント（特に参考になった参観教員からの意見）

・ノート取りに専念してしまうので、考える時間を与える 。

・最初に講義全体のストーリーやポイントを解説 。

・黒板の下三分の一は見えない 。

・今後の学習のための情報や統計資料が掲載されている HP 等を提示 。

・遅れて入室する学生対策が悩み多き課題 。

所属部局：生物資源学部 生物資源学科

実施月日：2007 年 7 月 5 日 ２限

場所 ：福井キャンパス L205 教室

授業名 ：環境生物学

担当教官：吉岡俊人 先生

対象学生：生物資源学科２年生

参観者数：１名

（1）参考になった点

・当日に話す内容の目的を授業の最初で明確に述べる点。

・学生に課題を与えながら授業を進めている点（学生自身に考えさせる機会をあたえることができる)。

（2）改善の余地があると感じた点

・ 出席簿のまわし方について.検討が必要である。

（3）その他、気づいた点・疑問点

・自分の授業でもそうであるが，学生が授業途中に，後ろめたさもなくダラダラと入ってくること。このような態度は，強く戒める必要を感じる。怒鳴りつけても効果はあまりなかった。教える側もやる気を失う。

・いまの学生には 90 分授業は長すぎるのではないか？（60 分が適当！？）

・教える側も 90 分授業はしんどいと感じる。

（4）今後の授業公開についての意見

・基本的にどの授業も，いつでも公開されていればよい。それだけで，教える者はいい加減な授業をやりにくくなる.。

2.2.1.2　授業公開報告（後期）

日付： 12月14日 金曜日3限
参観授業名： 生物資源学概論
担当教員名： 大田 正次 先生
教室 ： L206
参観教員名： 池田篤治，吉岡 俊人，木元 久

（1）参考になった点

・授業開始時にユーモアのあるクイズを導入することにより，学生の関心を高めるような工夫が参考になった。同様に，授業中においてもユーモアを交えながら学生に考えさせる機会を適度に与えていたこと。これらの工夫により和やかな雰囲気で授業が進行していた。授業開始時から出席率が高く，遅刻してくる学生が極めて少ない理由であろう。

・ 学生の集中力が落ちてきた頃に，絶妙なタイミングでスライド講義へ切り替えたこと。

・スライド中にも板書を入れることで，講義が単調になることを防いでいた。

・配布資料がとても丁寧であった。

・内容が多めの配布資料であったが，各図に見やすい通し番号が付与されており，教える側だけでなく，聴く側にとってもわかりやすかった。

・着座位置からの板書の見え方がわかったこと。

・ 授業レポートを後日ではなく授業時間内に作成させる点がよかった。

（2）改善の余地があると感じた点

・ 特に講義の内容に関して改善の余地は感じられなかったが、配布資料に写真や小さい文字がある場合は学科に設置されている印刷機の解像度が低いため，コピー機を利用しているとのこと。参観教員も印刷機には日頃から不満を感じており，もっと解像度の高い印刷機の導入が望まれる。

（3）そのほか、気づいた点・疑問点

・机のがたつきがひどく，文字がとても書きにくかった。この種の問題は実際に授業に参加しないとわからないことを改めて痛感した。

・遅刻者や居眠りをしている学生について，これから学科としてどのように対応していくか考える必要があると感じた。

2.2.1.3　FD セミナー

テーマ：「私が経験した、韓国・日本・アメリカの教育」
講師：Kim Jin-kyung 教授
日時：2007 年 11 月 29 日 16 時〜18 時
場所：共通講義棟　L112 教室
参加者：25 名（生物資源学科教員 10 名，大学院生 15 名）

－研修内容－

第一線の研究者である Kim Jin-kyung 博士の実体験に基づいた、韓日米国の教育のあり方の比較について、様々な実例を挙げながら報告された。

特に、印象に残ったのは担当する学生への責任のあり方についてである。日本では講座制が基となった垂直型の教員配置がされていることもあり一人の担当教授に権限や責任が集中するのに対して、韓国や米国では複数の教員が権限や責任を分担しており、特に米国では教員が構成する委員会を中心として組織的に学生の面倒を見る点で、修了にかかる時間や費用は増えるものの学生個人の能力を高めるのには優れたシステムとなっているという指摘がされた。

また、韓国では入試や卒業試験の科目に偏重があり社会問題化しており、人間形成に関してよりバランスのとれた教育を目指すことが必要であるとされたが、一方で教育に関する関心は日本よりも高く、研究や教育への社会資本の投資は非常に高いことや国際化が強く意識されている点もよく示されていた。

最後に、アジア地域での大学に対する関心の高さの一つとして、世界の「小さくて強い大学」を紹介した本の内容について分析され、そうした大学が目指すべき方向性として、より特色が明確であることが求められることを述べられた。

2.2.2　海洋生物資源学科

本年度の海洋生物資源学科 FD 活動では，授業評価および授業公開を行った．以下，授業公開について活動を報告する．

2.2.2.1　授業公開報告（前期）

所属部局：生物資源学部　海洋生物資源学科

実施月日：2007 年 5 月 31 日 2 限

場所　：小浜キャンパス M203 教室

授業名　：海洋分子生物学

担当教官：神谷充伸　先生

対象学生：生物資源学科 2 年生（受講者数 24 名）

参観者数：9 名（大泉徹，加藤辰夫，近藤竜二，青海忠久，田原大輔，富永修，水田尚志，横山芳博，吉川伸哉）

（1）参考になった点

・授業の冒頭に前回のまとめをわかりやすくスライドにまとめておられること．

・美しいスライド，プリントを作成されていること（配布資料がカラーで作成されていた）．

・わかりやすいスライドが多かった．

・講義資料が整理されている．

・一方通行にならないよう双方向形の授業になるよう努力されていること．

・学生の授業参加をうながすために，あてて発言させています．

・講義中に学生への質問を入れることにより，重要な点を強調することができる．

・時々ノートに書きとらせることも眠け防止に役立つ．

・パワーポイントと板書を併用することで重要点が理解しやすい．

・板書は要点のみで簡潔でよい．

・授業のスピードがちょうど良い．

・大変ていねいに授業を進めておられます．

・メリハリがある（学生を指名し休憩，ポイントをおさえた板書）.

（2）改善の余地があると感じた点

・当日の授業の内容，目標を最初に示すと良いのではないでしょうか？

・授業後半の学生の集中力低下に対する工夫が必要ですね.

・質問タイムを設けたほうがよい.

・話し方の問題,「え～」が多すぎて聞きづらかもしれない.

・時間配分を考えて，時間内に講義を終わらせる必要がある.

・知らなかったりわからなかったりしても，自分で考えて発言しようとする学生が少ないですね（これは改善すべきという意味ではない）．なかなか難しいです.

・学生への質問でリスポンスが無い時の対応を迅速にするとよい.

・シラバスの中での位置付けを明確にするとよいのでは.

・全ての質問ではないが，学生が答えやすいように質問を誘導すると良いと感じた.

・質問の際に，はじめから正解が答えられなくても，答えに結びつくような誘導があってもよいのでは？

（3）そのほか，気づいた点・疑問点

・授業科目間のつながりを，より意識させる工夫が必要になっている.

・名前を呼んで出席をとっているが，他の大人数の授業でも可能か？

・レポートや試験はどの程度の回数を課していますか？

・板書するときに黒板が振動するのが気になった.

・パソコンの自動更新画面がたびたび現れていた点（設定解除）.

・本論と関係のない専門用語は簡単な説明をしては？

（4）担当教官のコメント

質問の仕方について何人かの方からアドバイスいただきましたが，大変参考になりました．これからは回答できなかった場合も想定して，いくつかの質問パターンを考えておくようにしたいと思います．また，学生が最後まで集中を切らさないための工夫については，自分もその必要性を感じています．もう少し授業時間にゆとりをもたせて，授業内容に関連した最近のトピックを紹介するなど工夫しようと思います.「え～」が多いというのは全く自覚していませんでしたので，驚きました．正直なところ，直せるか自信ありません・・・.

（5）その他，授業公開についての意見

・半期に 1 回だけでなく，もっと何度も多くの教員で実施したらいいと思います.

・常時，公開してもよいのでは.

・年 1 回の出席を義務化してもよい（海洋生物資源学科で試みるのもよいのでは）.

・まず，参加してみることが重要だと感じた.

・授業公開を通して講義内容のすり合わせ，調整が必要と改めて考えさせられた（講義内容の重複と学生の知識レベルの点で）.

・ 豊富な経験を有する教授の授業公開を希望する.

・授業公開に参加したことがない教官からアンケートをとって，参加しない理由やどうしたら参加できるかなどの意見を吸いあげてみるのも手かもしれません.

2.2.2.2　**授業公開報告**（後期）

所属部局：生物資源学部　海洋生物資源学科

実施月日：2007 年 12 月 10 日 2 限

場所　：小浜キャンパス M203 教室

授業名　：沿岸海洋学

担当教官：瀬戸雅文　先生

対象学生：生物資源学科 2 年生（受講者数 28 名）

参観者数：7 名（大泉徹，加藤辰夫，兼田淳史，神谷充伸，近藤竜二，青海忠久，東村玲子水多）

（1）参考になった点

・前回の講義の復習を適度に行い，導入部がスムーズに行われていた．

・パワーポイントによる丁寧な資料でよく整理されていた．数式の小さな文字は見えづらいが，資料で補っていた．

・図を多用して分かりやすい資料である．

・スライドのデザインが工夫されており，説明とよく対応している．

・説明に無駄がなく，筋道が明確である．

・学生にイメージさせて概念を理解させようとする工夫が見られる（数学が苦手でもついていける工夫）．

・説明が大変丁寧で，画面も 2 画面使うことで話が理解しやすい．

・話がよどみなく，話す内容も理路整然としているように感じた．

・重要な点を強調して説明している．要点の纏め方も上手．

・最後のまとめで概念のつながりを整理している．

・次週に実施される中間テストのアドバイスは学生にとって有益である．

・資料の中に例題をつくり，学生の理解を助けている．

（2）改善の余地があると感じた点

・長い時間説明が続く場面では，学生が資料に記述する場面や学生への質問の問いかけ場面を敢えて作ると効果的かも．

・先生の熱心な説明にもかかわらず，寝ている学生が多かった．寝させない工夫も必要だと思ったが，過去問の説明になるとみんな起きていた．学生もよく知っているようだ．

・1 枚のスライドに情報が多いような気がする．逆に今，どの辺りの話がされているか分かりやすいとも言えるが．

・プリントが配布され，主要なポイントは記載されているが，学生が聞き流しているような印象を受けた．理解度をチェックするような工夫が必要ではないか？

・元々，この分野は不得手な学生が多いので，講義を聞いているばかりでは，学生にとっても注意を集中しにくいと思います．多少，相互のやりとりや実際に計算などさせる様にすればいかがでしょうか？（最後の中間テストの説明で少しありました）．

・ほとんどの学生がノートをとっていないようだが，授業についていけてるか？

・質問などで学生の理解度をこまめにチェックするとよいのではないだろうか．

・座って講義すると説明に集中していないよう思います．スライドのポインターも見難いので，指し棒などを使うほうが良いと思います．

・集中力の回復のため，講義の途中で一息入れるのはいかがでしょうか.

（3）そのほか，気づいた点・疑問点

・小浜湾の波や台風など具体的事例は，学生の理解や関心を高めるのに効果的に働いているように感じた.

・復習の時間を短縮し，その分，新しいことの説明時間をとれないだろうか？と思った.

・遅刻者が多いように思う.（対応が必要ではないか？人の講義のことが言える状況ではないが．改善する工夫はあるでしょうか？私の授業でも遅刻が多くて頭が痛い.

・いつもながら選択科目は少人数で良いなと感じた.

・パソコン操作の為にしかたがないが，講師がすわったままより少し動いたほうがよい？

・携帯で遊んでいる学生がいる.

（4）担当教官のコメント

JABEE が浸透し，学生が自らの適性をもとに受講科目を選択する傾向が強くなったためか，今年度は前年度以前と比較して，受講者数が 2/3 程度まで減少したため，講義室を若干小さめの M208TV 講義室に変更するとともに，TV 講義室の長所を活かして，パワーポイントを２画面使用して授業を実施している．従来は板書していた補足説明をパワーポイントで説明することで，数式の記述ミスや，時間的に板書では困難であった図表等を用いた説明の充実を試みた．しかしながら，授業に集中できない学生が少なからず認められる状況は改善されていない．今後，講義内容を減らして，演習問題など学生との共同作業時間をつくる方向で修正するのであれば，JABEE 水準などの縛りから，科目名や履修目的の思い切った変更などと併せて，生物や化学を指向する学生のための導入教育的要素の強い科目に内容自体を変更してゆくことが必要となるであろう．或いは，本科目は選択科目であることから，更に受講者数を適性テストなどで半分程度まで絞り込んだ上で，演習問題（レポート提出）や双方向型の授業に力点を移しながら，本科目の本来の到達目標に受講者全員が到達できるような理想型を模索してゆくことも一考である．最後に，年末のお忙しい中，公開授業にご参加いただいた先生方よりいただいた貴重な意見は，日頃より当方が感じていた感想とほぼ一致しており，今回の授業公開を一つの転機として，授業内容や授業実施方針の思い切った改善・変更に繋げてゆければと考えている次第です.

（5）その他，授業公開についての意見

・シラバスを読んでから参加すべきだと思いました（自分の反省）.

・必修の授業についても授業公開を行うことが必要ですね.

・実験実習についての公開もあると良いと思います.

・授業公開する教官から予め「かかえている問題点」や「注目してほしい点」を知らせてもらえると参加者がそれを意識してのぞめるのではないか.

2.3　看護福祉学部

看護福祉学部で本年度に実施した FD 活動は授業評価，授業公開，FD 研修（学外および学内）である．以下には授業公開と FD 研修について記述する.

2.3.1　授業公開

本年度実施した授業公開は前期１件（看護学科），後期4件（看護学科2件，社会福祉学科2件）

であった．授業公開は2005年度に作成された基本方針とガイドラインに概ね沿って実施したが，担当教官の裁量で若干変更した．

2.3.1.1　実施概要

実施概要は表 2.3-1の通りである．看護学科の授業公開は全て一コマずつであった．社会福祉学科は公開日を特定せず随時参観可とした．

表 2.3 - 1　2007年度授業公開（看護福祉学部）

月日,曜日	時限	講義名	教員名（学科）	教室	学生数	参観者
6月 5日,火	4	解剖生理学Ⅰ	本田（看護）	L208	５９	４名（交野，大川，有田，笠井）
10月23日,火	3	老年臨床看護学Ⅰ	寺島（看護）	L210	５４	１名（長谷川）
1月22日,火	2	小児看護学概論	赤川（看護）	L210	４９	９名（國分，加藤，本田，大川，谷口，有田，田中，長谷川，高井）
随時,水	1	精神保健福祉論Ⅰ	真野（社会福祉）	N251	３０	０名
随時,水	2	社会福祉演習Ⅱ	真野（社会福祉）	N402	３	０名

2. 3. 1. 2　実施教員による授業公開の報告より

（１）解剖生理学Ⅰ（看護学科）

実施月日　2007 年 6 月 5 日（火）4 時限目
場所　福井キャンパス　L 208 教室
科目名　解剖生理学Ⅰ
担当教官　本田和正　教授
対象学生　看護学科 1 年生　５９名
参観者数　4 名（交野，大川，有田，笠井）

公開授業に参加した教員からの意見と担当教員の感想

１）　参考になった点

- テキストと図が両画面でみられ，理解し易い点
- 資料，テキストに工夫がこらされている点
- 学生が書き込むスペースがあり，講義に参加する工夫がある
- 1 コマの授業の組み立て方（講義 60 分，質問 10 分，小テスト 10 分，採点 10 分）が良いと思った．

・必要な図がわかりやすく提示されていて説明があった点がよかった.

担当教員のコメント

講義資料の作成，使い方に関しては概ね肯定的なご意見をいただき，安心しました.

2）改善の余地があると感じた点

・決められた時間の中で大変なのですが，少しの時間でも動画を使って循環系全体を知ってから講義が聴けるとイメージしやすいのではないかと感じた.

担当教員のコメント

ご指摘の事は私自身も感じていることでありますが，短い時間で見せられる動画が現在手元にありません．重要な検討課題だと受け止めています.

・パソコン画面上で，図をカーソルで指示している時，学生は資料に目が向いているために，図上での教員の説明が伝わっているかどうか不明瞭と感じた．画面でカーソルがわかりにくいので，教員が画面の前に出て直接説明することにより，学生の注意が向く．また講義の空気が変わり，メリハリが出るかと思う.

担当教員のコメント

このご指摘も大変ごもっともだと思っているのですが, TV 講義室のスクリーンはポインタが非常に見難いので（学生からクレームをもらいました）やむを得ずパソコンのカーソルを使うようになりました．もう一つの理由は学生から重要な点を明示して欲しいと言う要望を再三受けた結果，テキスト資料の画面上にアンダーラインを引きながら説明するようになり，パソコンから離れられなくなってしまいました．今後の検討課題とします.

・資料に学生自身が書き込むよう指示していたが，講義の説明の中で１カ所ずつ書き込む方が，説明内容と一致するのではないかと思った．時間制限があるので仕方のないことかもしれないが.

担当教員のコメント

このご指摘もその通りだと思っております．最初は説明しながら書かせるスタイルを取っていたのですが，説明に気を取られて学生がメモを取り終わったかどうかまで気が回らなくなってしまいました．スクリーンのスクロールが早すぎるし，メモを取るのが精一杯で説明を聴いている余裕がないというクレームを学生から受けた結果，先にメモを取らせてから説明をするというスタイルに落ち着いてしまいました．いい方法が無いか，考えてみます.

・解剖生理学は専門用語が多く，図などの意味が学生に十分に伝わっているかどうか疑問に思われる点がある.

担当教員のコメント

教官側にとっては当たり前の言葉の意味が学生にはまったく理解不能な言葉であることを知って愕然とすることがよくあります．限られた時間で教えなければならずジレンマですが，重要なご指摘であると感じています.

3）その他，気づいた点・疑問点

・科目の性格上，基礎知識として正確に覚えることに主眼がおかれているので，その授業内で小テストを行うことは記憶を確かなものにする意味で大変よいと思う.

・小テストは評価でどのように取り扱っていますか？

・担当教員の講義資料を作成するために大変な労力と時間を費やされていることがよく理解でき，熱意が伝わった.

担当教員のコメント

毎回の小テストの平均点を評価の３０％に入れるということを学生に伝えてあります. 毎回小テストを実施し，しかも評価の一部にすることで学生が授業に取り組む姿勢は格段に向上したように感じています.

４）今後の授業公開についての意見

・大学の講義は教員の全責任の基で，学生に向き合い常に試行錯誤して，よい講義にしていくものであると考える．教員ならよい講義をしたくないと考える人はいないし，よい講義をしようとする教員の姿勢が学生に伝わることが重要と思う．講義の方法ではなく，重要なのは学生に伝える内容ではないかと思う．したがって，関心のある講義はその教員とコンタクトを取り参観させてもらえばと思う.

・授業公開のために，参加教員に配布する資料の準備をすること，また，授業後の検討会で授業時間が削減されることについては改善して欲しい（看護学科の教員は実習もあり忙しく，授業もかなり内容をつめているので).

・授業公開のために，検討会の時間をとられるのはいかがなものでしょうか．特に専門科目によっては時間不足の科目もあるので.

・専門分野が異なる場合，授業方法についての批判は難しい.

担当教員のコメント

確かに、授業をより良いものにする為に最も必要な事は、学生に何を伝えたいかを明確にすることではないかと思います。それが明確でなかったらどんな優れた方法を取り入れても良い授業にはならないだろうと考えます。また、授業公開のために貴重な講義時間が削除されることは本末転倒であり、改善の必要があると感じています。

（２）老年臨床看護学Ｉ（看護学科）

実施月日　2007 年 10 月 23 日（火）3 時限目

場所　　福井キャンパス　　L 210 教室

科目名　　老年臨床看護学 I

担当教官　寺島喜代子 准教授

対象学生　看護学科 2 年生

参観者数　1 名

授業公開の経験をとおして

公開授業ということの緊張は授業開始前が強かったが,授業が始まるとそのことを意識する余裕はなかった（授業内容が密であるため，制限時間内で予定された内容までたどり着けるか否かに関心が向いたため・・・・学生からの授業評価で「時間配分が下手！」と指摘を受けています）

公開授業のための準備はできず，これまでの授業の流れの中で（老年看護学概論や臨床看護学Ｉの前回の講義など）の今日の講義があるので，その理解が得られるか否かが心配であった.

公開授業に参加した教員からの意見と担当教員の感想

１）参考になった点について

・ 先輩学生の実践例が具体的に提示されているので，看護の力，看護介入の可能性が非常にイメージしやすいと感じた（学生自身，自分ももしかしたらこんな実践が出来るのかな，出来たらすごいだろうなというイメージ・希望が持てたと思う）．

担当教員のコメント

学生は２年生であり，専門領域の学習開始の時期でもあり授業に対する動機付けが難しいと考えています．そのため，夏の基礎看護学実習での実習体験での患者像を意識しながら，先輩の学生の実践内容を紹介して具体的な看護実践を学生がイメージしながら受講できるようにしています．

２）気付いた点，疑問に思った点について

・ 授業開始直前に学生が教卓付近の席に移動しました．（座る場所を指定されておられるのでしょうか）

担当教員のコメント

授業の中でグループ発表があるので，「グループ毎に着席」は初回の講義の時に指示しました．以後，座る場所（前列からつめるなど）については教員の方からは指定しておらず，授業開始と同時に学生が教卓付近から座っています．

学生からの授業評価でいつも「時間配分が下手！」「早口で聞き取れない」「講義内容が多すぎるので内容の吟味が必要」と指摘されます．そのため，授業に参加されてこうした印象を持たれなかったかとても気になっていましたが，今回の授業ではそうした意見がなく安心しました．

３）今後の授業公開を行うにあたっての意見

・ 本学科の場合，特に実習時期と重なると，参観したくても参観できない場合が多いと思います（自分の講義等と重なった場合も同様）．授業公開は異なる領域の教員の講義を聴かせて頂ける滅多にない機会です．様々な理由で参観したくても出来ない教員もおられると思うので，不可能かもしれませんが，例えば授業風景を録画するなどして，当日参観出来ない教員への配慮等はご無理でしょうか．

担当教員のコメント

私も以前，公開授業に参加できず残念な思いをしましたので，このご意見は理解できます．

（２）小児看護学概論（看護学科）

日時: 2008年1月22日(火) ２時限目

担当教員名 ： 赤川 晴美　講師

学生の出席数: 49名(54名中)

参観教員人数: 9名

*以下の 1) 2) 3)について「」で示した意見・感想は，参観教員による調査票の意見，及び授業終了時の学生アンケートの感想を使いました．

1) 授業公開についての感想

・9名の教員の方の参観に対して，お忙しい中時間をさいていただき恐縮しています．

・「今回のように他の教員が参加しやすい時に授業公開が行われたのが望ましい」という意見があるように，看護学科は10月から12月は臨地実習にかかわる教員が多く，それが終わってい

るこの時期の授業公開が参加につながったと思われます．また，教育学習支援チーム担当教員が授業公開について何回もメールや学科会で周知していただいたこともこの参観数になったと考えます.

・「授業公開は勇気が必要と思います」という意見のように，今回の授業公開は学科会で名簿順だからということで引き受けることになったのですが，行うとは言ったものの参観者がいなければという思いがよぎったのは事実です．前日までに8名の参観をいただくことが分かり，正直驚きました.

・日頃から他の教員がどのような授業をしているか知りたいと思っていましたので，今回は私がどのようなことを考えて授業しているか知っていただく機会になればと思い直しました.「参観教員を意識しないで授業を進めていただきたかった」という意見をいただきましたが，私は，逆に参観教員を意識して，これまでの授業内容を知っていただきたいという思い，授業のおさらいと課題のコメントを関連させた内容から始めて本日の内容に進めていきました．学生にとっても，この授業は最終日であり，これまでの授業のあらすじを呼び起こしてもらい，提出課題に対するコメントを行い，今回の授業内容につなげるという流れにしたいと考えていました.「今日は今まで習ってきたものを全体に見つめ直せて，子どもの見方がどう変わったか実感できた」という感想を述べている学生がいました.

・今回の授業では，新聞投書について学生間でミニ討議・発表を行わせたのですが，学生の意見に対して，参観教員から関連分野の意見をいただく機会に恵まれました．私も視野が広がりましたし，学生も，「他の先生の話も興味深かった」,「いろんな先生の話を聞けてよかった」と感想に書いていました．参観教員の参加型の授業公開もあってよいのではと思いました.

2)調査票についての感想

・討論会は授業時間確保を優先して行いませんでした．終了時に調査票に参観いただいた教員にご意見を記入していただきました．調査票から次のようなことが分かりました(上記で「」の部分も調査票による意見です)．今後の授業の参考にしていきたいと思います.

・「気づいた点」として，①話し方で特にはじめのテンポが速く，語尾が聞き取りにくいことがある，②教室が明るいとパワーポイントが後方では見えにくい，③配布資料・教科書・パワーポイントの対応について指示が不十分，④授業の焦点がどこに当たっているか明確でない印象を受けた，という意見がありました.「改善点」として，①「授業の項目をもう少し明確にすること」,②「スライドの説明文の中に，キーワード，ポイントの提示を工夫してはどうか」という意見は今後の参考にさせていただきます.

・「参考になった点」として，①「資料が準備されて熱意が感じられた」・「ていねいにスライドが作成されている」などの資料・スライドの準備についての意見，②「講義のみでなく課題を与えて学生に考える機会，発表の機会を与えているのはよい」,「事例をとおして関心をもたせる工夫をしている」,「新聞投書を提示して学生に考えさせるのはメリハリがつく」など授業展開の工夫についての意見，③「授業終了時のアンケートをとるのは参考になった」という意見，④「受ける側の反応を見ながら行われている点がよかった」,⑤「小児看護学の講義を受ける機会となり，参考になった」・「子どもの健康に関わる社会力について幅広く教授しており参考になった」という意見をいただきました．今後の授業展開の励みになりました.

・「気づいた点」として,「2年生の意見がしっかりしている」,「あまりにも遅刻する学生が多い」

という学生に対する意見をいただきました．遅刻が多いのは毎回のことですし，8回の授業で全員出席の日は一度もありませんでした．1時限も同じ教室で他の必修科目の授業があり，この授業は2時限なのですが，何か方策があるでしょうか．

3)その他授業公開についての意見

・参観教員の9名の内訳は，看護学を専攻する教員7名，他の2名は医学系の教員でした．お互いがどのような授業を行っていることを知ることは，看護学科の看護教育にとって必要なことだと再認識しました．授業を公開する側はとても勇気と労力がいるのですが，是非他の教員の方々も行ってみてはいかがでしょうか．そのときは参観させていただきたいと思います．

・1)でも書きましたが，参加型授業公開というあり方も検討の余地があると思いました．

（４）精神保健福祉論Ⅰ（社会福祉学科）

実施月日　随時（後期）
場所　　福井キャンパス　　N 251 教室
科目名　　精神保健福祉論Ⅰ
担当教官　真野元四郎　教授
対象学生　社会福祉学科　年生 名
参観者数　０名

（５）社会福祉演習Ⅱ（社会福祉学科）

実施月日　随時（後期）
場所　　福井キャンパス　　N 402 教室
科目名　　社会福祉演習Ⅰ
担当教官　真野元四郎　教授
対象学生　社会福祉学科　年生 名
参観者数　０名

2. 3. 1. 3　授業公開の総括

看護学科

授業によって参観者数に大きなばらつきが出たが，看護学科では隣地実習の時期に多くの教官が学外に出ており，授業を参観したくても出来ない事態になることが判明した．これは教育学習支援チーム員の認識不足によるものであり，公開時期を十分に吟味する必要があることを認識した．

授業公開への参観教官の一部が，その後自主的に継続して授業を参観しており，授業公開の自由化へのきっかけとなる動きとして評価できる．しかし，学科全体として見ると，しばらくはチーム員が授業公開をリードして実施していく必要性を感じている．

看護学科の授業は一般に内容が多くて時間に余裕がないので，授業公開等のFD活動の実施によって教育活動に支障をきたさないように十分に配慮する必要があることが明らかとなった．

社会福祉学科

後期に随時参観可という形で，２つの公開授業を実施したが，残念ながら１人の参観者もなかった．

看護学科と同様，社会福祉学科でも実習や見学，そのための打合せ会議といった用件で多くの

教官が学外に出ており，授業参観のための時間を確保することが容易でないことが判明した.

こうした事態がある程度予想できたので，公開日時を限定せず随時参観可としたが，曜日と時限が固定されているため結果として，参観者は０であった.

来年度以降は、公開する授業のコマ数を増やすなどの対応を行い，参観したくても時間的な制約のため参観できないといった事態が発生しないよう調整していきたい.

2. 3. 2　FD研修

本年度実施したFD研修は学内研修が２件（各学科で１件ずつ），学外研修が３件（看護学科２件，社会福祉学科１件）であった.

2.3.2.1　実施概要

看護福祉学部における本年度のFD研修の実施状況は表 2.3 － 2 のとおりである.

表 2.3 – 2　看護福祉学部におけるFD研修概要

分類	実施日	内　　容	参加者数
講演・セミナー (社会福祉学科)	12月12日（水）	テーマ　ソーシャルワークの将来像と社会福祉教育の課題・展望 場所　福井キャンパス　看護福祉学部棟４階　教授会室 形式　講演と質疑応答・意見交換会 概要　大阪市立大学大学院教授，社会福祉士養成校協会長白澤政和先生による講演と質疑応答・意見交換会	17名
講演・セミナー(看護学科)	3月1日(土)	テーマ　看護学教育に関する改正カリキュラムにおける卒業時到達目標の背景とその意味 場所　福井キャンパス　看護福祉学部棟４階　教授会室 形式　講演・セミナー 概要　神奈川県立保健福祉大学看護学科教授　小山眞理子先生による講演	27名
学外研修(看護学科)	10月17日（水）	テーマ　高等教育における教員の ICT 活用による教育力向上に向けて 場所　メディア教育開発センター日本科学未来館みらいCAN ホール 形式　講演・パネルディスカッション 概要　基調講演と２つのセッションによる講演と討議	205名(本学から1名)
学外研修（社会福祉	10月21日（日）	テーマ　国際ソーシャルワークセミナーⅡ 場所　東京都新霞ヶ関ビル　灘尾ホール	本学か

学科）		形式　講演・シンポジウム 概要　３つの記念講演とシンポジウム	ら２名
学外研修（看護学科）	11月12日（月）-14　日（水）	テーマ　平成19年度看護学教育ワークショップ（第9回） 場所　千葉県木更津市　かずさアカデミホール 形式　基調講演・ワークショップ 概要　改正が予定されている保健師助産師看護師学校養成所指定規則に対する各看護系大学の対応状況を持ち寄り，関係者間で課題や解決の方向性を整理・共有することを通して，看護実践能力を確実に育成する質の高い学士課程カリキュラム構築を促進する．	113名（本学から１名）

2.3.2.2.　**学内講演・セミナー**

（１）ソーシャルワークの将来像と社会福祉教育の課題・展望

日時　2007年12月12日（月）午後２時～午後5時15分

テーマ　「ソーシャルワークの将来像と社会福祉教育の課題・展望」

講師　白澤　政和先生（大阪市立大学大学院教授）

場所　看護福祉学部棟５階　教授会室

第１部

前半（講演）

13:30　開場・受付開始

14:00　開会の挨拶

講師紹介と研修会の進め方の説明

14:10　講演（90分）

15:40　総合司会による要点整理

15:45　休憩（15分間）

後半（意見交換会）

16:00　意見交換会の進め方の説明

16:05　意見交換【質疑応答】（45分）

16:50　総合司会によるまとめ

16:55　閉会のことば

17:00　終了

講演要旨

・ 社会福祉教育セミナー後、11月27日に社会福祉法改正法案可決。12月１３日にカリキュラム検討委員会で最終結論（東京）。17 日(月)に厚生労働省から各養成校へパブリックコメント募集（1月15日まで)。12月26日　社会福祉士養成校協会主催の養成校代表者会議の開催（駒沢大学）の予定。

・ 2月以降、各大学は1年かけて準備を行う。教科書も含めて改訂したい。新4回生は新カリ

キュラムで国家試験を受けることになる。一般養成施設は 1 年単位なので、そこにあわせた改定になって、大学が合わせることになる。読み替え科目については柔軟にする。

- 新規科目が出てくる。法務省関係、刑務所関係の更正保護関係の科目。就労支援に関係する科目。ニートの問題、ハローワークの民営化などに対応。現 2 回生が 4 回生になるときに、履修する必要がでてくる。
- 実習・演習について、実習担当教員要件それほど厳しくはしない方向でいく。一般養成施設での要件と同じ。社会福祉士資格で 5 年間の経験がある人を想定。2000 人は現行どおりでだいじょうぶだろう。1000 人は研修が必要になる。8 日間から 9 日間の研修。社養協は国が決めたミニマムを超えた部分を対応。
- 実習担当者（実習指導者）に資格要件がでてくる。社会福祉士有資格者で研修を受けた人のみ。経過措置中の 3 年間で 9000 人を養成予定しているが、施設が職員を研修派遣してくれるかどうかが課題である。大都市では実習施設の取り合いになる可能性もある。
- 今回の改正は社会福祉士の職域拡大、待遇改善のチャンスである。
- 大阪市立大学も競争率は下がってきている。学内であっても看護系との学部間競争も激しい。学科がなくなったり、教員が減らされる可能性もあるという危機意識。研究費獲得や就職状況の改善を求める必要がある。
- 日本学術会議　社会福祉教育の近未来（10 年先への展望）報告書（共著者　大橋、古川、高橋会員）を発行予定。3 月にシンポを開催予定。
- 社会福祉士養成教育の変化　現在 270 校へ増加。社会福祉教育学校連盟は減少している。
- 精神保健福祉士の国家試験の共通科目について、読み替え科目で対応していく。今後 1 年かけてカリキュラム検討を開始する。大阪大学看護学部は 4 番目の合格率である。
- 今年度、徳島大学歯学部歯科衛生士学科、新潟大学歯科衛生士科なども加盟予定。神奈川保健福祉大学では看護学科も社会福祉士資格が取得可能である。社会福祉士は取りやすいため。社会福祉士資格が独自資格ではなく、オプション的なものになってしまう。
- 伝統校―リベラルアーツ（文学、社会学系）は、アドミッションポリシーと資格養成は一致しない。伝統校は必ずしも養成教育に進む必要はない。半年の養成施設にいけば国家資格取得も可能。国家資格ができて急増した専門職業人教育は、資格養成教育が中心。福井県立大学や大阪市立大学も後者に入ると思う。
- 社会福祉士制度 20 年の反省―試験には通っても実践教育はしていなかった。合格率 20%を上げる努力をしてきたか。現状で基準時間数を超えていない大学も多い。
- 実習指導者との契約について、学生評価にも関係してくるので、受入体制の問題がでてくるだろう。実習は質的向上、演習は若干の量的増加の方針。各養成校での自主的な努力を期待。例　東京福祉大学 360 時間、神戸学院大学　700 時間以上、国際医療福祉大学 360 時間の実習をやっている。
- 新カリキュラム・シラバスについて―教育の範囲を広げるともに、実習施設・機関の幅も広げることを要望していく。
- 国家資格について―他の専門職と比較して、なぜ社会福祉士の合格率が低いか。80%の合格率になるように制度改革をしたい。別個で委員会を立ち上げて検討していくことになる。
- 職域の拡大について―民間刑務所（山口）では社会福祉士または精神保健福祉士を採用し、

効果を上げている。刑務所に知的障害者の割合が多いことを反映している。スクールソーシャルワーカーに対する文部科学省の予算措置も始まった。

- 法律案の付帯決議—介護報酬の資格加算、キャリアアップの支援、福祉事務所での社会福祉士の登用、専門社会福祉士の仕組みづくり、司法、教育、労働分野への職域拡大を要望した。
- 1 月に大学、社会福祉士会、精神保健福祉士会が合同で、各都道府県知事および各市町村長、司法、教育委員会等へ緊急アピールを予定している。（資格取得者、取得見込み者のみを福祉職として採用するように。社会福祉士を任用すること。）
- 社会福祉士改正についての新聞広告（朝日、読売）5 月を予定している。ソーシャルワークの日の周辺に計画している。
- 待遇について—介護保険における資格加算を社会保障審議会に要求準備している。社会福祉施設への待遇改善についての緊急アピール
- ソーシャルワーク教育の方向性について—ソーシャルワークを見せる仕事にしたかった。ケースワークをメリハリのある支援を教育したかった。誰が支援しても同じ内容であるべきである。ニーズとは何かを利用者と専門職が共通する。生活に関するケアプラン、アセスメント用紙などを作った。コーディネーションについて、一定の方法が確立しつつある。社協、地域福祉学会などでネットワークについては、研究の蓄積が弱い。
- 規制緩和委員会—今後、外国人介護福祉士・社会福祉士が来る可能性がある。フィリピン大学卒のルーテル学院大学教員によればカナダやオーストラリアで働いている。日本から世界に発信する人材を養成すること、海外からの留学生の拠点づくりが必要ではないか。
- 大阪市立大学学部ＧＰ－ＱＯＬプロモーター資格の構築—専門職連携教育。大学院ＧＰ－地域で活躍できる臨床栄養士の育成と学位取得（ex.埼玉県立大学）商学部、経済学部と生活科学部で福祉施設管理者の養成教育を計画中である。
- 国家資格の制度について—社会福祉士を基本として、精神保健、医療、高齢者などに専門分化、アクレデーションを構築していく仕組みに持っていきたい。
- 専門職養成意欲の促進—社会福祉士のアイデンティティの構築が必要である。地域貢献のみならず、学生の就職や職域拡大にもつながるローカルな立場での大学の役割が重要である。内部のみならず、外部の団体・組織との連携が重要。

意見交換会および質疑応答（16：10～）

- 3 割の福祉系応募者の減少についてもう少し説明してほしい。→河合塾の調査によれば昨年度は薬学系と同じ 25%の応募者数の減、今年度 27%の減少）例：関西福祉科学大学　応募者の 4 割減少。定員割れの福祉系大学が増加している。
- 参議院の付帯決議で、関連領域の専門職が社会福祉士資格を取りやすくする取り組みについても記述があった。社会福祉士の通信教育を認めることの記述があった。簡単に取れる資格になっている現状について。→通信教育については、実習時間を現状より 2 倍に増加させた。通信制は四大を出た学生に対する施策である。公明党から保育士から社会福祉士への道を作ってほしいとの意向があった。児童養護施設に児童指導員として勤務している保育士はなんらかの移行が必要と国は考えている。介護福祉士については今後の議論である。相当数の 4 大が社会福祉士と介護福祉士を同時に養成している。今回の改正で、介護福祉士と社会福祉士が重なる科目が少なくなるので、同時に資格を取ることは難しくなるだろう。社会福祉士

と精神保健福祉士は同時に取得できるよう考慮していく必要がある。

- 社会福祉士が介護職につく場合の困難さについて→介護は別にレベルを上げる必要があるので、分けて考える必要もある。現在の看護資格は以前と比べて社会的認知や待遇が向上した。
- 実習施設の担当者の条件が厳しいのでは。→実習費の国庫負担はだめだった。介護サービス情報および第 3 者評価の中に実習受け入れの項目を入れることを国に要請している。実習受け入れを重要視している施設長も多いので期待している。各都道府県社会福祉士会が研修をやるので、その活動に期待したい。
- ＯＪＴについて、大学の卒後教育についてはどうか。→専門社会福祉士とキャリアパスを議論している。職能団体、大学のどちらが行うか。アクレデーションを出すかどうか。医師や看護師の専門資格制度を参考にしている。養成校と大学側が社会福祉士会と分担などを協議してから、国と交渉していくことになる。大学院教育にいくほど給与も高くないので、大学院で対応は難しい。
- 実習担当教員の 8 日間の研修について。→社養校に実習部会、演習部会、実習担当教員研修部会があり、国がシラバスや時間数などを作り、社養校が調査研究後、詳しいガイドラインを検討していくことになる。
- 国際化、グローバルスタンダードについて、社会福祉士資格者が青年海外協力隊などで活躍しているが、海外の現場で苦労している。日本福祉大学はコミュニティデベロップメントワーカーを取り組んでいる。→ジャビー（建築等関係の国際資格）のような国際資格についても構築する必要があることを日本から発信していきたいので、大学相互で協力していく必要がある。ＩＡＳＳＷの理事会会議を大阪市立大学で開く予定をしている。
- 実践力の養成における担当教員のレベルアップについて→要件付けについては、実習担当のみに留まる予定。社養校の演習の教科書を出したいと個人的に考えているが、理事会では反対された。今後、社養校の名前がないものでも一定のレベルを達した教材を作りたい。200 人の演習をやっている大学もあり、そのような問題を解決するために必要になる。実習と関係させるためのガイドラインを社養校で作っていきたい。
- 志願倍率の低下の解決と給与や処遇をアップさせる方法について、業務独占や養成総量をコントロールすることはどうか。→業務独占は難しい。処遇についても、社会福祉士基礎構造改革によって、厚生労働省だけでもコントロールできない制度になってしまっている。財務省に対して、ソーシャルアクションも必要ではないか。規制緩和について、施設長数をみても社会福祉士が余っているとはいえない。合格率０％の大学はなくなっていくだろうから、自然淘汰していく可能性もある。
- 180 時間の実習について→契約、プライバシー、実習施設数について質を上げるためのガイドラインをつくっていきたい。帰校日学習や実習指導者・学生・教員 3 者で話ができる体制にしたい。
- 日本学術会議の 10 年後のプランについて聞きたい。→以前は社会福祉士も社会福祉主事と並立することを要求していた。社会福祉主事をきって、社会福祉士を全面に出すことを本報告書に書いた。付帯決議の内容は、民主党が働きかけたものである。福祉人材確保指針は毎年見直す予定である。法律改正については、10 年以上は変わらない可能性が高い。大学独

自の自主努力を行うことによって、社会全体に影響を与えてほしい。

・ 社会福祉士の社会的認知が高まっていったが、「ソーシャルワーカー」という名乗りはあいまいに現場で残っている。資料のカリキュラム案では「援助技術」から「ソーシャルワーク」という言葉になっているがどうか。→国は「ソーシャルワーク」という用語は使わない。大学は自由なので社会福祉士養成だけをする必要はない。大学が社会福祉士というミニマムを基に、独自のソーシャルワーカー像を他大学と連携をしながら作っていけばいいと思う。科目名は、ソーシャルワーク演習にすることは難しい。私たちは大学で全体像としてのソーシャルワーカー像を作るのが最終目標であると同時に、資格社会の中でアクレデーション（ＭＳＷ協会など）を作ることも必要である。

（２）看護学教育に関する改正カリキュラムにおける卒業時到達目標の背景とその意味

日時：200８年３月１日 13 時～16 時

場所：福井キャンパス　看護福祉学部棟　教授会室

参加者：27 名（看護学科教員 17 名，大学院生２名，学外参加７名）

報告者：看護福祉学部看護学科　大川洋子

－研修プログラム－

卒業後看護基本技術の習得状況と大学教育の課題

発表者：赤川晴美（カリキュラム検討委員会本学科教員）

看護学教育に関する改正カリキュラムにおける卒業時到達目標の背景とその意味

講師：小山眞理子先生（神奈川県立保健福祉大学　教授）

小山先生を交えての意見交換

－具体的内容－

本学看護学科では，平成 14 年度から看護実践能力の育成の充実にむけて大学教育のあり方に関する全国的な取り組みに対応して教育内容の検討を行ってきた．さらに平成 21 年度から改正される看護職基礎教育の指定規則改正にむけたカリキュラムの見直しを行っている．このような状況の中で，今回の FD 講演会を，タイムリーな内容として企画した．

研修会のプログラムは，看護実践能力の育成の充実にむけた大学教育の取り組みの中で，特に看護基本技術に焦点をおいた．まず，本学科カリキュラム検討委員会が調査・分析した卒業生と卒業前の４年次生を対象とした看護基本技術に関する自己評価の実態と大学教育の有用性の評価，ならびに教育の課題について発表した．そのうえで，小山眞理子先生による講演会を組み合わせた．小山先生は，今回の看護基礎教育の指定規則改正カリキュラムについて，中心的に尽力された方である．先生からは，看護基本技術の教育内容や卒業時到達目標設定に至った経緯について調査ならびに研究結果に基づき，その意味についてご講演を頂いた．

本学看護学科カリキュラム委員会による調査結果は，大学卒業時点の既習した専門的知識や技術に対する自己評価が，卒業後は低下し，臨床での能力不足を痛感していることが推測できた．その一方で，原理・原則に基づいた看護技術の根拠に重点をおいた学習によって応用力が身に付いたなど，大学教育の有用性については概ね高い評価であった．卒業後（卒後９ヶ月）における自己評価の特徴をみると，看護基本技術項目とくに生活援助技術項目については臨床経験の積み重ねによって「できる」という回答が約６～８割に達していた．しかし，患者の個別性に応じた看護アセスメント能力や実践力についてはその割合は減少し，卒業前の評価と大差はなかった．

本調査の結果を踏まえ,本学科における看護実践能力の育成としての看護基本技術をどのような内容に絞り，どう教授するか，臨床とのギャップや調査結果に示された技術内容の違いによる自己評価の差異の原因追跡の必要性などを教育課題として報告した.

小山先生のご講演では,教育と臨床とのギャップをどう埋めるかという課題について調査した結果，看護基本技術に関する到達目標の水準が，教育側と臨床側に思いもよらないズレがあったことを指摘された．例えば，臥床患者の状態にあわせたリネン交換は，８割の教員は「学生ができる」として到達目標を捉えているが，臨床の実践家は「学生ができる」としたのは６割弱であった．つまり，教育側では基本的な技術として臥床患者のリネン交換を教授し，演習，実習体験も豊富で，学生はできて当たり前と認識している．しかし，実際の臨床では臥床する患者の健康上のリスクは高く，一人でできるようなものではないと認識している．このような教育と臨床側とのズレは，以外にも，教育側の到達目標が高く設定されている技術項目が多かったという指摘であった.

小山先生たちによるデルファイ調査と多方面からの調査結果によって提示された看護基本技術 142 項目の到達目標水準は，「すべての」学生が到達できる基準として設定したものであることを強調されていた．また，無資格の学生が体験できる技術は自ずと制限され，近年，益々狭められてきている現状から演習の重要度が増している.従って,原理･原則を押さえた看護技術と，臨床に即して模擬患者などを活用した臨場感のある事例を用いた看護技術を精選することが求められるというご指摘であった.

小山先生との意見交換では，質疑応答と，実際の看護技術の教授方法や実習方法などの具体的な例示，改正カリキュラムの統合実習などの考え方と内容など，小山先生のコメントを交え，活発な意見交換が行われた.

2.3.2.3　学外研修

（１）高等教育における教員のICT活用による教育力向上に向けて

日時：2007 年 10 月 17 日 13 時～16 時

場所：メディア教育開発センター日本科学未来館みらい CAN ホール

参加者：205 名（本学より１名：看護福祉学部看護学科　本田和正）

報告者：看護福祉学部看護学科　本田和正

去る平成１９年10月17日に開催された上記タイトルのシンポジウムにFD研修の一環として参加してきましたので報告いたします．全国の教育機関から合計 205 名の参加がありました．正直な感想を述べますと,初耳の略語等が出てきて具体的な内容については理解できないことが沢山ありました．ただ，こういう世界があって，教育の開発に真剣に取り組んでいる方々が沢山いらっしゃると言うことが実感出来ました.また諸外国では教員に対する評価が日本より遙かに厳しく行われていることを実感しました.以下に簡単にシンポジウムの概要を報告させていただきます．NIME の理事長によれば，このシンポジウムの内容をまとめて後日各大学に配布予定だと言うことなので,詳細はそれを参照いただいた方が良いかと思います.二つのセッションがあり，講演者の方々の話が終了後，会場からの質問に基づいた討論がありましたので，その部分の内容を主に紹介します.聞き取れなかった部分や意味不明の部分も沢山ありましたことをご承知いた

だきますようお願いします.

基調講演　10:30〜11:30

バージニア工科大学　副学長　Anne H. Moore　先生

タイトル　新たなテクノロジーと新たな学習：教員，学生，組織の変容

セッション 1　13：00〜15：15

諸外国における教員の ICT 活用による教育力向上に向けての教員への支援に関する取り組み各高等教育機関における FD 関連センターの設置や教授法に関するガイドラインの策定，FD 研修・ワークショップの開催等，組織としての教員への支援の取り組みと ICT 活用について議論を行う.

上記テーマに沿って以下の４人の方々がそれぞれの組織における取り組みについて講演され，最後に会場からの質問用紙に基づいてパネルデイスカッションが行われた.

・教授・学習を向上させるための革新的なコミニュケーションテクノロジーリゾリューションの推進　Peggy Benton (Professor, Instructional Technologies, San Francisco State University , USA)

・英国の高等教育教授法の向上と支援のための戦略

Jay Dempster (Deputy Director, Center for Academic and Professional Development, University of Warwick, UK)

・ICT 活用のための研究主導の FD

Keith Trigwell (Professor/Director, Institute for Teaching and Learning, University of Sydney, Australia)

・FD 新次元におけ ICT 活用法

Terumasa　Ikeda (Professor, Faculty of Humanity, Meijo University, Japan)

会場からの質問と回答

Jay Dempster 教授への質問

質問 1

国レベルの支援としてどのようなサポートをすればよいか？

回答

スコットランド，イングランド，北アイルランド，ウェールズ各地域の大学が共通の資金のサポートを受けられるようになっている.

Keith Trigwell 教授への質問

ディープアプローチを英国, オーストラリアで実施した場合に違いはありましたか？日本の学生は諸外国の学生より消極的ですが, ディープアプローチを日本で導入する場合のアドバイスをお願いします.

回答

このような考えを導入するのは非常に難しいです. ディープアプローチは中国人ではうまくいかないんです．中国でわかったのは，中国の学生は記憶というところをやったんですが，リハーサルで本当に記憶に近い様なプロセスをやるわけです. でもこのプロセスをやるたびに学生はそ

れをこっちの方法で見ていた．中国のことわざで，100 回言えば毎回違うイメージということわざがあるようですが，これは録画的才があると思うんです．この研究はうまくいく国もありますし，いかない国もあるようです．それからまた，学校的な違いもあるようです．理系の学生は人文系の学生とまた違うというようなこともあります. あるいは化学の学生が記憶と言うようなところを大いに使うという様な部分もあるかもしれません．ですので，鍵となるのは学生の意図が何であるかを見いだすことです. 学生にして欲しいと望むことと, 実際にやっていることが違う. あるいは学生にもっとこのディープアプローチを採用してもらいたいと, そして理解と言うことにもっと参加して欲しいと思うのか. 先ほどその成果というものを見ましたが，それをやると学生はよりそのテーマを覚えておく期間が長くなるんですね. ディープアプローチをとると．ですのでこの質問にお答えするにはこの導入の方法ですが, これは教員に聞いてそして学生に相談をしてもらって話し合っていただいて, そしてその教授の文脈の中で考えてもらうと言うことになります. そしてそれに応じて競争していくと言うことになります. そして学生と話しをすることによって教員の意図，実際の学生の行っていること，中等高等学校から表面的なアプローチを取ってきたことが良しとされてきたかもしれないです．ですので，その場合大学においてまた別のことを求めると言うことになりかねませんから．ですから，私の同僚が言いましたが，コミュニケーションに参加してもらうと言うことです.

質問２

PBL (project based learning) を含むコラボラテイブでパーテイシケイテブ？なアプローチが重要であることは理解しています．しかし同時に，深い学習の為には当該科目についての一定量以上の知識が基礎にないと表層的な活動の為の活動に終わってしまう危険があります. 参加型学習の中で知識の習得を確保することは言うは易くして行うは難しです. この問題の克服についてコメントをお願いします.

回答

私はこの質問に質問で返したいと思います．この PBL の問題は先生の間で競合を生むことになると言うことでしょうか？

＊司会者 : いいえ，そう言う言い回しの質問ではなかったのですけれど．今の質問が言わんとしていたことは PBL (project based learning) そしてこの参加型の学習は良いことであるが，それをするために学生は先ず表面的な学習を行って知識をつけてからプロジェクトに携わるあるいは参加する必要があるんではないだろうか．その問題をどう克服するかと言うことです.

回答

まあ，そうかもしれません. 表面的アプローチを先ずやってからディープに行かねばならないと言うことはないと思います．ですからそのアプローチ，意図するところが違うんです．学生の意図は何であるかということです. もし学生の意図が理解することであればディープアプローチを取っていると言うことになります. そしてその必要な知識をつけて，そして他の分野にも入っていくためには理解するということが意図として必要となります. 表面的アプローチで知識だけを記憶して, そして試験に合格してもそれは試験が終わったらその後その知識を使うことが出来ませんから, 多くの場合には学生が表面的アプローチを取っていると思う場合でもそうでないことが多いんです．理解したいという意図があればこれはディープアプローチになりますから．で

すのでこれは問題ではないと思います. 多くの人は教員の観点からは表面的アプローチが良くないという場合がありますけれども, 学生の場合には文脈の中でそのアプローチとしてそれが目的にかなうことであれば決して悪いことではありませんので, それは状況によりけりだと思います.

回答（他のパネラー）

１つ付け加えたいのですが．わたしも PBL はリスクがあると思うんです．教員のガイダンスがなければいけないと思います．生徒と選択的に関わってそしてプロジェクトを開発し，そしてその原則を適応する場合には, やはり形式的な形でその段階毎に評価をしていくことが必要だと思います. そうすることによって学生がちゃんとその解析をしていてそしてそれを合成しそして開発しているかを確かめることが必要です. その中で自分たちの評価というスキルが高まってくると思います. そして自分たちの仕事それから他の人たちの仕事に対する優れた批評家になれると思います.

Terumasa　Ikeda　教授への質問

米国，英国，オーストラリアの発表がありましたが，日本の大学で導入すればより FD が発展すると思われますか？

回答

Jay さんや Keith さんのおっしゃっていることは私が実践してきていることであると思いながら聴いておりました．ですから今日はちょっと自信をつけて帰れます．ただし，Jay さんや Keith さんのおっしゃっていることは実践しないと deep understanding にはなりません．これが問題です．表面ではわかるかもしれません．そんなアプローチ，考え方でやっているんだなと．だけれどやっぱり自分でその ICT の環境の中で実践して失敗してみないとお二人のやっていることはやっぱりつなぎ合わせられなくなりますね．だから，時間がかかりますけれど，やるしかないですね．お二人は間違ったことはおっしゃってないと思います.

全員への質問

日本では教育が業績として評価されないことは多いのですが, それは教育の能力を測る指標が明らかではない為だと思います. 教育力の指標はイギリスやオーストラリアにはあるのでしょうか？

Jay Dempster 教授の回答

様々な方法で違うレベルで測ることが出来ます. 品質保証として全国レベルで測定することがあります．教育機関あるいは学部として，あるいは個々の教員についても測る基準があります．現在は？が英国で必要ですし，正式な研修を受けなければなりません．そして３年に１回評価されます．国の機関によって一定の教育方法，質のレベルに達っしていることがそれによって認証されます．様々な尺度があります．ただ官僚主義的に聞こえるかもしれませんが，英国では文化の一部としてやっています．専門家としてやることであるとされています．５年前，１０年前はそうだったのですが, その後新たな教員が入ってきてこれは専門家としての環境の中で当然のこととして受け入れられてきました.

Keith Trigwell 教授の回答

オーストラリアでは主な指標は国レベルで収集されます．学生が卒業した後に収集されます．そして使われている指標というのは話し方の研究に関してですが，４つの要因，これが学生の経

験の中で学習のアプローチにディープあるいはさんせつ？と言うようなアプローチに影響をあたえるということです．それが教授の質そして学生の作業の量そして経験，そして学生の評価，そして目標あるいは目的，これを学生が評価すること．これが全てプラスであれば学生のディープアプローチの方が強い．そしてその学習の質が高いということです．その４つの分野これが国レベルの学生のアンケートによって行われ，その結果は全ての大学に公開されます．そして国の予算の割り当てというのはこのスコアによっておこなわれますので，非常に重要な学生の経験に関する調査そして指標になります．

Peggy Benton 教授の回答

基本的には我々も同じようなアプローチを取っております．Jay さんがおっしゃったのと同じなのですが，彼女もうまく説明してくださったと思いますけれども，同じような印象のサイトの visit もありますし，その教員の評価それからその授業の評価などがございますので，我々は常に他から review されているということです．

Jay Dempster 教授の回答

英国では全国の学生の調査がありました．これは新しいのですけれども，少し不安を起こしているようです．と言いますのは学生は自分が好きなものに票を投じる訳ですから，すごく効果的なものに票を投じているわけではありません．でそれはまだ改正する必要があると思います．また，ディープテーブルというものがありまして，トップ１０の大学で様々な尺度のマトリックスからなっていてそれを加えていくわけですけれど，レシピを変えるようにマトリックスも変わりますので，大学はそれぞれ違う分野で競争しなければなりません．十分に学習の資料を提供していないという大学は，例えば不得意な分野でももっと良くならなければいけないということなのですが，毎年項目が変わりますので常に違うものを追求していかなければなりません．ただ，何が，教授法や学習法として効果的かと言うことを測っているわけですけれどもその内容は毎年変わりますから常に優れたものを求めています．

Terumasa　Ikeda 教授の回答

私も？には学ばせてもらったんですけれども．シンプルに言ってですね，こういう指標が今一番大事かなと思っているのがあります．それは授業の value for money ですね．それを表現する指標は１つ，学生に対して自分の将来にとってこの授業は役に立つと思うかどうかと言うことです．

セッション２　15：30ー17：45

諸外国の高等教育機関における ICT 活用による教育力向上に向けての教育手法の改善に関する取り組み

インストラクショナル・デザイン，LMS や CMS の活用，システムやコンテンツの開発手法，授業評価の手法等，ICT を活用した教育手法の改善についての具体的な取り組みについて議論を行う．

上記テーマに沿って以下の４人の方々がそれぞれの組織における取り組みについて講演され，最後に会場からの質問用紙に基づいてパネルデイスカッションが行われた．

・e ラーニング実践者のための FD ニーズ：カナダ・アサバスカ大学からの組織的事例研究

Heather Kanuka (Associate Professor/Canada Research Chair, The Centre for Distance

Education, Athabasca University, Canada)

・学習と教授における ICT の融合：’トレイナー’と’ユーザー’の経験と視点の組織的事例研究

Andrew Hannan (Professor, Faculty of Education, University of Plymouth, UK)

・高等教育におけるブレンデッドラーニングの効果的活用：韓国淑明女子大学の場合

Dr Shin (代理)：Jae-Kyung Lee (Professor/Director, Center for Teaching and Learning, Sookmyung Women's University; Chair, The Association of Korea CTLs, Korea)

・e ティーチイングシステムと FD テクノロジーとしての TIES

Koichi Nakajima (Professor, Faculty of Economics, Tezukayama University, Japan)

会場からの質問と回答

Heather Kanuka 教授への質問

質問１（司会者から）

カナダのアサバスカ大学の事例ですが，Kanuka 先生は e ラーニングコースを開発する時にスケールメリットということがとても大切だと言うことで, それに関してアサバスカの経験を教えていただきたい. スケールメリットにおいてどのような視点からコース開発を行ったのかと言うことです.

回答

スケールメリットですが，アサバスカ大学ではかなり他とは違うんです．というのはノンペーストシステム？というのを持っておりまして，つまり，カナダにおいては非常に人工が分散しているので，そして地理が，土地が非常に大きいのでアサバスカが設立された時，我々が取った方法というのは個々の学生にどんな時点でもスタートを切ってもらって, そのコースの過程の中で自分たちのペース，自分たちの速度で進めてもらうということをやりました．そして教員というよりはチューターを使ってやったんですが, これが唯一カナダでスケールメリットを測れる方法でありました．そして地方にも到達する唯一の方法だったんです．他のカナダの機関，組織において, スケールメリットとしてよくとる方法は従来はマルチポイントビデオカンファレンシングというのをやっていました．例えば，アルバータ州ではソーシャルワークプログラムがありますが，これがカルガリー大学とアルバータ大学の両方で提供されています．そしてこれはカルガリー大学で運営されていますが，アドミッション？にマルチポイントビデオで提供されるのです．最近では e ラーニングでこれを行えるようになってきています．勿論 WebCT,そしてムードルそしてブラックボードなどでありますが，多くの大学がこのプラットフォームを持っています．そしてここでも過去数年の動きですが, 我々は色々な種類の非同期型の技術を統合してきています. しかし，往々にしてこのプログラム，ディスカッションが非常に大きな構成要素なんです．自発的な対話を計る方がこのプログラムにおいてはいいと思います. アサバスカ大学においてはこのノンペーストプログラムにおいてはチューターは学生の数に応じて 講習？を受けます．ですので，スケールメリットでは人数は関係ないわけです．しかしこの問題は焦点を当てられていたのはペーパーベースとしての情報伝達にありました. 今では通信技術によって様々な学習が統合出来ますので地方にも手をさしのべようという努力を続けております. 想像力をはたらかせてクリエーティブにアサバスカ大学ではこのノンペーストプログラムを取っていますが，しかし，多くの教員はディスカッションの構成を維持し, そしてスケールメリットも測るためにブログを使い

始めています．ウィッキィ，そして最近ではブリッキーを使っています．これらをコースに取り込んでかなり効果を発揮しているようです．

Shin 先生への質問

先生の発表の中で教育方法を報酬システムの方に導入されたということで，韓国の大学では教員に ICT を活用するところのインセンティブ高める必要があったと思いますが，日本では教員の ICT 活用のインセンティブを高めるのに非常に苦労していますけれども，韓国における実践，経験について教えてください．

回答

ご質問ありがとうございます．私たちの国そしてドンゴク？大学の例なんですけれども，私たちも同じような問題があったと思います．インセンティブというのは教員に取っては大変重要ですが，IT の開発の初期の段階で大学は教員にミニグラントのようなものを提供して自由に使えるようにするわけです．例えばその講座の改善開発に IT と言う部分を導入するのに自由に使えるわけなんです．ただこれはあまり成功しませんでした．教員は忙しいので，お金を出すというのはあまり惹き付けなかったようです．しかしその後，大学は教員に対する報酬システムを導入する時にこの講座の評価という項目を入れたんです，学期が終わるときに学生が講座を評価します．そして評価の項目の中に教授が例えば ICT を使って学習教育を豊にしたかという評価項目を加えたんです．これが重要だったようです．学生の評価の中に ICT の技術が入ったということで重要性が認識されたようです．また，私どもの大学ではティーチングポートフォーリュオエバリュエーション？という評価方法を使いまして，学期が終わるときに，教員は自分自身の教育法，教授法のポートフォーリュオをつくらなければいけません．ポートフォーリュオを作るために証拠が必要なわけです．自分の教育方法を改善する種として証拠を出さなければいけません．そこで現在は教員は IT を使うことに関心を強めています．この二つの制度つまり，評価制度が入ったことと合わせて．また，私の大学では教授方法を重視していますが，例えば金銭的なインセンティブを出すところもありますけれども，評価という動機付けの方がいいようです．教員は学生から評価されると認識されるという方が強い動機付けになるようです．IT を使うことだけでなくて，教育方法全体を改善するというインセンティブとなります．また，もう一つ大事な点ですけれども，IT は学生のニーズに応えますけれども，同時に教員も IT を使うニーズがあるはずです．私の場合は，例えば様々な講座があると，私は今，日本に来ていて明日教えられません．ですから，オンラインクラスで学習するように学生に言っておきました．そこで非同期のコミュニケーションアクション？を報告します．Sookmyung の場合はルールを導入してオンラインコーサーを教室での教育の補完的なものとして活用するようにしました．ですから教員は教室を移動しながら同時にオンラインを提供しています．インセンティブは多様なものができると思います．インセンティブというのは必ずしも金銭的な報酬とは限らないと思います．

Hannan 先生への質問

先生のご講演の中で教室の環境整備を行う際には教員のニーズを聞くべきだというお話をされたと思いますが，大学運営側としては教員にインタビューをすると個人的な好き嫌いがありまして，本当に教育の発展に教員の要求が必要なのかどうか判断に迷う場合があるのではないかと思います．Plymouth 大学では何を基準として設けていますか？

回答

唯一この教員をこのようなプロセスの中に関与させるというのは集団的に関与させるという意味では個人個人のフィードバックを得ることもできますし,それらを集めることもできると思うんですけれども，やはりディスカッションのプロセス，それぞれの科目レベルあるいはプログラムレベルあるいは学部レベルでやるということ,そして常にコンサルテーションをするという継続的なプロセスが必要ではないかと思います．そうすることによりまして，いろいろな議題などが出てくると思います．一般的な ICT の活用の方向，大学での活用の方向というものがでてくる思います．そうすることによりまして，その教員の声というものが前面に出てくると思います．これは重要だと思います．いろいろ小さなスケールということで中央のサービス，それから周辺でのサービス，それぞれの学部でのサービスによりまして個人個人をサポートする，あるいは，その教員のチームをサポートする．そうすることによって彼らのニーズに応えていく．それはいろんな面があると思うんですけれども,やはり新しい技術を適切な状況に応じてやると言うこと．そして，正しい方向づけをイノベーションに関して求めていくということ，変革に対しての方向づけを求めていくということであります．私の大学の場合におきましては，まだ完璧なレベルにまでは達しておりません．我々はそこからまだ遙かに離れていると思います．ですから私が提唱しているのは実際にこの包括的？ディスカッションに貢献をした人たちのステートメントから守られると思います？.やはりそのアンケートをする場合にも自由回答式のものにする必要があると思います．現在では不満が多いです．意志決定というのが，中央でされてしまう．そしてそれらが強要されているということであります.そのコンサルテーションの中でそういったものが進化していくよりも押しつけられていると言うことでありますので,私はそういった点を提唱していきたいと思います.

Nakajima 先生への質問

同じ講義を何度も見せると言うことになった場合，学生の対面授業への意味づけ，取り組みかたにはどのような変化がありましたか？また,教員の側ではどうでしょうか？それと学生の出席率などへの影響は如何でしょうか？

回答

一つめの質問は，学生は復習ビデオがあれば授業に出てこなくなるのではないかとか，それから，真面目に授業中に聴かないのではないのかと言う，多分そういった可能性があるじゃないのかということでご質問されたんではないかと思います．実は最近の学生さんたちは，だいぶ変わってきているようで，そのようなことは殆どあり得ないように思われます．というのは私はだいたいログ？取っていますし，チェックをしています．そもそもすべて例えば私の授業の一つはですね，学校に来なくて良い，こんなこと言うとお叱りを受けるんですが，学校に来なくて良いと言っても日本の学生さんは来るんですね．私の顔を見たいからじゃないとは思うんですが．ですから，当然ビデオがあると安心をしているようです．真面目な子じゃないですよ，私の授業を取る子というのは，だいたいそんなに成績も良くもないですし．だけれども非常に安心しているので，彼らのコメントを見ると要するに授業に集中できるということです．黒板とチョークの授業の一つの問題はノートを取ることが学ぶことであると言ったような思いがずっとあって,前のパネリストでディープラーニングとサーフェースラーニングのことがありましたが,殆どの日本の

学生もそうですけれども, サーフェースラーニングで暗記物つまり真面目に先生の黒板をノートに取って暗記して試験にパスすれば良いんだという勉強の仕方にあまりにも慣れていますので, いわゆるもう一つ踏み込んだ自分の頭で自立的に学習するというディープラーニングの方がどうしてもできていないと. そういう意味で, この復習ビデオがあるということで, 歌ったり踊ったりホームページをのぞきに行ったり, 中島がやっているパワーポイントで覚えているやつまたは英語のビデオを見せたりと言うようなものに集中ができると言う風な感触を持っています. それから出席率ですが, 教員の反応についてはよくわかりませんが, かなりの数の教員がライブシステムを使っています. その理由はいろいろとあるかとは思いますけれども, 一つのよくわかる理由としては学生がさっき言った大学３年生の頃になりますと就職活動で授業に出てこなくなります. これは皆さん日本の先生がたはご存じだと思います. その子たちが, 卒業が近づいてくると？先生単位くださいと言うことになるんですが, ちゃんとビデオを取ってあるから勉強しなさいというと, 彼らは彼らなりにビデオを見てきます. とりわけ試験の前とか. それから授業を丸ごと自動的に録画されますので, チェックさえしておけばレポートがいつ出ているとか, いろんなことがビデオを見ることでわかりますのでそういう意味で役に立ちます. それからスポーツ関連ですね. スポーツで公欠を取ったりする学生さんにも非常に好評です. それから出席率ですが, したがって昔の学生はなんて言うんですかね授業にろくにでないで最後の試験だけ受けて合格するような豪傑がたくさんいましたが, 今の学生さんは非常に真面目で授業に出てきます. それからやり方によっては非常に勉強をしますので, 出席率は良いですね. 例えば私はまだ公表してないんですが, 経済開発論と言うのがありますが, 一回目のオリエンテーションを過ぎた後は落とす学生は殆どいません. ほぼ１００％とは行かないまでも 90 何％は出席それから最後まで単位を取りにきます. で, 欠席率も非常に少ないです. やり方によっては ICT というのは非常に役に立つと思っています.

Kanuka 先生への質問

アサバスカ大学では教員調査を行った結果をどのように教員にフィードバックされていますか？調査の結果から更に発展させることができたでしょうか？

回答

サーベイはこれはレポートを書くことでフォロウアップをしました. それをオンラインで公表して, そして e mail のリストでもこれを教員にも連絡をしました. これを提出したときに, 上級の運営側に提出したときにここで　　？　フィードバックを行いました. あまりシニアの方はこれに対しての行動をとりませんでした. 二つめの質問に対する答えですが, データを使って FD のサービスの指導としました. ガイダンスとして使いました. ですので, まだそれほどにはニーズとしてはまだない, まだどこで欠落がおこっているのかわからないような段階でこれを行った. そして調査を行っていいフィードバックをニーズに関して得たので, これも先ほど述べたと思いますが, 最も重要なフィードバックはこの教育学これが技術を進展させなければいけないということでした. ですので, 教員がまだこのテクノロジーを使っていないと, アサバスカでは特にそうであったと. すばらしい環境があるのにまだ使っていないという問題が明らかになったわけです. 今までなかった技術がもうあるということで. ここで重要なのはコメントの中に重要な側面としてすべてのコメントに見られたのが, ”私はこれをやりますけれども, でも恩恵が何

であるか，生徒への恩恵が何であるかを知りたい”ということでした．それまで我々はこれをどのようになぜこの技術を使うべきかというところを考えていなかったので，このコメントを我々の FD の活動と焦点を変えて，明確にこの技術を使えばこういったことがメリットとしてありますよということを打ち出しました．それから少し足を火につっこんだような感じですけれども，どのような技術を使うべきだというふうに言ったときに，この技術を強制するのではなく，教育学的価値が無いものは強制しませんでした．ですので，こういった意味でも調査の結果は非常に価値のあるものになりました．もう一つ興味深かった結果ですが，こういう質問をしました．この教育，教授は価値のあるものと思っていますかというふうに聴いたんですが，すべての人が YES と言いました．教員はこういうことを気にしていないと思いがちですけれども，私の経験から，これは教員は気にしているんです．ただ，どのように適切にやればいいかわからないだけなんです．ここで，我々が情報を提供して適切にやれるんだと言うことを教えて，そしてこれを楽しい経験としてもらいたいと思っています．どういうふうに適切にやればいいのかわからないと言うことではなく，その教育の背景がなくどのように教えたらいいかわからないという状況から，間違った方向でやってその理由もわからないと言うことではなくしたいと思っているんです．そういう意味でも我々が焦点をあて続けられる，いい仕事ができるスキルがあるということがわかった．そしてこの教育学，この技術でもって非常にメリットがあるということがわかっただけで良かったと思います．

Hannan 先生への質問

質問 1

教員がサポートを求めているというお話がありましたが，教員が自分の教育力を高める為に求めているサポート，つまりどのようなサポートを教員が必要としているのかを教えていただきたいと思います．

回答

やはりニーズは状況によって異なっています．教員によっては，技術的にもかなり進んでいる方たちもいます．そして，いろんなアイデアを持っていてそれによりまして大学にあります様々な機械を活用することができます．実際に教員の為の技術者がいるんですけれども，皆様方のお手元の資料にも入っておりますけれども，この技術者はしばしばフラストレーションを感じると，大学で利用されている ICT には限度があるからフラストレーションを感じるということでありますので，もう既にかなり進んでいる人たちに ICT のサポートを提供するというニーズもありますし，また，一方 ICT に関してはナイーブな段階にある人たちもいるわけでもあります．ですから，基本的なスキルでの研修を行うということもありますけれども，それ以上にテクノロジーを本当に付加価値のある教育法に展開していくと言うことが重要ではないかと思います．いくつかコメントが出てきたと思います．やはりこの教育学がテクノロジーを牽引して行かなければいけないと言うことも言われておりました．この意味するところはその教員が ICT のサポートの発展をサポートするべきだと言うことです．彼らの方がいろいろな課題を設定するべきだと思います，大学レベルで．そして，もっと個人あるいはチームレベルで FD のスタッフと協力をし，そしてその技術的な専門的知識を持っている人たちと共に教授学習を改善していく必要があると思います．具体的な例も申し上げることができますけれども，これは後の皆さん方との懇親の

時にでもお話できればと思います.

質問２

ICT を活用することを望まない教員, つまり ICT 活用に対して抵抗をしている教員に対するサポートの方法として何か良い方法がありませんか？

回答

まさに私が言わんとしているポイントなんですけれども, 場合によりましては抵抗というのが正当化されている場合もあるんです. 例えば, 初期の段階の ICT の利用ということで, 高等教育での導入はプログラ化された学習ということで, 学生がプラグインして教育を受けるということで, このような種類の ICT と言うのはやはりそのインタラクティビティというのが無かったわけですね. その方向性というのがなかったわけであります. これはディープラーニングではなくサーフェースラーニングと表面的な学習だったわけです. そしてこれに対して抵抗した教員というのは正当化できると思っているんですよね. このような理由？がある場合はそれを解消したくないと思っているわけです. 不適切なテクノロジーに対する抵抗というものをあえて乗り越える必要はないと思います. そして完全にこういった抵抗を完璧になくすというのは, そこに関与している人たちとお互いに相談し合うということ, ニーズが何であるかを知ること, 彼らの問題が何であるかを理解すること. これはアクションリサーチのような形の FD だと思います. ですから, 先ず, 課題が何であるかを見る, その教授学習のインターフェースが何であるかということを見ていくということだと思います. 場合によっては技術的な専門知識を持っている人たち, そして新しいテクノロジーを知っているということ, そしてそれらによりまして教授学習が改善されるというそういった人たちはこういったスタッフと協力して, そして新しい形の教授学習を導入することができると思います. ですから私にとってそういう形でプロセスが行われているということであるならば抵抗と言うプロセスはかなり無くなると思います. これが, 中央で決定されてしまい, 背後にテクノロジーが専門の人たちが決定し, そして資金面での点から効率性を高めるという意味で決定してしまうと言うことであって, そしてそれが教員に強要されてしまうと言うことになりますと, 全く違った種類のものと言うことで抵抗が出て来るわけであります. しかしながらそれとは逆の方向でやったならばこういった問題が大幅になくなるのではないかと思っています.

Shin 先生への質問

発表の中でブランデッド？ラーニングのタイプ１とタイプ２というものがありましたが, タイプ１とタイプ２はそれぞれどのような科目に適していると思いますか？そしてそれぞれのタイプの大きな違いは何ですか？

回答

タイプ２は基本的にはオンライン教育で対面の教室の講義が補完的な役割を果たしています. ですからオンラインが主な活動です. タイプ２はタイプ１の　？的な対面の教育でオンラインは補完的です. Sookmyung の例にありましたように e クラスシステムと言うのが補完的なオンラインのシステムです. 私も同じような e クラスシステムを私の大学で使っています. 講座をスタートすると自動的にオンラインシステムにログインできます. クリックしていくとオンラインシステムで全部の機能と考えができることが出てきますので, また学生に関する情報, 写真とかア

ドレスとか，前にどういった講義を取っていたかとか，という学生の情報も全部オンライン講座にいって見ることができます．対面の授業，普通の講義の時もこの要素がオンラインの活動がそれに追加されますので，ですから前に学生に言い忘れたことがあった時には，そのメモをオンラインクラスに入れることができるわけです．そして学生は時々オンラインクラスを見て先生が書いたコメントとかクラスについての何か発表事項などがわかるわけです．また，学生に努力するようにと伝えることもできます．非常に便利なツールです．対面式の講義を補完するものです．学生は学習？が少ないと低いと言われていますけれども，その問題を乗り越えるためにオンラインシステムを使いました．非常におとなしくて教室で発言しないような学生でもオンラインでは積極的に発言するという学生もいるようです．学生はアイデアをオンラインで共有したがります．したがって教室での雰囲気もそれによって変わります．更に重要なのは学生は教室に来ることが先ず大事です．ビデオセッションはあっても．ですから対面式の講義も続けることが大事だと思います．タイプ２というのはオンラインをやることで，この教育とか学習の活動を豊かにできます．でタイプ２をクリックしてシステムを開いて全部の機能がわかりますので教員としては面倒なことをやる必要はありません．そういったことで問題を乗り越えることができます．それから，出席できなかった分を補完するという意味で使います．

司会者

残り時間が５分ほどですので，最後となりましたが，最後の閉め方として，それぞれの先生に１分間の時間の中で今回のシンポジウムで第１セッション第２セッションも含めて，いろんなエリア，いろんな経験がここで交流されたと思いますが，午前中の基調講演の Moore 先生から，シンプルなところから FD をやっていくというのは非常に効果的で，明るい先生を集めて FD をやっていって経験を広めていくことが有効であるというお話がありました．そして Shin 先生から，FD はシンプルな，そしてわりと普及しやすいところから始まるということで，それぞれの先生方経験では高等教育における教員の IT 活用における教育力向上においては，つまり FD の経験で大切なもの，効果的なものに何があるかを最後の時間で教えていただきたいのですが，FD においては効果的なものそして大切なものは何かということをそれぞれの先生から１分間でお願いしたいと思います．よろしくお願いします．

中島先生

IT, ICT これは楽しくなければならないです．退屈であったら時間もとるし，お金もとるし，退屈であったらこれは誰も使ってくれないので．FD も同様です．楽しくなければならないと思います．それが重要なところです．私は経済学者ですけれども，パレートの法則というのをだいたい使うんですけれども．パレートの法則よりも日本人が優れているのは，そこには御神輿の法則というのを考えておりまして，御神輿というのは２割：６割：２割です．一生懸命に担いでいるのは２割，担いでいるふりをしているのは６割，最後の２割は何をしているかというとぶら下がっています．先ほども出ていましたが FD をやりたくない先生がいますが，IT，コンピュータを使った授業なんてやりたくない先生はもっと多いです．御神輿の法則からいうと，ものすごく声を大きくして私の授業は世界一で黒板とチョークさえあれば何もいらないんだという先生方というのはだいたい２割ですので，その先生方にエネルギーを注ぐと気分も滅入りますし楽しくないので，そういった先生方は頑張っていただいて，最初の２割，Anne が言ったみたいに，本

当に happy で friendly で nice people が２割，それで残りの６割を２割の方に引っ張っていくというのが多分戦略ではないかとというふうに思っています.

Shin 先生

抵抗についてなんですけれども, 教員の抵抗というのは技術に対する抵抗ではないと思うんですよね. 自分たちの教育スタイルを変えることに対する抵抗だと思います. 教授というのは自分はすべてを教えており，なぜ新しいことをやらなければいかないのかという抵抗だと思います. それに対してどう答えれば良いのでしょうか？また，もう一つ，皆達観的に考えています. インタビューすると皆良い教師，良い教育者になりたいと言います. その方向で刺激を与えればみんな自分の教育スタイルを考え直すと思います. そうすれば IT の利用をアドバイスできると思います. 便利な利用価値のあるツールとして提案できると思います.

Hannan 先生

繰り返しになるかもしれませんけれども, 私の提案していますのは我々は先ず本当にその教員からスタートしなければいけないと思います. 教員のニーズを理解し，そして教員に対しまして ICT がどういう形で彼らに使ってもらえるか，そして我々がサポートし，改善をしていかなければいけないと思います.

Kanuka 先生

最も重要なのは，私の経験から言いますと，これは強調しすぎることはできない，もう既に何度も言ったんですが，教育学はこれは技術を推進しなければならないと言うことです. それからもう一つ経験から言えるのは技術がすべてが教育学上効果的では無いと言うことなんです. 各教員の目的によってそれは異なってくると言うことなんです. 私の分野ではこれは私も理解に時間がかかったんですが，技術によっては技術者，ソフトウエアプログラマー，エンジニアなどによってつくられることがありますが，その作った人，そこにはソフトウエアがどのように使われるかという目的意図がこもっているのです. これは常に教員の目的あるいは目標と一貫しているわけではありません，必ずしも. これは一つ私が１０年間の長い期間かかって理解したことです. もう一つ申し上げたいのはこの高等教育においては高次の複雑な考え方, スキルを身につけて欲しいわけです. 対面のクラス，これも技術の入ったクラスと何も違いはないと思います. 学生に高次に移行してもらうのは非常に難しいものであります. これをどのような形で技術を使っても使わなくても抵抗もあるし，ですから一番良い答えはコンテンツ次第だと言うことです. それから学生の水準，一年生なのか，４年生なのかあるいは大学院生なのかによって変わってきます. いろいろな要素で変わってきます. 効果的な e ラーニングをやるためには，私の経験からはコミュニティーを構成して経験を共有してもらうと言うことです. それからこの明るい人と言うことですが，本当にこの人はキーパーソンになります. 私の機関では，その明るさというのは本当に役立ちます. もっと良いのはそのチャンピオンが尊敬される研究者であると言うことです. これが国際的, 海外的にも尊敬を集める人だと言うことですね. いい人であると共に尊敬の念をもたれるような人物であるということ，その人がチャンピオンになればもうこれはすばらしいと.

司会者

このセッションのディスカッションの結果としては教員のニーズに応えられる FD が大切で

はないかというキーワードになるのではないかと思います. 長時間この第２セッションに協力いただきまして，講師の先生方そしてフロアの先生方ありがとうございました.

（２）国際ソーシャルワークセミナーⅡ

日時:2007年10月21日（日）9:30～16:30

場所：東京都千代田区霞ヶ関3-3-2 新霞ヶ関ビル 灘尾ホール

参加者：本学より社会福祉学科教員２名

報告者：看護福祉学部社会福祉学科　大塩まゆみ

テーマ：「ソーシャルワーク教育における国際的動向とわが国の課題

（Global Trends and Japan's Current Issues on Social Work Education）」

主催：(財）社会福祉研究所

共催：社団法人日本社会福祉士会

社団法人日本社会福祉教育学校連盟

社団法人日本社会福祉士養成校協会

日本精神保健福祉士養成校協会

日本社会福祉学会

その他、計９団体

報告者：大塩まゆみ

（看護福祉学部社会福祉学科、看護福祉学研究科社会福祉学専攻教授）

報告：

今回の国際ソーシャルワークセミナーⅡは、前日のＩと二日間開催されたが、出張者は、前日は他の業務があったので、二日目だけの参加となった。プログラムは下記のとおりで、満員であった。

9:30～10:00　受付

10:00～10:10　開催挨拶、オリエンテーション

10:10～11:00　記念講演Ⅰ

「イギリスのソーシャルケアの動向とソーシャルワーク教育の現状」

講師：イギリス･サザンプトン大学教授 ジャッキー・パウエル氏

11:10～12:10　記念講演Ⅱ

「イギリスのケアスタンダード法とＣＣＷの役割

―ケアサービスの評価のあり方とシステムについて―」

講師：ウェールズ･ケア協議会 チーフ・エグゼクティブ

リアン･ヒューズ・ウィリアム氏

13:00～14:00　記念講演Ⅲ

「日本とイギリスのソーシャルワーク比較」

講師：元厚労省社会援護局長炭谷茂氏

14:15～16:05　シンポジウム「ソーシャルワーク教育とソーシャルワーク実践との関わり」

シンポジスト：

・IFSW会長 デビット・ジョーンズ氏（イギリス）

「ソーシャルワーク教育のグローバル･スタンダードとソーシャルワー

ク実践」

・韓国梨花女子大学教授 韓国ソーシャルワーカー協会会長 金聖二氏
「韓国における社会福祉士の養成課程と社会福祉制度･実践」

・（社）日本社会福祉士養成校協会会長･大阪市立大学教授 白澤政和氏
「日本における社会福祉士の現状及び課題とソーシャルワーク教育」

・ロンドン行政区のソーシャルワーカー･サザンプトン大学修士課程修了、元（社）日本社会福祉士会事務局員 矢嶋真希氏
「日本とイギリスのソーシャルワーク教育及びソーシャルワーク実践の比較」

要点：

・イギリスでは、ソーシャルワーカー教育課程で実習を重視しており、２ヶ所で200日の現場実習が課せられ、現場の指導者が、服装やコミュニケーションのし方、面接での対象者との距離のとり方、机の配置等まできめ細やかに指導し、学生（院生）にとっては、非常に厳しく辛いものであるが、それゆえ資格を取得した時には自負心･自信がもてる。

・日本の社会福祉教育では、縦割り行政の壁を打ち破ることができず、ニーズ把握にしても、提供サービスにしても、法制度の枠内の発想でしか捉えられていないので、今後は、そのような枠をなくし、人々の人生のwell-beingのために、社会変革を進め、人々をエンパワーし、すべての人の生活全体を支えるという視点で､社会福祉のしくみと社会福祉教育を改善すべきである。

・日本の社会福祉士制度発足後20年の社会福祉教育の反省としては、演習や実習教育内容について社会のニーズに応える専門職養成になっていなかった。また、資格取得後の能力開発やキャリア開発のための研修体系が未整備である。

（３）平成19年度看護学教育ワークショップ（第9回）

報告者：看護福祉学部看護学科　寺島喜代子

１．テーマ　看護実践能力の育成を目指した学士課程カリキュラムの構築
～指定規則改正への対応を契機として～

２．目的：改正が予定されている保健師助産師看護師学校養成所指定規則に対する各看護系大学の対応状況を持ち寄り，関係者間で課題や解決の方向性を整理・共有することを通して，看護実践能力を確実に育成する質の高い学士課程カリキュラム構築を促進する．

３．実施方法

（１）期間　　平成 19 年１１月１２日～１１月１４日

（２）会場　　かずさアカデミホール

（３）参加者　１１３名（本学より１名：看護福祉学部看護学科　寺島喜代子）

（４）主催　　文部科学省

（５）実施　　千葉大学

４．ワークショップ日程

１）基調講演「指定規則への対応を契機とした教育課程の体系的な見直しの必要性」

講師：井上智子（東京医科歯科大学大学院　教授）

概要：

①19 年４月の報告書；「看護基礎教育の充実に関する検討会」（H.19 厚労省）と「指定規則改正への対応を通して追求する看護学教育」(H.19 文科省）の意味を理解するために, H.14 に提出された「大学における実践能力の育成の充実（一次)」（文科省),「新たな看護のあり方に関する検討報告書」（厚労省）やそれ以降の答申書を概観しながら，今回の指定規則改正の概要を説明された.

②改正案に対する具体的提案として,「看護の統合と実践」は看護学の各領域を担当する教員が協力して教育にあたり，単位数の増加は関連分野の教育内容の単位を減じ一定範囲内にとどめる.（臨床実習は現行の２３単位以内にとどめる）

③臨地実習見直しの視点については，免許取得前の臨地実習で体験すべきものと，卒後の研修の中で修得することが相応しいものとの峻別をする.

④保健師改正案の中の「保健福祉行政論」の１単位増は保健師の政策形成能力の社会的要請から必要であり，実習単位増加で求められる到達度は「実際を知り理解できる」レベルであり，単位数の大幅増をしなくても充分到達可能である.

２）特別講演「改正カリキュラムの統合分野新設の背景」

講師：小山眞理子（神奈川県立保健福祉大学　教授）

概要

①カリキュラム案の作成で重視した点は，“看護実践能力の育成につながる教育”，“学生の能力をいかに積み上げるか”，“教育と臨床の乖離をいかに埋めるか”などの問題であり，臨床の実務に近い環境で看護を提供する方法を学ぶ「統合分野」が生まれた.

②専門基礎分野におけるカリキュラム改正点は，臨床の状況に近づけ，学生が理解しやすいように臨床に関連づけて教育すること.

③専門分野におけるカリキュラム改正点は，専門分野を２つに分けた.

④「専門分野Ⅰ」は基礎的理論や基礎的技術を学ぶため演習を強化した内容とし，コミュニケーション，フィジカルアセスメントを強化し看護師として理論的な判断をするための基礎的能力を養う内容とする.

⑤「専門分野Ⅱ」は臨床実践能力を強化した内容で，各看護学において，対象や目的の理解，予防，健康の回復増進や障害を有する人びとに対する看護を学ぶ内容とする.

⑥「統合分野」は基礎分野，専門基礎分野，専門分野Ⅰ，専門分野Ⅱで学習した知識や技術を全て統合し，卒業後臨床現場にスムーズに適応できるようとの意図から生まれた.

⑦看護技術の卒業時の到達目標：教育と看護実践の専門家によるデルファイ調査から，８割は体験しておいて欲しいと思える技術項目を挙げて，卒業時に全ての学生が修得する技術と到達度を明らかにした．到達度は「Ⅰ単独でできる」から「Ⅳ知識としてわかる」まで４段階で示してある.（臨床現場の方が教育専門家より，卒業生の技術到達目標は低く，臨床は新卒看護師にそれほど高い技術到達度は期待していないことが明らかになった.）

⑧卒業時の到達目標を明確にすることにより，すべての卒業生の技術取得を目指す教育ができ，新人看護師のストレスを少なくする新人教育計画に活用できる．また，できるだけ実習で体験できるために指導体制や，学内演習を充実するための教育方法や教材が充実できる.

３）テーマ別グループワーク：検討テーマ毎にグループを編成し 11 名～13 名で討議

＜検討テーマ＞指定規則改正への対応における
①カリキュラム編成上の課題と解決の方向性　⇒全６グループ
②臨地実習指導上の課題と解決の方向性　⇒１グループ
③教育の質保証上の課題と解決の方向性　⇒全２グループ　寺島はこのグループで討議しました.

※各グループ発表の概要

①カリキュラム編成上の課題と解決の方向性

◎卒業要件の単位数が多い現状について

⇒１単位の時間数の考え方にバラツキがある.

総合大学における教養教育科目の卒業要件単位数が多い.

◎統合分野のカリキュラム編成について

⇒在宅看護論は,統合分野として各領域の看護に含まれる内容であることを教員が共通認識する

◎大学教育の理念とカリキュラム編成との関連

⇒各大学の教育理念（地域性や特色）を活かす；例）島国の地域性を活かした「災害看護」など

◎在宅看護論と地域看護学位置づけ

⇒地域看護学は公衆衛生看護に特化する内容を精選し,在宅看護論は他領域と関連づけて実施

例）学校保健は小児看護学，産業保健は成人看護学で学習する.

◎教育内容を精選し，エッセンスを統合しコアカリキュラム構築につながる.

◎複数受け持ち実習，夜間実習について

⇒すでに複数受け持ち実習をしている学校から,一人の対象を看る力を身につける教育が看護実践能力の基礎となることを実感.夜間の看護の仕事内容を知ることが新人看護師のリアリティショック対策とは思えない.

②臨地実習指導上の課題と解決の方向性

◎看護実践能力とは,「即戦力」とは異なる.

◎統合分野の考え方は，各大学の教育理念が重視され，各大学が「統合」をどのように考えるかを明確化する必要がある.

◎実習内容の質の確保

⇒大学の教育理念を理解してもらうために,教員と臨地実習指導者との勉強会を開催したり,日々のカンファレンスに指導者の参加を要請し，実習施設スタッフを育てる.

③教育の質保証上の課題と解決の方向性

寺島が属したグループでは，メンバーが感じている「看護教育の質を保証するうえでの課題」を中心に討議をすすめた．その結果，カリキュラムを教育プログラムととらえ，カリキュラム，学生，教員，環境の要素から「構造 input」「過程 process」「成果 outcome」に分けて，自大学の問題と解決の方向性を探った.

	構造：input	過程：process	成果：outcome
カリキュラム		・基礎看護学の位置づけと各領域との関連	
学生	・大学全入学時代，定員割れ ・質の高い学生の確保困難⇒広報活動の充実 ・看護への志向の低下 ・未熟な学生のメンタル面 ・ゆとり教育の学力の偏在	・指導困難，学習要件を満たせない学生⇒動機付け，自己学習能力の開発（学生の相互学習のシステム作り），フレキシブルな個別対応 ・ＴＡの活用，卒業生の教育への関与	循環をつくる ・大学卒業要件と国家試験受験資格⇒異なる名称の学位寄与は？ ・卒業生の質評価の客観的データの蓄積 ・外部評価
教員	・固定化した学生観の変容 ・教育経験の乏しい教員，教員の看護実践能力の低下⇒モデルの提示困難 ・労働環境（育休，病休）の代替え補充困難	・専門領域間の壁⇒教員のコンセンサス ・unification，sabbatical の活用 ＦＤ，ＳＤ，ＯＤ	・授業評価，卒業生による質評価 ＦＤ，ＳＤ，ＯＤ
環境	・財政，経済基盤による地域格差 ・小児，母性，地域，在宅の実習場確保困難⇒政策立案に関与するパワーを高める	・実習で実施可能な医療行為の制限 ・臨床における到達目標のコンセンサスの混乱⇒卒後教育の範囲の明確化	

◎質保証に向けた解決策：学生・教員・環境の循環をつくる

１）卒業生が指導者としての役割を担うようになる体制，組織化

２）基礎教育と継続教育で達成する技術項目の共有化

３）実習指導者と教員のデスカッション，教員，指導者との事例検討会

４）学生の相互学習⇒例）４年生が「看護教育」の講義の際に，２年生の実習ｶﾝﾌｧﾚﾝｽに参加し学習履歴を見直したり，学生間の技術教育指導をとおして学習を深める等・・・.

2.4　学術教養センター

本年度の学術教養センターFD 活動は，授業評価・授業公開・研修活動の三方面で意欲的かつ活発に行われた．以下，授業公開と研修活動について報告を行う．

2.4.1　授業公開

学術教養センター教員の授業公開は以下の二回.

科目名一般教育現代社会論

日時平成 19 年 6 月 12 日（火）3 限

場所福井キャンパス L108 教室

担当宇城輝人准教授

学生約 100 名

参観者数 5 名（北村知之，山川修，津村文彦，中村匡，亀田勝見）

科目名一般教育国文学

日時平成 19 年 11 月 19 日（月）3 限

場所福井キャンパス L205 教室

担当木村小夜准教授

学生 17 名

参観者 9 名（片山智彦，加藤まどか，北村知之，菊沢正裕，小林嘉宏，杉村和彦，津村文彦，中村匡，山川修）

検討会における議論（授業公開報告からの抜粋）

■参加者の感想

・講義中で用いた CM 映像とニュース番組映像がよい対比をなしており，興味を引いた.

・学生を飽きさせない教材使用だった.

・語彙について，角度を変えた丁寧な説明がなされており，学生への配慮がなされていた.

・３限目という時間帯の大講義授業にしては，寝ている学生が少なかった.

・寝ている学生や私語をやめない学生に対し，どのように向き合えばよいか.

・講述，レジュメ，テキスト，板書，学生のレポート，朗読が巧みに組み合わされ，立体的な講義になっている.

・講義の流れに淀みが無く，かなり練り上げられた授業だと推察した.

・「解釈の多様性」と「自分なりの観点をもつ」ことの重要性．学生自らの解釈を引き合いに出しつつ，多様な論点，視点を指摘し，学生がさらに思索を深める手がかりが効果的に提示されている

・解釈のポイントの説明の際に学生の生活経験，生活感覚に訴えるような説明がされていた.

・テキストを精密に読むこと，姿勢がうまく学生に伝わっていたように感じた.

・オーディオの音が大きすぎる？

・速度，間の取り方がよい．言葉が明快で聞きとり易い.

・学生の回答の扱いが丁寧で，学生の書くモチベーションを高めているように思われる.

・WebCT を用いて学生の回答を回収すると便利である.

・学生の提出物をもとに，書いた者を直接指名，さらに質問・対話をする形式は，少人数ならではの授業方法

・少人数授業は関心の強い受講者が多く個人的接触も増えるので，学術特論へのリクルートにもなりやすいだろう.

・ポイントをおさえてある．冒頭の「おさえるべきこと」がよい.

・書き込める資料であることが，親切.

■議論内容

・受講者減少をどう考えるか

評価が厳しいという評判のせいだろう．また同時間の開講科目に一部学部の一年生向け科目が開講されているのも大きな理由

・単位評価をどうする？

単位は努力に対して与えられるか，達成度か？採点基準や評価の割合を可能な範囲で公開し，教員同士でデータ共有してみては.

・留学生への配慮は？彼らはどの程度ついて行けているのか

ケアは必要だと考えているし，実際心掛けている．しかし，日本語に習熟していない留学生が大部分で，受入態勢や履修指導にも問題はないか.

・オーディオ教材は変化をつけるために有効だが，その使用頻度や活用法はどうあるべきか

・題材をどう選んでいるか

■担当者からのコメント

・現代的事象との連関に気を配って授業を構築しているつもりだ.

・講義の難易度や内容について

多少内容が薄くなっても元々さほど関心のない学生をも一定のレベルまで引き上げるべきだという考え方と，どこまでも「マニアック」に教員自身が本当に「追求する」ことの面白さを伝えるべきだという考え方．この両者を本来多人数に開かれた講義形式の授業においてどのように折り合わせるか，が今後の課題．ただ，画一化する必要はなく，教員個人の裁量や，授業形態の相違，あるいは一般教育科目全体における位置づけの中でそれぞれに改善できると考える.

総括

本年度の学術教養センターにおける授業公開は，前期後期ともに昨年度後期の方式，すなわち各部局ごとに一名の教員に授業を公開してもらうという方式に従って行われた.

授業公開そのものがともに有意義であったことは言うまでもないが，注目すべきは授業公開を誰にしてもらうか，という準備作業を通じて，授業公開に対する教員間に存在する認識の相違が明確になったことも大きな収穫である．例えば，授業公開担当を拒否する理由として，少人数クラスに多数の教員が参観にやって来ると授業の空気が変わってしまうことへの危惧や，教員同士の参観は所詮教育の素人同士の批評に過ぎず，本当に授業の質を高めるためにはあまり役立たないという意見などが挙げられた．現在の授業公開制度にも改善の余地があるのは事実だが，その改善のためには多くの教員に実際に授業公開に参加してもらい，その実施意義を理解してもらうことが必要であろう.

2.4.2　FD 研修

2.4.2.1 学外研修

（1）　FD 活動の現状と将来―高等教育機関での様々な FD 活動の取り組み―

主宰者福井高専創造教育開発センター
日時平成 19 年 5 月 18 日(金)17:00 ～ 18:30
場所福井高専メディアホール(図書館棟 1 階)
講演者京都大学高等教育研究開発推進センター松下佳代教授
参加者約 100 名(高専のほか，仁愛大学，県立大など)

■概要

講演プロット

1)なぜ FD なのか?
2)これまでの FD
3)あらためて，FD とはなにか?
4)プロジェクト型 FD という考え方
5)京大工学部とセンターの連携
6)本校の FD への期待

FD の義務化

入口にあたる入学者の多様化(全入時代等によってユニバーサル化)と，就職先などの出口の多様化が顕著になっている．出入口の多様化に対応するために高等教育の FD への要請が高まっている．大学院は 2007 年 4 月に FD が義務化された．今後は順次，学部そして高専へ FD の義務化が進行する．

日本の大学教員は教育研修を受けていない．米国は TA で教育方法を豊富に経験．英国は，大学教員に対して教育のための研修(30 単位)が義務化されている．

授業アンケート

・学生による授業アンケートは教員評価ではないし，授業評価のすべてでもない．
・担当教員は，学生による授業アンケート，授業公開，自己の点検，試験結果等から自分の授業を評価する．
・その意味で，授業評価ではなく，授業アンケートというべきか．
・どのような質問をするかはとても重要．工学部で実施している例を紹介．
・学生への説明をきっちりした上で，アンケートを記名にしている．記名によって不真面目な回答が減る，1 学生について 4 年間のアンケートを追跡して分析できる，成績等との関係を分析できる．
・回答は 4 択(4 あてはまる，3 ややあてはまる，2 あまりあてはまらない，1 あてはまらない)
・授業は，消費者調査とは違う．よって，授業への満足度を問わない．役立つか，知識や技能が実についたか等を問う．
・「授業を通して重要と思った理論やキーワードは?」，「この授業が他の授業のなかで役立った場合，その授業名は?」，「この授業に関連する学習を進める場合，必要と思われる授業の内容は?」などを記述回答させている．

授業公開は検討会とセットで行う

・教員の参観によって一つの授業を，複数の教員の目でみることができる．担当教員に見えない，学生の行動なども参観の教員から聞くことができる．

・他者の見方と交流することによって新しい見方が生成される．

・教員の交流はそれにも増して意義有り．最近は検討会を昼休みに行うことも多い→ FD (=Food&Drink)

ちなみに，福井高専では，今学期から公開授業週間を設け，この期間では，教員が自由に参観できる．この方法は県大の FD 部会でも議論したが，合意をとれず，踏み切れなかった．

FD はトップダウンとボトムアップの調和が肝要

・トップダウンは，学部など部局単位での活動，文科省の GP など大学全体の活動．

・ボトムアップは，プロジェクト型で進めると効果的．例えば，一つの科目を多数の先生によって同時開講する場合がある．本学の教養ゼミのようなもの．例えば，担当する複数の先生方が，その科目の目標，カリキュラムや授業方法，成績評価などについて議論し，一定の水準と均質性を保つ努力をする，といった形の教育改善(FD 活動)は有効．京大工学部の基礎数学などで実践．

・トップダウンとボトムアップを結合するための方策として，FD のコミュニティを形成していく．

（2）国際社会が求める人間像：近大生のニーズに適した語学教育を考える

（近畿大学第 3 回公開シンポジウム）

日時平成 19 年 12 月 8 日（土）13:30 ～ 16:50

場所近畿大学 11 月ホール小ホール

講演者後述

参加者約 30 名（近畿大学など．本学からは亀田勝見准教授）

■次第

挨拶

・楠本隆(語学教育部長)「21 世紀の語学教育に向けて」

講演

・岩崎正紘(元松下電器産業株式会社事業所人事部部長)「企業が求める人材」

シンポジウム第一部「学部の人材育成における語学教育の役割」

・コーディネーター北山環(語学教育部長)

・学部提案者

法学部藤田直也教授

経済学部松永舞准教授

経営学部浦崎直浩教授

理工学部大澤孝明教授

薬学部川畑篤史教授

文芸学部藤澤博康准教授

農学部八丁信正教授

医学部宗像浩教授

生物理工学部仁藤伸昌教授

シンポジウム第二部「近代性の語学教育を考える一語学教育部の取り組み」

・語学教育部提案者

カネルキムロバート教授

新田香織准教授

大村吉宏准教授

大西博子准教授

オストハイダテーヤ講師

■概要

講演では，20 世紀における企業のグローバル化と 21 世紀への交替時期のそれとの相違を示した上で，これから求められる人材として「学ぶ力」「考える力」「人間理解力」を備えるべきことなどが述べられた．企業の変革により社内教育できなくなった現状から，大学にそれを代替してもらおうという，企業に都合の良い話や，昨今の表面的な話.

シンポジウム第一部では，いわゆる一般教育を担当する語学教育と各学部の専門語学教育との連携について，取り組みを紹介するとともに現状の問題点が述べられた．シンポジウム第二部では，近大の語学教育における取り組みとして，近大 Can-do なる能力判定基準の作成とそれに応じたレベル別指導方法の確立を目指した活動の発表があった．まずは母語でコミュニケーションする能力を養うべきこと，国際化は国内から始まるという視点を語学教育では常に持つべき事などが語られ，示唆に富む内容であった.

（3）大学教育改善とインストラクショナルデザイン

日　時	平成 20 年 2 月 21 日(木)14:40 ～ 16:15
会　場	仁愛大学(衆会ホール)
講　師	熊本大学大学院社会文化科学研究科鈴木克明教授(システム学専攻)
参加者	仁愛大学の他，福井高専や仁愛短大などから 20 数名． 本学からは山川修教授と菊沢正裕教授

■概要

ID とはなにか.

教育の効果，効率，魅力を高めることである.

学習意欲を高めるための ARCS モデル

・Attention(注意)を喚起させなければ内容のある講義も無意味

・自分の体験と学習項目を Relevance(関連)させることができなければやる気がでない.

・この授業は自分の何を充足させるかが重要だ.

・やればできると Confidence（自信）を持たせることが大事.

・学習項目ごとに，そして学期末にこの授業を受けてよかったという Satisfaction(満足)がない

・授業は，学生によって，あるいは学習することの意味がない.

学習を支援する(学習を進める)ためのガニェ(ID の創始者)の 9 教授事象

1) 学習者の注意を喚起する

2) 授業の目標を知らせる

3) 前提条件を思いださせる
4) 新しい事項を提示する
5) 学習の指針を与える
6) 練習の機会をつくる
7) フィードバックを与える
8) 学習の成果を評価する
9) 保持と転移を高める

本来，大学生は「学生」．このうち 4)と 8)を与えれば，他の 7 つは自分でできるはず．そう信じて大学の先生は教授していることが多い．しかし，昨今の大学生は，「生徒」なので，上の生徒教育理論の 9 つすべてを与える必要がある．

質疑と議論

・ARCS モデルの R の大切さを実感.

・ID は「生徒」を教育する方法である．しかし，昨今の大学生は，「生徒」であり，4 年間で「学生」にすることが目標である．

・授業改善の ID とは違うが，複数の授業を構造化するカリキュラム策定にも使える理論がある．

2.4.2.2 学内研修

（1）導入ゼミに必要な学習項目を考える～教養ゼミの実践を踏まえて～

：平成 19 年度学術教養センターFD セミナー(1)

日時 12 月 19 日(水曜日) 14:40 ～ 16:10

場所経済棟 9 階会議室

参加者 11 名

■概要

1 年生前期に開講している教養ゼミを衣替えして導入教育を中心とする「導入ゼミ」(前期)，それに続く「教養ゼミ」(後期)，そして 2 年次以降の「学術ゼミ」からなる一連のカリキュラム改変を行うための議論の場として，「導入教育を考える」セミナーを開催した.

このセミナーは，教養ゼミにおいて，担当の教員が，本学の 1 年次学生をどのように受け止め，教育方法に工夫をこらしているかを議論する，いわば，ファカルティ・ディベロップメントとしての活動に位置づけられるものである．そこで，FD サイトに概要を掲載するとともに，第 2 回目以降は，全学の教員の参加を呼びかけることを予定.

■講演

学術教養センター教授山川修

「導入ゼミに必要な学習項目を考える～教養ゼミの実践を踏まえて～」

再来年から学生の基礎的な能力を伸ばすために「導入ゼミ」が開始されるが,現時点で何が学生の「基礎的な能力」か，合意が取れているとはいい難い．そこで，今回は，山川が数年前から実施している教養ゼミ「テレビを読もう」の実践を踏まえて，導入

ゼミで必要な 3 つの学習項目を提案した．すなわち，「論理的思考力」「表現技術」「コミュニケーション技術」である．この 3 つは後者ほど複数の要因が絡んでいると考えられる．

後半は，こういった学習項目を一部取り入れている，山川の教養ゼミの事例を紹介．なお，この講演は，第 16 回学術教養センター研究会の一環としてなされた．

意見交換

導入ゼミの学習項目として「論理的思考力」「表現技術」を入れることは大方の理解を得られたように感じる．

「コミュニケーション技術」に関しては，「大学で教えるべきものか」，「現有の大学教員で教えることができるのか」等，かなりの抵抗感が存在するように見受けられる．

（2）「教養ゼミ」から「導入ゼミ」を考える：平成 19 年度学術教養センターFD セミナー(2)

日時平成 20 年 2 月 6 日(水) 10:40 ～ 12:10

場所経済棟 9 階会議室

参加者 19 名(学術教養センター10 名，経済学部 2 名，生物資源学部 1 名，看護福祉学部，教育・学生支援部 1 名)

■教養ゼミの実践報告

津村文彦講師「観光人類学入門」

・概要

回ごとに細かく段階的に設定されたタスクを実践しながら，プレゼンテーションと討論を経て，最終的にはレポートの作成を目指す．

・学年が上がった時に，どのように生かされているか，成果を知りたい．

亀田勝見准教授「東洋を語ろう」

・概要

グループ単位でテーマに基づく発表を行わせ，聴衆である他の学生に評価させることを複数回行わせる．目的は，口頭発表と資料を用いて発表する際の基本的ルールや心がけを，自分あるいは他者の失敗を通じて実感として学ばせることにある．

・手書きで資料を作らせることの意義が議論された．

・津村・亀田の両発表に関連して，「学生が行う相互評価そのものを教員が評価することはしているか」「受け身の学習でなく，自分から働きかけようとする学習を大事にすべきではないか」などの議論があった．

菊沢正裕教授「環境学習」

・概要

環境問題に関する書物を利用して，環境英語の理解・図書の紹介・課外学習・情報収集や比較討論などを行わせ，ポートフォリオやスライド作成などのスキルも養う．環境問題について懐疑的な書物を取り上げ，その反論との対比を行うことによって，温暖化のメカニズムについての正確な知識を得させる．この過程を通じて，情報に対する正しい向き合い方を学ばせる．

■導入ゼミを考える

山川修教授「導入ゼミに必要な学習項目を考える」

・発表内容

導入ゼミ→教養ゼミ→学術ゼミの三層構造を明示した上で，導入教育において修得させるべきスキルとは何か，国内外の事例などを元に論じる．

同時に，個々のスキルを学ぶのではなく，統体としての調査・発表スキルを養成せねば意味がないのではないのか?という問題提起を行う．

自由討論

導入教育で修得させるべき項目には，スキル養成の他に，一般常識的レベルの知識不足を補完することもあるのではないか？という問題が提示された．

これについての各種意見は以下のとおり．

・学教センターの各種ゼミでスキルを学ばせるのならば，学部が二年から行っているゼ

2/6 FD セミナー

ミでは理科・社会分野に関する常識的な知識の蓄積に特化してもよいかも知れない．

・それを少人数教育ですべきことか．

・既存の大講義がその役割を担っているのでは?

・学ばねばならない，という自覚を養成すればよい．

センターと学部との間で連携をとり効果的な役割分担をすることが必要だ，との共通認識を得る．

■セミナー総括

交野好子副学長

本学の教育向上のために，このようなセミナーを 1 ステップとして，個々の教員に考えていってほしい．

2.4.2.3　総 括

今年度の FD 研修活動について，学術教養センターでは学内研修に特筆すべき点がある．従来は学外から講師を招いて講演をしてもらうことが多かったが，今年度後期に行われた二度の学内研修は，いずれも学内教員同士の発表討論会と言うべき性質のものであった．

昨今の大学事情を鑑みて，本学でも導入教育のあり方を真剣に考えざるを得なくなっているが，一般教育における導入教育の役割を担っている現行の教養ゼミも，より導入教育的側面を強化していく方向での改革が決まった．そのためには教員同士が情報交換することで，既存の教養ゼミに欠けている面，すなわち担当教員の自由裁量に任せすぎて導入教育に対する教員間の共通理解が不足している点を解消せねばならない．そのためにも今回学内教員によって行われた研修は大変有意義であり，今後も継続して実施していくべきものと考える．また，導入教育に限らず，教員の教育力向上全般のためにも学内研修を活用していくべきであろう．

学外研修については，三回それぞれがテーマを異にしている．一つは FD 全般の制度につい

て，一つは語学教育の方向性について，もう一つは教育改善のための基礎理論についてであって，それぞれに大きな意味を有する．特に後の二つは，昨今の学生事情を反映していかに効果的な授業を行うべきか，大学教育の基本スタンスの見直しを迫る内容で，報告者のみならず大学構成員に周知してほしい情報を含む．ただ，残念ながら研修に赴いた FD 担当の教員のみがその重要性を認識しているだけという状態は，あまり改善していない．学内研修との有機的な連携を実現することなどによって，情報を他教員へ効果的に伝える手段を模索する必要があると考える．

3. 授業評価に関する点検

3.1 経年変化

設問は，学生自身に関するもの，教員に関するもの，設備・環境に関するもの，授業内容に関するもの，授業全体に関する５範疇に分類され，全 18 問である．設備・環境に関する設問を除く範疇から「授業の質」に関わると思われる設問５つと，「学生の充実感」に関わると思われる 6 つのデータについて，過去のデータを統計分析（共分散構造分析）し，設問の強さを数値化した．その結果，図にように，「授業の質」に強く関与する設問として，「総合評価」ついで「授業の方法」が，また「学生の充実感」を最も表す設問として「授業への関心が高まった」についで「学力到達度に満足した」が挙げられる．

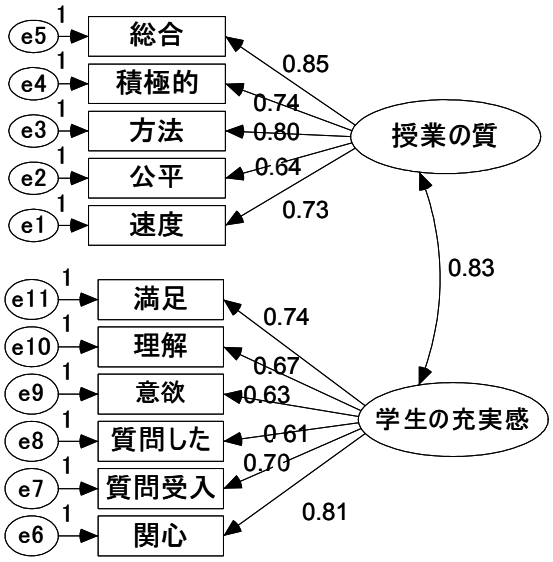


図　授業に対する教員と学生の側の質的特性を表す設問の強さ分析

FD 報告 2006（page 24）では，教員に関わる項目「授業の方法」「教員の積極性・熱意」「総合評価」について整理したが，上の分析を踏まえて今年度はその一部を割愛し，「学生の充実感」を表す設問にかえて整理した．また，前期と後期にわけて以下にまとめた授業評価点（回答は 1~4 で，数値が高い方が，好感度が高い.）次の点が指摘される．

- 全般に前期のほうが後期よい数値が低い．（2005 年前期の低さは集計処理に問題があったかのごとく他より数値が低い.）これは，本学では受講登録数は 1 年生が最も多く，とりわけ前期は授業に不慣れであるため多くの科目を登録しすぎていることも原因の一つと考える.）
- 生物資源学部を除く 3 部局の評価は，2006 年度で上がりきった感がある．
- 大規模教室を多く使う経済学部，学術教養センターも，年を追って改善が認められる．ともに関心度が上昇し続けている点が評価される．

・ 看護福祉学部では，当初から関心は高く，授業改善効果も早期に現れたが，2007 年度は逆に低下に転じた．新たな段階に入ったと思われる．

・ 100 人未満教室授業（基本的に 60 人未満教室）の改善が，高い数値に向かって尚かつ進んでいるのは，少人数教室では教員の工夫が際限なく生かされる一面をうかがわせる．

・大教室授業の改善には教室施設・環境の改善がとくにかかわると思われる．教職員一体となった改善へ方策も求めらる．

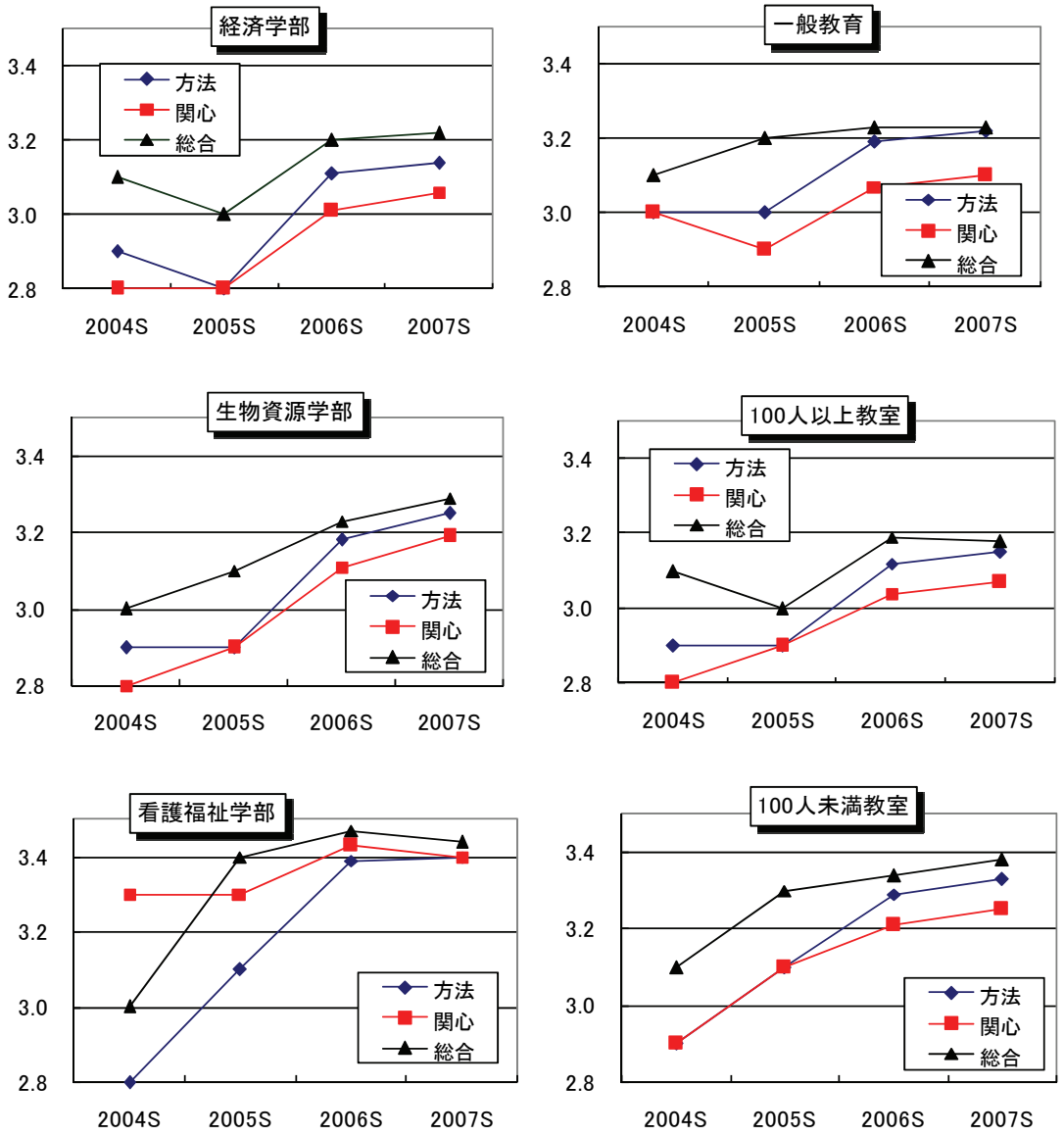


図　授業評価結果の部局別経年変化（前期科目）

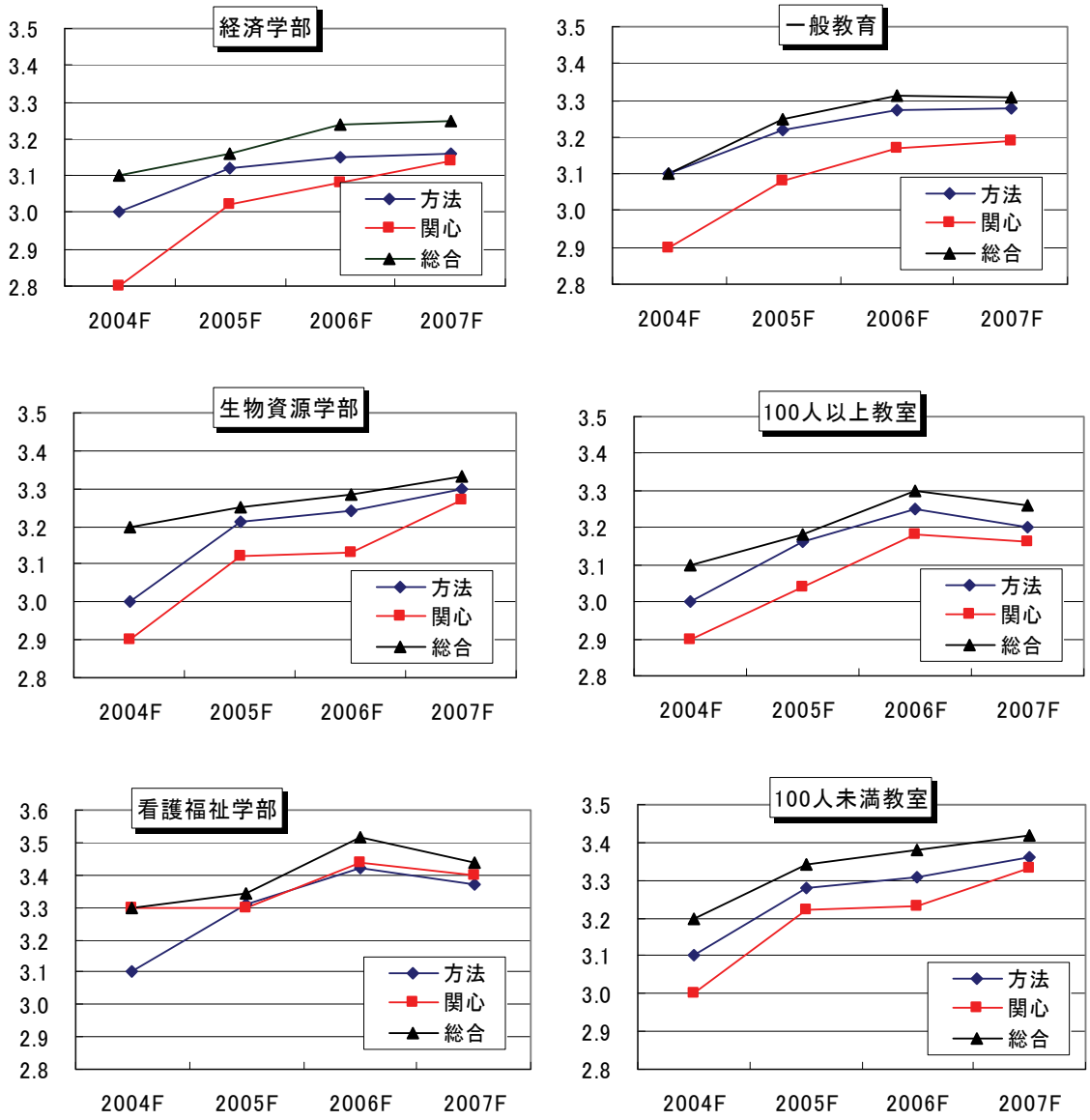


図　授業評価結果の部局別経年変化（後期科目）

3.2 教員へのアンケート

3.2.1 アンケートの概要

授業評価事業を始めて 4 年が経過した．非常勤を含め，匿名性が保てないなどの特別の理由がない限り，原則参加の立場で教員と学生に負担を強いてきた．前節のように全体としての授業改善効果は十分認めれらるが，学期末に授業評価を実施するのは学生へのフィードバックがかからない，負担が大きすぎる等の苦言も聞かれる．

そこで今年度 2 月に一斉メールで意見調査を実施した．その結果，匿名性が保てないにも関わらず，35 名（対象者の約 20%）から回答を得た．設問内容と，教員がこの間実感している改善効果についての数値評価（問２）の結果を次に示す．

実施期間　2008 年 2 月 14 日から 29 日の 2 週間

実施対象　授業評価実施教員（非常勤を含む）

実施手段　メール

質問内容

問１　所属
問２　ご担当の授業全般に評価値は良くなりましたか？
　変わらない　あまり変わらない　やや良くなった　良くなった
問３　問２で「良くなった」、「やや良くなった」とお答えの先生におたずねします。
　授業を改善するためどのような工夫をされましたか。箇条書きにして下さい。
問４　問２で「変わらない」、「あまり変わらない」とお答えの先生におたずねします。
　変わらない理由で当てはまるものをお選び下さい。
　　評価がもともと高い
　　評価は低いが、気にせずなにもしなかった
　　評価が低いので改善に努力したが、変わらなかった。
　　この場合どのようなことをされたか、お書き下さい。上と違う理由かあれば、お書き下さい。
問５　授業評価はじめ、本学のFD活動全般についてのご意見をお書き下さい。

回答数35（回収率約20%）

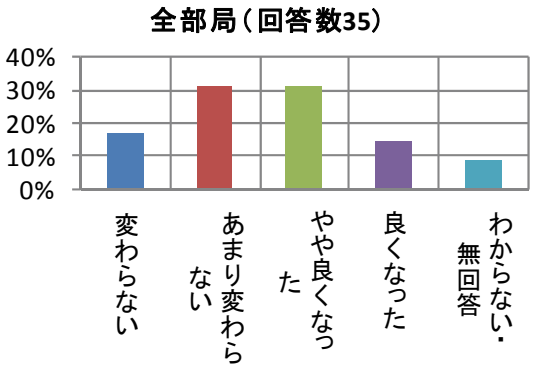


図　問２の結果（全体）

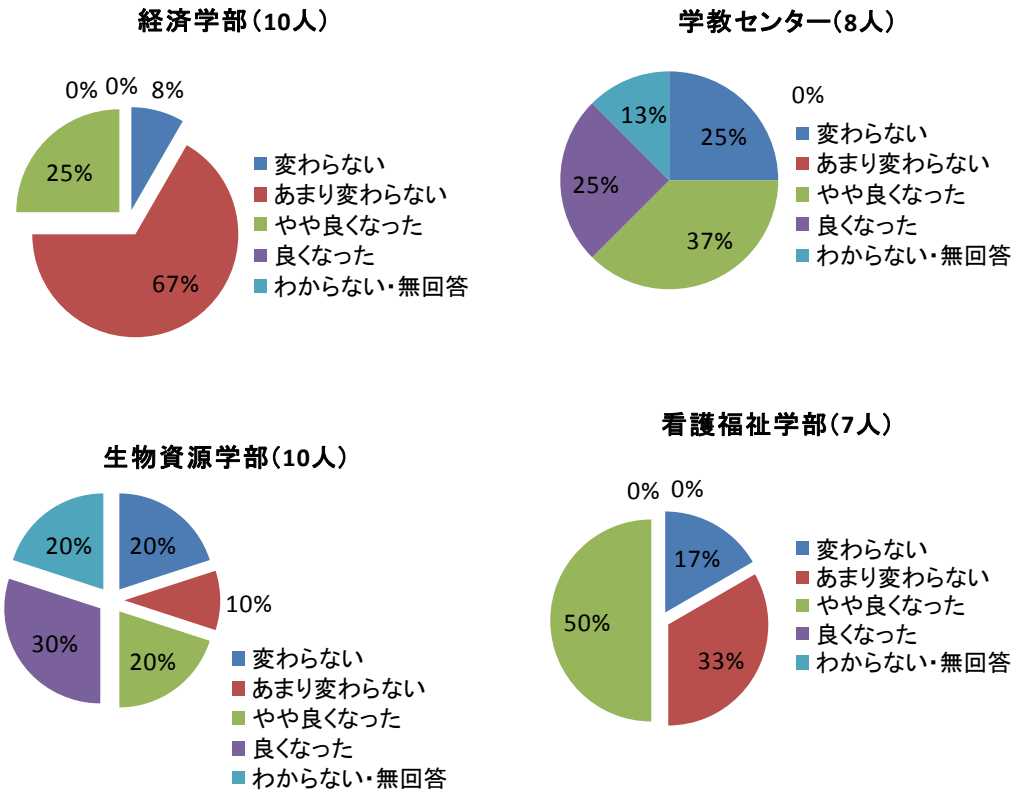


図　問２の結果（部局別）

3.2.3　教員の意見

問3の「改善があったと考える建設的な意見」，問4の「あまり変わらないとする意見」，問5の授業評価はじめFD事業全般に対する意見では，授業評価事業の手法の改善，授業評価結果の利用を促進する意見，授業評価事業に対する肯定的意見，そして同否定的意見をまとめた．そのほか，授業評価以外についての意見も頂戴した．なお，重複を承知で回答された意見のすべてを，そのまま表記した．また授業評価に関する否定的意見が量的に多いのは，一人の教員が多数の否定的意見を列記されたのをそのまま掲載したことによる．

ここでは，それについてコメントすることなく，貴重な意見として今後の事業展開に生かしたいと思う．回答者には，この場をお借りして感謝申し上げる．

問３　問２で「良くなった」、「やや良くなった」とお答えの先生におたずねします。 授業を改善するためどのような工夫をされましたか。箇条書きにして下さい。
・質問カードなどを活用して学生さんの疑問や要望に可能な限り対応するように努めた。 ・非専門の学生さんが関心を持ちやすい最近話題のテーマとの関連にも少し触れるようにした。 ・スライドの書体などをより適切なものに変えた。 ・講義の準備により時間をかけるようにした ・ネットで閲覧できる講義の資料や参考文書を増やした ・専門用語の説明は、なるべく平易な言葉で行うように気をつけた ・最新の技術や業界の動向を取り入れるように心がけた

・講義資料の改善（字の大きさ、太字の使用、穴埋め方式にして授業時に完全版を提示　等）
・講義資料、図をPOWER POINTで提示
・毎回の授業範囲を前もって提示
・講義は原則60分として、残りは質問と知識整理および小テストの時間とした
・毎回小テストを実施（その日の授業内容について小テストを実施し、評価の一部に加えることを学生に伝えた。これにより授業への集中度が上がったと感じている反面、鬼と思われているかも）
・Web CT の利用
・配布プリントには図だけをのせて、要点は板書するようにした。
・授業開始時に、復習をかねて前週の要点を答えさせるようにした。
・より基本的な内容に絞って授業計画をたてるようにした。
・ 毎回，プリント教材を使用し、進行状況を確認しながら授業計画に従って講義を行っている。
・ 一方的な講義にならないように，途中で理解の確認や質問などにより学生の積極的な参加を求めている。
・ 実際に講義の内容が研究でどのように使われているかについて，パワーポイントによる映像で研究現場を見せながら説明することにより，講義の重要性を認識させている。
・ 他の実習・実験との関連性をできる限り明確にするように説明している。
・ 中間試験を行うことにより個人および全体の理解度を確認し，後期の講義方法を学年毎に修正している。
・ 試験問題の点数が低い学生に対しては，電子メールや電話，直接話し合うことにより，学習意欲が低下している原因を確認してから補講や再試験を行っている。
・授業評価アンケート結果も参考にして年間の授業計画を立てている。
・具体例（市場に出ている商品）を取上げて、身近に感じてもらう工夫。
・授業中に学生に対して行った質問の返事や中間試験の結果から、理解度や学生のレベルを確認し、それに合わせて後半の授業レベルを変える。
・質問用の用紙を配布し、授業の中か、Web掲示板で回答するようにした。
・配布プリントの内容を、流れが分かるように工夫した。
・改善点はシラバスに記載し、公開した。
・小テストの実施と復習に時間を多くとり、理解を深める努力をした。
・感想、質問を書かせ、回答した。
・板書を多用した。
・講義内容の区切りごとに、チェックシートを配布するなどの工夫

問4　問2で「変わらない」、「あまり変わらない」とお答えの先生におたずねします。
変わらない理由で当てはまるものをお選び下さい。

・評価がもともと高い（8件）
・評価が上がったり下がったり、年度によって多少変動している。
・評価が安定していないので、しばらくこのまま続けてモニターしていきたい。
・評価はたいして高くはないがそれほど低くもない。そういうレベルでだいたい推移していたと思う。
・評価が極端に低いわけではないが、それなりに工夫をしたが、あまり変化がなかった。（3件）
・評価の上下について特に思い当たる要因はない。だが、自分なりに改善と思われる努力は行っている。具体的には、「大講義において、すべてプロジェクターをつかって、文字も写真もすべて映写しながら授業を行う方式に切り替えた」など。

・評価が低いので改善に努力したが、変わらなかった。次のように改善を試みた。
　１．「早口で語尾が曖昧」と言われたので、意識して話すようにした。
　　正直、あまり治っていないと思う（多少はマシかもしれない）。
　２．プリントだけではどうもわかりにくそうなので、スライドを併用
　　するようにしつつある（現在も移行中）。 ただ、そのため旧来の
　　プリントの記載順序などと齟齬が生じ、混乱を来したかもしれない。
　　「スライドをプリントにして配れ」という意見もあり、部分的には
　　応じている。 スライドをプリントにするのは容易なことであるが、
　　著作権の問題などもあり、全面的には応じられない。
・評価が低いので改善に努力したが、変わらなかった。
・評価は低いが、気にせずなにもしなかった。
・評価の高低に関わらず、毎年改善を試みている。2007年度については「板書の量が多い」という意見に答えるため、パソコンによるプレゼンを多用したが、あまり評価を得られていないようであった。パソコンの利用法については今後も工夫をしなければならないと感じた。
・授業評価をしてもしなくても、学生にいかにわかりやすく、学生が聞きやすく、楽しい授業ができるのか、常に努力をしています。

問5 授業評価はじめ、本学のFD活動全般についてのご意見をお書き下さい。

◎授業評価アンケート（手法の改善を望む意見）

・オムニバスで２～３コマ毎に授業を実施する場合、その都度、何回も学生の評価を求めることは出来ない。授業時間数の減少にもつながる。
・教員は自分の講義だけを見ていますが学生にとってはたくさん受けている講義の一つに過ぎません。教員個人の努力で一つ一つの講義を良くすることには限界があります。学生にとっては一定期間に受けた複数の講義の全体的な満足度の方が大切ではないか。一つ一つの講義の改善だけでなく、全体的な満足度を上げる方法があればいいのですが・・。
・学生に対するフィードバック、あるいは施設や教室の改善など、授業評価で得られた情報の活用体制は、まだ改善の余地があるように思います。
・教員に対する評価結果の通知、それに対する教員のコメント入力については、もっと作業が楽になる方法を考えた方がよいと思います。個人的には、ネットで評価結果を見ながらコメント書き込めるようなシステムが望ましいと思っています。
・学生による授業評価も公開授業の検討会も、授業時間中に実施するのは授業の種類によっては（教えるべき内容が多い授業）負担になると思います。私の場合は今回より授業評価をWebCTで実施したので負担はいくらか軽減されました。Web CTの活用をもっと普及させていく必要があるのかなと思います。
・授業評価の準備・データ処理等，緻密な作業をありがとうございます．大学として熱意をもって取り組んでいるのが伝わってきます．
・授業評価の質問項目ですが，講義科目を対象としているのか，実習や演習，実技科目では対応していない項目があるように感じます．だからといって，各授業形態に応じた質問項目を設定することも難しいですし，自分もどのような質問項目が適切なのかもわかりませんが…
・体育実技では，7月の暑いグラウンドやテニスコートの屋外（体育館に移動して記載することもありますが，時間がかかります）や体育館で（汗を流しながら），1月の冷え込む体育館で（震えながら）学生が記載していることを把握しておいていただけますと幸いです．
・だいたいの傾向を把握できる程度の規模で数年間実施してきたのであるから、今後は「簡素化」の努力を是非していただきたい。

・少人数のゼミ的な講義は、アンケートをすることにどれほど意味があるかよく分からない。とくに、学教センターでおこなっている「学術特論」のような、必修でないまったくの選択のゼミ的な講義は、基本的にアンケートをとるまでもない状況（学生=教員間のコミュニケーションがそれなりに密な状況）でおこなわれているのではないかと思われる。
・授業評価結果のエクセルファイルに各設問の内容を示してもらえるとわかりやすい。
・授業評価について：１．学生自身の自己評価欄（なぜサボったか，どういう点に興味が持てたか，など）と，２．教員（内容，話し方，教材の種類など具体的希望を記述）への要望，３．大学当局（黒板，スクリーン，映写設備など）への要望を記述させる欄を設けてはどうでしょう。
・授業評価アンケートは毎年同様な内容であり，また，自分でも他の方法で学生からのフィードバックを得るように努力しているので，同一科目については２，３年に一度でいいのではないかと思う。
・アンケートは項目数を減らすなど、経費・労力を節約したらよい。
・こうしたアンケートは常にマンネリ化する危険がありますので、設問数を減らしたり、学生に評価のメリットが伝わるように、アンケート結果をフィードバックする仕組みももう少し工夫をすることが必要になると思います。その基礎データとなる評価データの集計解析もよろしくお願いします。
・毎回続ける必要はないと思う。時々実施して、気分を引き締めるという程度でいいのではないかと思います。
・大学運営には教員、学生、事務局が三位一体となって取り組むべき事柄だと思います。学生には単にアンケートを取るだけにとどまらず自治会などを通じて直接、授業のあり方に対して意見を出来る場を設けて教員、学生、事務局の三者が議論を行うことでよりよいＦＤ活動になるのではないかと思っています。そうした仕組みづくりに積極的に取り組むべきだと思います。現状ではアンケートやたまに耳にする学生からの話ぐらいしか学生の意見を取り込む方法がなく手探りでのＦＤ活動を余儀なくされている状況です。またせっかくお金も時間もかけてアンケートを取っても結局、各教員の「自主的な努力」という形でしかその貴重な意見を反映できていないように思います。学生の意見はいわば顧客の意見でもあるのでこうした意見をカリキュラムだとか教育施設だとかいったような教学全体に取り込んでいくことで大学の競争力を高めていくという取り組みが必要だと思います。各教員の自主的な改善努力が必要なことは言うまでもないですが学生も自分たちが大学運営に関わりよりよい授業のために積極的に関わっていくことが必要であることを教員や事務局がきちんと教えてその意見をきちんと採り上げてこれを教学に反映させることが必要だといつも思っています。そしてこのことが初等教育、中等教育との違いであり大学の良いところではないかと思っています。そのための仕組みの整備に教員、事務局は取り組むべきだと思います。そこでの事務局の仕事はアンケートの集計や教員の意見をまとめて右から左に流すだけではないと思います。
・点数（しかも平均と母標準偏差）だけ送りつけられても解釈に困る。意味のあるデータにしたいならせめて例数（有効回答数）を併記するべきだ。
・たかがエクセルのファイル（解凍後）がどうして1.5メガにもなるのか？（こちらで処理し直したら17キロに収まった）。
・自由記述を重視している。 しかし、あのPNGファイルは大きい、見辛い、手間がかかると、３拍子揃って最低。
・授業の良し悪しをさておき学生にだけ点数をつけるのは、どう考えても片手落ちであり、授業評価アンケートは「やることに意義がある」と思っている。 そういうわけで点数の昇降に一

喜一憂する気は更にない。 小生はむしろ学生の試験の成績（とくに中位から上）を授業への正当な評価とみなしている。 少数であっても高得点の学生が存在することは、こちらのメッセージが通ったという意味で、心強い。（なにも全員に「高得点を取れ」と言っている訳ではない。もちろん取ってくれて嬉しくないわけはないが…）

・成績からして、「正規分布」というより「二極分化」していることが、考えられる。したがって、評価に関し「平均点」で出すより、各点数ごとの「分布」で出して（１点：○人、２点：○人・・・）もらう方が、有り難い気がする。

・「点数」よりも、人数は少なくても「自由記述欄」に書かれていることの方が、授業改善の参考になる。「自由記述欄」のスペースを多く取り、充実してほしい。

・大学院・ゼミなどの少人数での授業評価の実施は無意味

・結果を公開するなら、受講者数、回答者数、単位取得者数のデータもみたい。

・このような評価は、これからもしてほしいと思いますが、全体に、教師も学生ももっと簡単にアンケートをできるやり方にしてしたほうがよいと思います。例えば、回収方法も、各教室に、評価表を入れるポストのようなものを設置して、いつでも評価用紙がおいてあり、学期の終わりだけでなく、いつでも可能な方法で、気軽に、日常的に行えるといいと思います。

◎授業評価アンケート（結果の利用を促す意見）

・看護福祉の評価が高まったとのこと、どのような工夫をされたのか参考にできる点があればぜひお教えくださるとうれしく存じます。

・評価が高い教員の方の授業のポイントなどを簡単にまとめてもらえるとありがたい。

・各教官が、自分の過去の授業評価結果を簡単にチェックできるようにしてもらえると助かる。

・可能であれば、学生の評価の高い先生を取り上げて、なぜ、高いかを分析してもよいのではないかと考えます。また、逆に、評価が低い先生についても、その原因を分析することも必要かと思います。せっかくの手間隙かけたアンケートを、なにか有効に使えるようにしてみたらいかがですか？

・評価がよければ、給料に反映するとか、教員へのモチベーションを高めることに利用してもよいと思います。

・個々の先生がそれぞれ努力されているので、工夫、アイデア集を編纂してほしい。

・ＦＤの結果は、教員間において公開し、相互啓発ができるようにすべきである。学生は多くの科目を受講しており、沢山の授業評価を行っている。そのためにほとんど投げやりに書いている節がある。現在の期末に行う方式では、当該学年にはその評価・改善が影響しない。従って、きちんと書くインセンティンブがない。前期・後期の真ん中あたりで実施する方法を検討したらどうか（他大学実施・ＦＤセミナーで聴いた話）評価と成績をひも付けして分析したい。

◎授業評価アンケート（肯定的意見）

・私学出身の小職にとっては授業評価アンケートは自分の学生時代もずっと行われていたので「当然実施すべきもの」だと考えていますし回答する側にいたときには負担と感じたこともありません。むしろ明らかに授業に問題があるようなときにはそのことに対する抗議の意志を公的に表明する手段として非常に有効だと思っておりました。授業評価アンケートの結果とそれに対する教員のコメントも学内だけでも公開すべきではないかと思います。

・良く授業をうけている関心度の高い学生からの直接の意見が結局いちばん参考になるような気がします。

・授業評価により、授業方法を少しでもよくしようと努力することにつながるので必要なことだと思います。

・アンケートは教員側にも一定の緊張感をもたらす意味で、取組んだ価値はある。

・自由筆記項目に書いてくれる学生は、アンケートにまじめに答えてくれているので、その内容は参考になった。
・母数が小さいので、評価は、個人の資質におうところが多い。毎年大きく変化すると考えられる。しかし、FD活動は、活動そのものが重要で、意識改善に大きく役立つ。
・教員が教員を評価したり、上司が部下を評価するよりも、学生の評価は事実を反映していると思います。

◎授業評価アンケート（否定的意見）

・学生のレベルは上から下まで大きな幅があり、どのレベルに合わせるかで授業内容は左右されます。内容を簡単にすれば、理解度の平均点は上がりますが、向学心に燃える上位クラスの学生は逆に物足りないと感じるようです。底辺の学生を救うことをどこまで考えるのか、悩ましい問題です。大切なのは、各現場の学生のレベルや要望に合わせた対応です（＝「現在進行中の学生レベル低下にどのように対応するのか」）。
・授業評価に対して学生がマンネリ化している傾向が見られる。初期は多くの学生が自由感想を記してくれたが、最近は感想を記してくれる学生が大きく減少している。よって、毎回全ての授業評価を学生に課す必要があるか否かについて疑問である。
・西本さんもお書きの通り、学生は回答の負担が重くて疲れている様子。
・結果的に中位を中心にした当たり障りのない評価結果になって教員としても参考にしにくい。また、授業の工夫をしてもそのことが学生に伝わってない可能性あり。教員からも「こういう工夫をしているのだがどうか？」などのコミュニケーションが必要か？
・ゼミ生などにはときどき改善点を率直に尋ねて参考にしていますが、授業評価アンケートを翌年度の具体的な工夫の参考にするのは難しい。
・授業評価は学生の負担の少ない最低限のものにして、個別の講義改善は、学生との直接対話でやって行くのが現実的かとも考えます。
・FDが教員よりのものになっていない部分もある。たとえば、教員としてはもっと講義の中身や手法について個別に学生の反応を尋ねたい場合もある。各教員が情報を収集するというスタンスもありかと思う。
・学生の負担は大きいだろうと思う。同じ内容のアンケートを同じ時期に何度も記入させられることをどう考えているのか聞いてみたい気もする。
・やむを得ないのは承知しているが、今ひとつ学生にへりくだっている感じがしてしまい抵抗がないと言えば嘘になる。これはFDアンケートにだけ向けられているものではないが、学生に本当の力（自分で重要だと思ったらメモをとる、わからなければ質問に積極的に行くなど）をつけさせるために必要なのは、彼らに「お客様」モードで対応してしまうことではないと思う。そんなことをするから、就職活動の時になっていきなり（先生も学生自身も）苦労している面もある。
・以上のようなことを言うと、すぐに「昔とは違う・・・」「学生が変わったのだから、先生も変わらないと・・・」等の批判を向けられることもあるが、それもやはり違和感を感じてしまう。というのは、多くの先生は「学生気質が変わったこと」に敏感に感じており、それへの対応を考えている。今の風潮は、「先生だけが悪くそして変わらないといけない」（先生原罪論）というようになっている気がする。学生を変えてはどうしていけないのだろうか？
・学生が「まともにFDに答えても、何も変わらない」と述べているのをよく聞くようになった。
・授業評価：今後も継続する必要がある。
・自分自身は、このような評価をされなくても、以前から、学期の終わりに、必ず、学生が評価できおるような無記名のアンケートをしてきている。
・担当した授業がうまく出来なかったと感じた部分は、FDアンケートとは無関係に、継続的に改

善していく必要があると思っている。(試験結果や授業中の学生の反応に如実に反映されている)
・アンケートはマンネリ化している。項目数が多いため、回答を面倒に思う学生が多い。
・アンケートは偶然学生から聞いた話では、適当（例：　質問を読まずに 右左右左・・・）　につけている学生もいるらしく、よほどひどい授業やよほど優れた授業でなければ、数値の差はほとんど誤差に近い。
・ＦＤ開始前は、授業の最後に、匿名で自由に感想、批判を書いてもらうよう、こちらで知りたいいくつかの項目を設定して学生に記述させており、それが毎年、大変役に立っていました。しかし制度化されてからは、二重になるので、こうした独自の調査が出来なくなりました。「毎回同じ質問ばかりで暗記してしまった」「紙の無駄」「面倒だから全部まんなかあたりにマークする」、という毎回聴かされる学生の声は、今の授業評価の問題のありかを端的に示しています。形骸化している、何のためにやっているのか分からない、という事実を学生は敏感に感じ取っています。そう感じながら提出されてくる調査票に、果たして実態は反映されているのでしょうか。年によって様々な条件に左右されて無意味な数値よりも、学生の生の言葉を聞きたい私にとって、今の授業評価で意味のあるのは自由記述欄の部分だけです。しかし、その肝心の部分を読ませて頂くことが、事務の方にはかえってご面倒をおかけすることにもなっているようで、独自にやっていた元の形に戻れたら、と考えざるを得ません。学生の出席率、授業への満足度、くらいは数値化してもよいでしょうが、制度化されることが本来の目的を見失わせている事実にも目を向けて頂ければ、と思います。
・厳しい教員の評価は低いのではないかという疑いを持つ。

◎授業公開

・授業参観などに，もっと多くの教員の参加協力が望まれます。
・授業公開を随時自由に実施するという議論が以前に出ていたように思いますが、看護学科の様子を見ているとまだまだ無理だと感じます。まだしばらくは公開者を指名して強制的に実施する必要性を感じます。
・授業公開について：自分なりのスタイルをまず築いてから参加しないと、全て他人の真似になりかねないので、まだ参加していない。しかし、良い工夫は参考にさせてもらう価値があると思っている。
・大事なのは中身で、公開授業の数は本質的ではない。　授業後の討論内容を送ってもらったことがあり、参考になったこともあった。
・授業公開はするのも受けるのも非常に有益と考えている。しかし、自分の授業と衝突したり所用があったりして聴けないのが現実である。何か良い知恵はないか？ 前後期に16週をとって、順繰りに1週を受講用に空けられるといいが、そんな時間の余裕はないか。

◎FDセミナー

・FDセミナーについて：最初の１～２回だけは参考になったが、もう役割は終わったのではないか？
・教員ニーズに合わせて開催するのが望ましく毎年予算をつけて開催を義務化するのは無駄に思える

◎シラバス

・シラバスもろくすっぽ読まず受講する学生も少なからずいます。掲示にもほとんど注意を払わない学生も多い。そもそも、ああいうシラバスが、「読む」ための内容（体裁も含めて）になっているのかどうか、壮大な資源のムダになってはいないかどうか、再検討すべきだと思います。

◎FD活動全般

・FD活動は非常に有意義なことだと思うし，授業を開演していく上で大変参考になった。
・本当の意味でのFD活動全般を否定しているわけではない。たとえば、授業参観も「当該講義担当教員の技能向上」と言う効果は少し疑問があるし、ましていわんや「常に緊張感を持っていつ誰に見られても恥ずかしくないようにしておく」といったものは逆効果だと思うが、「教員が授業方法について話し合う機会の提供」という意味ではそれなりに意義があったと考えている。
・本来の意味でのFDにあっては、もっと教員間で「学生の気質」や「学生の能力」等についての意見を交換し合い、さらにお互いの授業内容について情報を交換するようなことの方が重要な気もする。
・運用の体制は整ってきたように思いますが、教員の関心がいまだに低い（一部の教員だけが積極的）状態は変わらないように思います。
・文部科学省によるFD義務化、の具体的な内容は存じませんが、形式にとらわれるのはマイナスです。
・FD自体は今後とも継続すべきと思います。評価は上に書いたとおり安定していないので、対応も確定していませんが、それなりに半期を振り返るよい機会だと思います。
・FD活動は今後も継続すべき。
・これまでFD活動に参加していない教員に対して、参加を促す工夫が必要。

おわりに

法人化によって教務委員会FD部会は組織替えされ，教育担当理事を長とする学習支援チームとして発足した．チームは，FD事業の推進と，教育の情報化の二つを主たる使命としているが，この二つは異質なようで関係が深い．教育という共通点があり，組織的な活動に情報システムが不可欠だからである．

さて，本書はチームのFD活動を中心にFD報告書2005，2006に続く３冊目として著したものである．この間の事情を以下に若干振り返りつつ，最後に来年度の目標を記して閉じることとする．

2002年にFDのワーキンググループが発足し，2003年に試行的に事業を開始，2004年度はFD本格的実施というように，段階を経てFD活動を展開してきた．大学に奉職するまで，そしてその後も研究業績を中心に評価されてきた大学教員にとって，急に「教育を改善せよ」といわれても申し訳程度の自己点検が関の山である．2004年からFD部会長としてFDの責任者の立場にある私も，まったく自信がない．そもそも模範になる授業を見たこともない．サービス業の多くが，お客様の苦情をテコにサービスの方法や内容を改善していく世の常にならってまずは授業評価に力を入れた．当該学生にフィードバックできない学期末に紙で行う授業評価を続けた．効果なしの声も聞こえるが，全体や部局の傾向を知るには数年継続する必要があるとのFDフォーラムでの講演を頼りに続け，今年度ようやく教員へのアンケートを行い，点検作業を行うことが出来た．

FD担当メンバーも一新された今年度より，積極的に部局を中心に事業の企画・実施をお願いした．そして，3冊目の本書になって初めて部局別事業報告の独立した章を設けた．部局の特色や，事業への関心の向きが違うことがわかる．研修ひとつをとっても，看護福祉学部は教員の学外研修が定着し，学術教養センターは学内研修として講師を呼ばず，組織内でのカリキュラムに関する議論を深めようとしている．

今後は，チームは旗振り訳ではなく，個々の教員，個々の教科グループ，そして部局の教育改善授業を応援し，また他部局へ広報する役割を担うところに向かうのではないかと思っている．

- 授業評価結果の部局内点検
- 学生にフィードバックできる次段階の授業評価方法の検討
- 成績の評価方法についての議論やGPAの導入について研究する
- 全授業の公開，必要最小限の参観を促進する方策

以上は，3月のチーム会議で2008年度の目標につついて議論したものである．完全な合意を得ているものではないが，ゆっくり研究・協議しながら進めていく予定である．今後ともご理解とご協力をお願いする次第である．

教育学習支援チーム FD 担当リーダ　菊沢正裕

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2007

発 行 年 月　2008 年 3 月

編集・発行　福井県立大学教育学習支援チーム